
新谷壮介シリーズ S - P r o o f 2 狼の潮

H a r r y 英仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新谷壮介シリーズ S - P r o o f 2 狼の潮

【Nコード】

N9070E

【作者名】

H a r r y 英仁

【あらすじ】

大学生の新谷壮介は、ある事件で知り合った「ともだち」の遺志を受け、大神島の祭を訪れる。その島は開発計画により賛成派と反対派で真っ二つに割れていた。島を包む異様な雰囲気。島で出会った少女。そして祭の中に密む「狂気」。「祭」の日を境に、壮介の「惨劇の夏」が幕を開ける。(2/8こちらの操作ミスにより、過去に完結した作品であるのにも関わらず、先頭に上がってしまいました。大変失礼致しました。H a r r y 英仁)

第一章 はじまり

—

八月下旬。

お盆も過ぎ、混雑が峠を越えた名古屋駅に、しんたにそうすけ新谷壮介は降り立った。

この夏、壮介が名古屋駅に降り立ったのは、これで三度目。一度目と二度目は、七月末から八月初旬にかけて、恋人である岡本瑞希おかもとみずきと一緒に信州を訪れた。名古屋へはその行き帰りの経由地として降り立っていた。

「暑いな」

壮介はカバンのポケットに入れてあるハンドタオルで額の汗を拭う。空調の効いた電車を降りると、なんとも言えない熱気がムアッと押し寄せてくる。もうそこまで九月は来ているが、残暑は一層厳しさを増していた。

壮介は名古屋駅の改札を出ると、地下鉄の乗り場へと向かう。そしてハンドタオルをポケットへ仕舞うのと入れ替わりに、一枚のメモを取り出した。

この夏、壮介は趣味である写真撮影のため、恋人の瑞希と一緒に信州水崎を訪れた。

美しい風景の撮影、恋人との一時、現地で知り合った「ともだち」との出会い……。

その旅行は壮介にとって、とてもとても楽しいものになる……はずだった。

壮介はその信州水崎で、とんでもなく厄介な事件に巻き込まれてしまった。

その事件で、現地で知り合った「ともだち」は不幸にも犯人に殺

され、そして瑞希も重症を負った。

みんなを傷つけた犯人を見つけ出すことを誓った壮介は、警察と共に事件を追い、見事真相に行き着くことができ、犯人逮捕に至った。

壮介にとって、本来とは全く違う意味で、忘れられない旅行となつてしまったのだった。

そして事件が解決してからしばらく経った、ある日のこと。壮介に亡くなった「ともだち」の家族から連絡が入った。現地警察の方から、壮介が犯人逮捕に尽力したことを家族に伝えられたようで、一言お礼を言いたいとのことであつた。

壮介は「ともだち」が亡くなった後、その後どういう手続きがあつたのか全く知らなかつた。それこそ通夜や告別式に参列するといつた余裕すら、当時にはなかつた。だからせめて線香の一本でもお供えしたいと考え、「ともだち」の実家へ伺うことを約束したのだつた。

今壮介が手に持っているメモ、それには「ともだち」の実家の住所と電話番号が書かれてあつた。

二

名古屋駅を出発して三十分余で、壮介は目的地に到着。

そこは名古屋タワーを遠くに望む、古ぼけた団地の一角。壮介はメモを取り出し、棟番号と部屋番号を確認し、階段を登つていった。

『IIHASHI』

団地の二階、薄暗い廊下の一番奥に、その表札はあつた。

ここが目的地……信州水崎で亡くした、「ともだち」の家。

「遠い所、よくお越し下さいました」

チャイムを鳴らすと、「ともだち」の母親が壮介を出迎える。五十代前半で品のある感じだが、娘を亡くしたということもあり、その表情には小さな影が差していた。「ともだち」は一人っ子ということもあり、旅先での死亡を聞かされた時の両親の哀しみは、計り知れないものであっただろう。

「こちらへどうぞ」

天井の低い廊下を通り、壮介は居間へと案内される。六畳程のこじんまりとした部屋には小さな仏壇があり、そこには「ともだち」の遺影が飾られてあった。飾られた写真は、高校生時代のものなのか、「ともだち」はセーラー服を着ていた。

「……………」

壮介は遺影の前に正座する。最初手を合わせることもなく、ただ遺影を見つめている。その姿は、まるで二人にしか判らない声で、語り合っているようであった。

五分程そのような状態が続き、深くそして長い瞬きをした後、壮介は線香に手を伸ばした。

「どうぞ」

線香をあげた後、壮介は「ともだち」の母に紙袋を渡した。母が中身を確認すると、そこには無数の写真が入っていた。これらの写真には、信州水崎で撮影した美しい風景と背景に、「ともだち」の姿があった。これらは皮肉にも「ともだち」の生前最後の写真ということになる……。

正直、壮介はこれらの写真を、今日持つてくることを躊躇っていた。最愛の娘を失ったショックも癒えていない状態で、亡くなる直前の姿を撮った写真をみた場合、家族にどのような影響を及ぼすか、壮介には想像できなかったからである。

しかし壮介が訪問する直前に、家族の方から連絡があった。

「もし娘の写真があるなら譲ってほしい」

何でも「ともだち」は写真を撮るのは好きだが、意外にも撮られることはとても嫌らしい。よって学校等の集合写真以外で、本人がまともに写っている写真は殆んど無いそうなのである（事実、遺影は高校時代の写真が使用されている）。よって、こういう事情により、壮介はデジカメのデータをひっくり返し、少しでも「ともだち」の姿が写っている写真を持ってきたという次第なのだ。

「まあ、こんなに……。ありがとうございます」

写真を受け取った母は、一枚一枚噛み締めるように見入る。「ともだち」の姿が走馬灯のように蘇ってきたのか、途中から涙ぐみながら写真を眺めていた。

そして最後の写真を手にとった後、

ついに母は、声を出して、泣いた……。

そして壮介の目にも、光るものがあつた。拭うことはなかった……。

三

帰る前、壮介は「ともだち」の部屋へと通された。生前「ともだち」は東京の専門学校に通っており、学校の寮で生活を送っていた。その荷物を引き上げてきたということもあり、部屋は荷物で一杯。ただ家族により手入れされており、乱雑な感じは全くしなかった。「ん、これは？」

その中で壮介は見覚えのあるものを見つける。それは「ともだち」が信州水崎で出会った時に持っていたカバンとカメラであつた。

壮介はカメラカバーを外して手に持ち、ファインダーを覗く。レンズの向こうには、荷物により少し狭くなった「ともだち」の部屋が広がっている。

壮介はシャッターを切ることなく、カバーを手に取った。

その時、壮介はカバーについているポケットに、紙が挟まっていることに気付いた。壮介はその紙を取り出し広げてみる。

「なんですかそれは？」

壮介の横にいた母が、興味深そうに覗き込んできた。壮介はその紙を母に手渡した。

「よく判らないですけど、本人の撮影スケジュールみたいなものかなと」

その紙には乱雑な字で、日付と地名が書かれてある。中には地名に赤マルをつけたものまであった。

「たぶん、水崎で撮影を終えたら、実家の方に戻ってくる予定になっていたのでしょうね」

壮介の言葉に、母は頷く。この予定については事前に聞かされていたようで、しばらく実家で骨休めをするつもりだったらしい。

「家に帰ってきた後、何でも三重の方へ行くつもりにしていたようです。場所は、ええと……」

母は紙に書かれた地名を目で追った。そして、

「おおがみ……、確かここです」

母は紙に書かれた地名を壮介に指し示す。

おおがみしま
『大神島』

その文字の周りには、赤マルが何重にもわたって描かれてあった。「何でも、十年に一度行われる祭りがあるとか……そんな事を言っていました」

「ということは、水崎の後に、ここへ行こうとしていたわけですね」「そういうことになると思います」

壮介は再び紙を手を持った。「ともだち」は随分楽しみにしていたのか、赤マルはかなり強い筆圧で、書かれているようであった。

壮介はその紙越しに、「ともだち」のカメラを見つめていた。何かを思案しているのか、無言で見つめ続けていた。

そして壮介は「ともだち」のカメラに手を伸ばす。

「すみません、このカメラ、しばらくお借りしてもいいですか？」

壮介の唐突な言葉に、母は少し驚いた様子であったが、すぐに口元を緩めた。

「はい、どうぞ」

その言葉に、壮介は破顔し頭を下げた。

何故壮介は「ともだち」のカメラを借りたいなどと言い出したのだろうか。

その理由は、とても単純だった。

俺があいつの代わりに、写真を撮ってきてやる！

第二章 大神島

—

それから数日後、壮介は再び列車に揺られていた。名古屋へ行く時は、始点から終点までただ乗っているだけだったが、今回は途中で何度も乗換えをしなければならぬ。急行列車が普通列車になり、複線だったのが単線になり、車掌がいたのが、ワンマンカーになり、ついにはパンタグラフがなくなり……、乗換えをする度に列車の様子はどんどん変わっていった。

そしてそれとともに車窓からの風景も移り変わっていく。街から始まり、田んぼや茶畑の広がる山間部、そして目的地が近付いてくると、ソフトクリームのような入道雲の下、真つ青な伊勢湾がのぞき始めた。

その後列車は入り組んだ伊勢湾の海岸線を走り、一度内陸部へと入っていく。幾つかの駅を通過すると、再び海が眼下に広がった。

しかしその風景は先程の真つ青で爽やかな伊勢湾とは少し違うものであった。そこは入り組んだ入り江の中ということもあり、「真つ青」というよりどこことなく緑がかった海。また海には養殖や釣りのための筏が至る所に設置されていたりと、それはどこか塩っぱくなり、お世辞にも爽やかな風景とは言えないものであった。

そして列車は長いトンネルに入る。トンネルを抜けると、再び海は見えなくなつた。

「間もなく、^{うがた}宇方、宇方です……」

車内アナウンスが流れると、座席で眠っていたかのように首を垂れていた壮介は、顔を上げて立ち上がり、そして列車のブレーキがかかり始めた頃、扉の前へと移動した。

扉が開くと、外の熱気が壮介の顔面にムアツと襲いかかってくる。

それまで少々古いとはいえ、列車の快適な空調の中で過ごしていた壮介、その額には汗の雫が次々と浮かび始めた。

やや傾きはじめた太陽に、猛烈な熱気、遠くから聞こえる蝉の合唱……、まさに夏真っ盛りというカンジである。

壮介はカバンから取り出したハンドタオルで汗を拭きながら改札へと移動。最近整備された感のある駅舎を抜けるとロータリーがあり、そこには路線バスとタクシー数台が停車していた。

「ええと、どのバスだっけ？」

壮介は一枚の紙を広げ、独り言を言いながら頭を搔く。ここは壮介にとって初めての場所。右も左も判らない。

どこかに案内板はないかと、壮介はロータリー周辺をウロウロしている、一人の男性が近付いてきた。

「どちらに行かれますの？」

その男性はバスの運転手のようで、。。交通と刺繍された帽子を被っていた。

「あ、すみません。あの、大神島の船着場へ行くバスってどこから出てるんですかね？」

すると男性は振り返りロータリーを指差す。

「それなら三番乗り場、あそこに停まっている緑色のバスだよ。もうすぐ発車だから急いで！」

そういうと男性は壮介の背中を押して急かす。焦った壮介は男性への挨拶も早々に、ロータリーを走って横切っていった。

そしてバスに揺られること三十分。

駅前の広い道から、バス一台通るのがやっとの細い道を抜けて、ようやく船着場へと到着。この頃になると太陽はもう西の海へ傾き始めている。壮介が自宅を出発してからもう六時間以上経過していた。

船着場の停留所では壮介と一緒に三人の乗客が降車。この停留所が終着ではないので、降車が済むとバスは黒い煙を上げて走り去っ

ていった。船着場にはプレハブ小屋と、乗船するための橋が設備されていた。

「あれが大神島か」

橋まで移動した壮介は、その海の向こうに浮かぶ、一つの島を眺めていた。ここから一キロも離れていないであろう、手を伸ばせば届きそうな距離に、目的地である島が浮かんでいる。目を凝らしてみると島の対岸にいる人々の姿を確認することができる。

ほどなくして、対岸から一隻の船がこちらへと近付いてきた。

「よし、あれだな」

渡し船が近付いてきたのを確認した壮介は、一步前へ出る。

「違いますよ」

後方からの不意な声に、壮介は思わず振り返る。するとそこには先程一緒にバスを降りた女子高生が立っていた。腰のあたりまで伸びた黒髪に眼鏡……、見たカンジ真面目そうな娘だった。

「あれはホテルの送迎船です」

女子高生は無表情かつ抑揚のない言葉で壮介に説明する。その言葉に壮介は軽く会釈をし、そして女子高生へと近付いていった。

「渡船はいつ来るんですかね？」

「一応は十分間隔ということになっています。でも大概は対岸に人が来たら船を出すという形になっています。たぶん、そろそろ向こうを出港しますよ」

女子高生は壮介の問いに淡々と説明。ただツツケンドンな感じはせず、どこことなく知性を感じさせる受け答えである。

「そっか、ありがとう」

壮介は笑顔で礼を言い、女子高生の隣りに並び、渡船がくるのを待った。

そしてホテルの送迎船が到着した時、島から一隻の船がこちらに向かって出港した。

「代金はここ。百五十円ね」

船に揺られている時間はほんの五分。大神島の船着場に到着すると、曾孫がいそうなくらいの老船頭が壮介に指示を出す。一緒に乗った黒髪の女子高生は定期のようなものを老船頭に見せ、早々に立ち去っていった。

「ニイチャン、今日どこに泊まるんね？」

渡し賃を箱に入れ、船を降りようとした壮介に、老船頭は訊ねてきた。

その問いに、壮介はポケットから一枚の紙を取り出した。

「えっと、川住旅館です……」

「川住か……。旅館つっても、民宿に毛の生えたような所じゃがの。あのオレンジの看板の横の道を、ずーっと上がっていったら看板が出てるわ」

この老船頭、言葉は汚いが親切にも宿までの道順を丁寧に教えた。壮介は振り向き、老船頭に礼を言い、その場を後にした。壮介が港から出た頃、船は再び本土へ向けて出向していった。

『ようこそ 大神島へ！』

港を出た所にある休憩所らしき建物の横に、古びた島の案内板が掲げられている。島はそれほど広い面積ではなく、一周するのに一時間もかからない。二軒の観光ホテルと一軒の民宿が主な観光施設で、後は民家が殆んど。そして島の中央には神社があった。

「ここで祭があるわけだな」

壮介はそう呟きながら、この案内板をケータイのカメラで撮影した。これは地図の代わりということである。

そして壮介は案内板の前を離れ、船頭の言っていたオレンジの看板の方へと歩いていった。

「ん、あれは？」

港を出て、壮介は観光ホテルや商店、食堂などが立ち並ぶ十字路へと差し掛かった。その時、道路を挟んで右向かいに建つ商店から同じ渡船に乗っていた眼鏡をかけた黒髪の女子高生が出てきた。女子高生は手にビニール袋を提げ、壮介に視線を向けることなく、島の中央部へと続く道へと入っていった。

そしてその道は壮介の宿である川住旅館への近道でもあった。壮介はまるで女子高生の後を追うように道へと入っていった。

この島の中央部へと続く道、最初は両手を広げた大人が三人入りそうなくらいの幅があったのだが、進むに連れて次第に幅が窄んでゆき、最初の石階段についた頃にはやっとすれ違えるくらいまで狭くなっていった。

そしてこの石階段から、急に勾配がキツくなり始める。この大神島、平なところは少ないようで、家屋はまるで棚田のように段々に建てられていた。

黙々とただ石段を見上げて歩いていると、前に行く女子高生が不意に振り返った。

「何でついてくるんですか？」

女子高生は眼鏡越しに壮介へ訝しげな視線を送る。壮介が自分の後ろを歩いてきていたことに、もしかしたら最初から気付いていたのかもしれない。

「あ、いやあ……………」

壮介はバツが悪そうな表情。女子高生にまるで自分が不審者であるかのような目で見られたからであろう。苦笑いし、頭を掻いた。「スンマセン……。川住旅館って所に行こうと思って。こっちじゃなかったのかな……………」

すると女子高生の表情から警戒心が一気に消えた。

「あら、お客さんだったの」

そして女子高生は階段を下り、壮介の一段下まで来て振り返った。「私、川住旅館の娘、千草ちくさと言います。ではご案内します」

「え、あつ！」

川住千草は壮介に挨拶をすると、壮介が肩から提げていたバッグを奪い取り、階段を上っていった。

「いやあ、そんな悪いよ！」

さすがに手持ち無沙汰となったのか、壮介は千草を追いかけて、奪われたバッグに手を伸ばす。

「じゃあこれ持って下さい。今日の夕飯ですよ」

千草は振り返り、食材の入ったビニール袋を手渡した。

そして石段を駆け上がるように上っていった。

三

「ただいま」

延々と続く石段を五、六分上っていったところで、錆付いた小さな看板があがっており、少々読み難いが『川住旅館』と書かれていた。千草は看板の脇道へ入ると振り返り、壮介へ手招きをする。

「ここが……」

壮介も脇道へと入っていった。千草の後ろには、木造二階建てでかなり年代ものの建物があつた。

「どうしたの？ イメージと違った？」

「え、いやあ………」

壮介は頭を掻いた。船頭から「民宿に毛が生えたようなところ」と聞いていたので、あまり期待はしてはいなかった。壮介はそんな心の内を千草に見透かされたようで、バツが悪かったのだろう。

「フフ……、さ、どうぞ」

苦笑いを浮かべる壮介に、千草は口元を緩め微笑んだ。壮介には初めて見せる、違った表情。そして千草は壮介の方へ手を差し出す。壮介もそれに応え、川住の門をくぐった。

「千草おかえり。あら、後ろの方は？」

二人が玄関に入ると千草の母親が出迎えた。そして母親はすぐに

千草の後ろにいる壮介に気付いた。

「お客さん。確かお一人のお客さんいたでしょ」

「どうも、予約していた新谷と申します」

壮介が名乗ると、母親はフロント（と思われる場所）の前へ行き、ノートを開いた。

「ああ、新谷さんね。電話で予約してくださった。お待ちしております」

そして母親はノートを壮介の元へと持ってきた。ノートの表紙には「宿帳」と書かれている。

「これに今日の日付と名前、連絡先をお願いします」

母親はノートを壮介に手渡した。

「はい、鉛筆。あ、持ってきてくれてありがとう」

千草が壮介に鉛筆を手渡し、代わりに壮介の手から食材の入ったビニール袋を引き取った。

「まあ、お客さんに荷物持ちなんぞさせて、コラ！」

母親は千草の頭をコツンと小突いた。千草はエヘへと笑い、荷物を持って奥へと消えていった。

「さ、新谷さんもどうぞ。お部屋へご案内します」

その言葉に、壮介は靴を脱いで中へと入った。

四

「さ、どうぞ」

壮介は千草の母親に案内され、二階の客室に到着した。客室は六畳で、年代モノのTVと木製の丸い卓袱台が備え付けられており、卓袱台の上にはポットと急須、湯呑みが置かれている。それはこの旅館にもあるような風景であった。

千草の母親は先に部屋へと入り、奥の障子を開けた。窓の外には近所の民家の屋根が真正面にあり、屋根の間からは夕焼けに染まる夏の空と、僅かに海が覗いていた。

「夕食は六時から八時までの間、朝食は七時から八時までの間となつています。お風呂は一階で、昼の三時から朝の九時までご利用頂けます」

千草の母親は卓袱台の前まで移動し、急須にお湯を入れ、しばらく置いてから湯呑みにお茶を注いだ。

「どうぞ」

「ああ、ありがとうございます」

壮介はここでもうやく腰を下ろした。

「私、一応ここの女将をやっております、川住喜美恵きみえと申します。どうぞよろしく願います」

「一応」という部分をユーモラスに強調して、喜美恵は壮介にお辞儀をした。壮介もつられるように頭を下げた。

「新谷さんは確か二泊でしたよね？」

「え、ああ、はい。明日からの祭に参加しようと思って」

壮介がこの島へ来た目的。それは「ともだち」の代わりに、この島で催される祭りを写真におさめるため。

「ああ、そうですか。大神神社の祭に。よくご存知で」

壮介は苦笑いを浮かべた。この祭を選んだのは「ともだち」であるわけで、壮介が目星をつけたものではない。だから、祭について殆んど知らないというのが正直なところなのだろう。

「神社の祭は明日の夜になります。大したものではないですが、是非御覧下さいな。ではごゆっくり」

喜美恵は笑顔でそう言い、部屋を後にした。

五

夜。

夕食を終え、風呂から上がってきた壮介の部屋に、コンコンとノックする音が響いた。

「どうぞ。開いてますよ」

布団を敷き、そこに寝転がってＴＶを観ていた壮介は、起き上がり扉の方を向いた。

「こんばんは」

扉が開き、現れたのは千草だった。長い髪と眼鏡は先程と同じだったが、制服ではなく水色のワンピースと白いエプロン姿だった。

「ああ、こんばんは。夕飯おいしかったよ」

川住旅館に到着してから、今まで千草の姿を見ることはなかった。勿論、旅館の仕事をサボっていたわけではなく、夕飯の用意や、浴場の掃除等、家族一丸となってこの旅館を切り盛りしている。千草も重要な働き手なのである。あとこの旅館には父親で漁師をしている川住清太、祖母の川住千乃ちのが同居している。

「フフ、ありがとうございます。そりゃ腕によりをかせせてもらったから」

千草は笑みを浮かべながら、布団を敷いたため、壮介が隅の方へ寄せた卓袱台の横に座った。

「新谷さん、お祭を見物に来たんですってね。お母さんから聞きました」

「うん、写真撮影が趣味だね。祭の風景をおさめようと思って」それを聞いた千草はフーンと二、三度頷いた。納得しているというより、意外に感じている様子である。

「こんな辺鄙な島のちいさな祭が、よく目に留まりましたね」

壮介は苦笑いを浮かべた。「ともだち」の一件がなければ、壮介は祭どころかこの島の存在にすら気付くことはなかったであろう。

「祭は明日の十八時からです。それまで新谷さんはどうされるのです?」

千草は急須の注ぎ口を指で突つつきながら訊ねてきた。

「いやあ、特に決めてないけど。まあ島を探検してみようかな……」すると千草は身を乗り出してきた。

「それだったら、明日私が島を案内したげるわ。明日は学校もないしね」

おそらく千草は最初からこの提案をするために、壮介の部屋を訪れたのだろう。待つてましたというな様子であった。

「いや、それはありがたいけど……。でも悪いなあ、休みつても旅館の仕事があるだろ」

「その辺は大丈夫。お客さんの接待も仕事のうちだから」

千草は突付いていた急須を元の位置に戻し、そして立ち上がった。「それに……ね」

立ち上がり、扉の前まで移動した千草が、壮介の方を振り返った。その笑顔は、先程までの清楚なものとは少し違っていた。

「この島を何にも知らないで歩いていると、お化けにつれていかれちゃうかもよ」

どこか妖しい笑みを浮かべ、千草は壮介の部屋を後にした。

第三章 狼

—

翌朝……。午前五時。

旅館の朝は早い。東の空が白み始める頃、川住旅館の炊事場にはもう灯りがついていた。

朝食は七時からだが、六時半までには全て準備万端にしておかなければならない。この日は壮介の他に二組の宿泊客がいる。

この日の客は単なる観光客だが、これが釣り客になるともっと早くから用意しなければならない。中には朝食を用意し、客が出て行った後に、ようやく眠れるという時もある程。この辺りは釣りのポイントが到る所にあるので、そういった釣り客も珍しくはないのだ。

「千草ー、ご飯仕掛けてくれた？」

「うん。あ、アジの干物何枚解凍したらいい？」

「お客さんの分は六枚。あとうちの分四枚ね」

炊事場では千草と喜美恵が朝食の準備に勤しんでいる。朝早くから、テンション高く働いているが、二人にとってはもう慣れたものなだろう。父の清太はこれより先にもう漁に出かけてしまっている。まさに早起きファミリーである。

「ねえ、お母さん」

千草は冷凍庫から出てきたアジの開きを手に、自分の前を横切っ
つていこうとした喜美恵を呼び止めた。

「朝食が済んだら、私ちよっとお客さんと出かけるね」

それを聞いた喜美恵は意外そうな表情をみせた。

「別に構わないけれど、何の用で？」

喜美恵が表情を変えたのは一瞬。すぐに朝食の準備に戻り、手を動かしながら応えた。

「新谷さん、祭の前に島内を観光するんですって。だからガイドに

なろうと思つて」

「……」

それを聞いた喜美恵は無言……。娘の考えに呆れているのだろうか？

「……そうね」

しかしその表情には、どこか影がある。眉間にも皺ができていた。「この島、けっこう入り組んでいるでしょ。だから迷子になったら厄介じゃない？ それに……」

千草は持っていたアジの開きをステンレス製のテーブルの上に置き、ガスコンロの前へと移動した。

「……祭の前だから……ね？」

千草が言い終わると同時にボツという音がして、青い炎がゆらゆらと揺れていた。

その表情は笑っているのか、それとも晒っているのか……。

二

「ああ……、おはようございます」

七時過ぎ、二階からまだ寝ばけた表情の壮介が、一階の食堂へと現れた。壮介が食堂に入ると、食事が置かれたテーブルが三つ。先客は一組いて、もう食べ終わろうかという状況。あとの二つのテーブルは、手付かずの朝食が置かれたものと、もう食べ終わったもの。つまり、壮介が一番起きてくるのが遅かったというわけである。

壮介が自分のテーブルにつくと、炊事場へと続くドアが開き、喜美恵が味噌汁をお盆に載せてやってきた。

「おはようございます新谷さん」

「おはようございます」

挨拶はするが、壮介の目は完全に開いてはいない。壮介はまず目を覚ますため、喜美恵が持ってきてくれた味噌汁を口にした。

「今日はどちらへ行かれるのですか？」

喜美恵は食べ終わったテーブルを片付けながら、壮介に訊ねた。
それを聞いた壮介は、味噌汁のお椀を口元から離れた。

「ああ……、日中はあまり考えてなくて……。とりあえず祭までは
島を探検してみようかなって思ってます」

壮介はそう言いながら、寝癖のついた頭をポリポリと掻いた。

「そうですか、今日も暑くなりそうなので、陽射しには気をつけて
くださいね」

「あ、はい」

そして喜美恵は、片付けた食器をお盆に載せ、食堂を後にした。

「……………」

壮介は喜美恵の姿を追いながら、箸で目玉焼きを突っついていた。
そして喜美恵の姿が見えなくなると、ボソツと呟いた。

「えらく、わざとらしいな……」

箸で突っつかれた目玉焼きは、黄味の部分が破れ、半熟の黄味が
トロツと溢れだした。

朝食を終えた壮介は部屋に戻り、敷きつ放しの布団を片付け、着
替えを済ませた。着替え後、壮介は部屋の窓を開けた。視界に広がる
風景は、どこまでも青い空と、真っ白な雲と爽やかな夏の朝なの
だが、体感的には刺す様な陽射しと、染み渡る熱気、そしてセミの
けたたましい鳴き声で、これからどんどん暑くなってくることを、
壮介は身を持って感じた。

次第に額から汗が滲み出してきた壮介は、部屋の隅に置いてある
カバンからタオルを取り出し、汗を拭ってから首に巻いた。

「コンコン」

カバンからタオルを出したついでに中身の整理をしていた壮介の
元へ、千草がやってきた。

「おはよ。あれ、何だかオジさんみたいになってる」

この時の壮介の格好は、白いＴシャツにベージュのパンツ。それ
に首からタオルをかけているというもの。この旅館によく出入りし

ている釣り客のような格好だ。

「夏はみんなこんな格好になるんだよ」

そう言いながら壮介は千草の方へ振り返った。壮介の手にはカバンから取り出したカメラが握られている。

「あれ、カメラ？」

「そうだよ。この島に何しに来たんだよ？ 写真撮影が目的なんだから」

すると千草は壮介の元へと近付き、ジッとカメラを凝視。

「何か……カメラまでオジさんぽいね」

それを聞いた壮介は苦笑した。このカメラは壮介の私物ではなく、「ともだち」のカメラ。「ともだち」は男性ではなく、壮介より少し年上の女性だ。

「ところで、今日はどこを案内してくれるんだい？」

壮介は視線をカメラへ落とし、レンズを整備し始めた。

「うーん、適当と言ってしまえばそれまでなんだけど……、まあこんな島だから、いちいち名前のついた名所なんてそんなにはないよ。ぐるっと一周するカンジかな」

千草は人差し指を顎にあて、思索するように答えた。それはまるで計画性のないもので、あたかも今考えた様子。その眼鏡越しの視線は壮介の方を向いてはいなかった。

「……そっか、何か悪いな。わざわざ案内させて」

「いえいえ、お客さんの接待は、従業員の務めですから！」

千草はそう言って胸を張り、目を細めた。

そして次の瞬間、千草の瞳の色が若干変化したのを、壮介は見逃さなかった。

「それに……」

「お化けが出るから……かな？」

千草が言い切る前に、壮介が言葉を被せた。千草は一瞬目を丸くしたが、すぐに元の表情へ戻った。

「おかしい？」

口元を若干緩ませている壮介の表情を見て、千草は訊ねる。

「あー、はは……」

少しバツが悪く感じたのか、壮介は再びカメラへ視線を落として整備のため外していたレンズをボディに装着し、ジャケットを被せた。

「別にバカにしているわけじゃないけれど、それでも写真家の真似事をしている身なんですね。一度くらい、そういうものに対面してみたいね」

そして壮介は立ち上がり、千草の元へ近付いた。

「それじゃ、案内よろしく！」

壮介は敬礼ポーズを作り、先に部屋を出て行った。

そしてその後へ続くように、千草も部屋を出て行った。

「フフ……」

千草の口元だけが、微かに緩んでいた……。

三

トゥルルル……

セミの鳴き声以外何も聞こえなかった部屋に、電話の呼出音が響いた。三、四回鳴った頃、パタパタと畳の上を早足で駆ける音が聞こえてきた。

「はい、もしもし……」

受話器を取ったのは若い女性。受話器の向こうからは、これもまた女性と思われる声が響いている。

「そう、もうすぐ船着場に着くのね。今から迎えにいくわ」

その後女性は何度か相槌をつてから、受話器を置いた。そして開け放たれていた窓とカーテンを閉め、押入れから扇風機を引っ張り出した。

「これ、まだ使えるかしら？」

女性はコンセントをつなぎ、スイッチを押した。すると扇風機の

羽は、ブーンという音を立ててゆっくりと回りはじめた。

「よし、いけるね」

女性はスイッチを切り、部屋から出て行った。

その女性、歳は二十代前半くらい。今まで何かの作業をしていたのか少し桃色がかった頬には雫が滴っている。女性は服の袖で汗を拭い、ゴムで束ねていた黒髪をパサッと下ろした。その黒髪は肩の下くらいまで流れていった。

「この格好でも大丈夫だよ……ね」

女性は水色のワンピースという、至って部屋着というカンジ。

部屋を出た女性は玄関へ向かい、下駄箱から白いサンダルを取り出し、それを履いて外へ出た。

「一年振りか……。だんだん帰ってくる間隔が長くなってきてるね」
女性はそう呟き、小走りで船着場の方へと向かっていった。

女性が走り去っていく姿を、玄関から見ている眼があった。

その眼はまるで獲物を睨みつけるような、そんな鋭い眼光をしている。

その眼は瞬きすることなく、ただただ玄関の向こうに広がる外の世界を睨んでいた……。

四

ミーン、ミーン、ミーン……。

セミの鳴き声が大きくなっていく度に、陽射しが強くなっていく。

壮介の額や首には汗の雫が無数に浮かび上がっていた。

「今日も暑くなりそうですね」

「そうだな……」

壮介は首にまいていたタオルを解き、それで額の汗を拭った。それでも汗は次から次へと浮かび上がってきて、完全に拭き取ることできない。

「で、これからどこに行こっか？」

顔面汗だくの壮介とは対照的に、全く汗をかいていない千草が涼しげな笑顔で訊ねた。

「案内される側の俺に聞かれても、困るんだけどな」

「冗談ですよ。取り合えず港の方へ下りてみましょうか」

千草を先頭に、二人は港の方へ続く石段をゆっくりと下っていった。

しばらく下っていくと、石段の終わりが二人の眼下に現れ、船着場前の十字路へと出てきた。

「ん、何か人がいっぱいいるな」

昨日、壮介が島へとやってきた時と、船着場の様相が少し変わっていた。昨日船着場には人なんて殆んどいなかったが、今日は朝から数十人の人々が何やら慌しく作業をしており、とても賑やかになっていった。

「ああ、祭の準備ですよ。ほら」

千草が壮介の横に立ち、指を差した。その方向には白いテントが建てられており、そのテントには「大神祭実行委員会」という文字が刻まれている。そしてそのテントから数人の男衆が、「大神祭」を書かれた幟を抱えて出てきて、船着場のあちこちに設置していた。

「お昼までには、神社に続く石段にも、あの幟が立てられますよ」

「へえ、けっこう大掛かりにやるんだな」

「まあね。他に何かある島ではないから……」

千草の言葉に、壮介はゆっくりと振り返った。

「……………」

千草が言った言葉は、何でもない言葉。

しかし、その口調には、これ以上ないくらいの「皮肉」が込められているような感じだった。

「どうかしましたか？」

自分の方を怪訝な表情で見つめ、声を発しない壮介に、千草は顔をしかめた。

「え、い、いや……」

バツが悪くなった壮介は頭を掻いた。様子のおかしい壮介を見て、千草は首をかしげつつ、歩を進めた。その足は船着場の先へと向かっている。

そして船着場の先端まで歩き、そこで立ち止まった。壮介も後を追いついて、先までやってきた。

二人の周りには、船を待つ客はおらず、祭の幟を設置しようとしている男衆が二人いるのみ。

「新谷さんは、大神祭について、どのくらいまでご存知ですか？」
千草は壮介の方へは振り返らず、目の前に広がる海のどこかを見つめながら訊ねてきた。

壮介は答えに困った。この島に来たのは、あくまで「ともだち」の代わりに撮影に來ただけであり、この島のことや祭の概要について殆んど知らない。

知らない……というより、判らなかつた。この島について、場所やアクセス方法までは簡単に調べることができたが、この島の概要、特に祭についての資料が殆んど出てこなかつたのだつた。

「フツ……」

壮介が応えに困っていると、笑い声が聞こえ、そして千草が振り返つた。

確かに口元は緩んでいた。しかし眼鏡越しの瞳は……、
「無理もないです。何せこの島は、忘れられた島ですから」

千草は長い髪をかき上げ、壮介の方へ向かつてきた。

「……」

壮介の表情から「緩み」が消えた。口を真一文字に結び、背筋がピンと張る。

「どうして、忘れられたと思います？」

千草は壮介の前に立ち止まろうとせず、歩を進めた。

そして、壮介の横に並んだ時、囁くように口を開いた。

「自分たちが、それを望んだからですよ」

その言葉、誇らしげとも、嘲笑しているとも取れた。千草の言葉に、夏の陽射しが原因ではない汗が、壮介の頬をツーツと流れていた。

周りから見れば、特段何てことはないやり取りなのかもしれない。しかし壮介にはどうしても、そう感じる事ができなかった。

千草の口元は確かに緩んでいた。

しかし、千草の眼鏡越しの瞳は……まるで別人のようだった。

壮介はワシャワシャと、何かにとり憑かれたように両手で頭を掻きまわった。

五

「そうか、帰ってくるんだね。久しぶりだなあ、チエちゃんの顔を見るのは」

「はい。私もお姉ちゃんとは去年の祭以来で……。お正月もなんだかんだで結局帰ってきませんでしたから。やっぱり街が楽しいみたいです」

「まあね。チエちゃんもすっかり街の色に染まってしまったのかね。こんな島でも、なかなか捨てたもんじやないと思うんだけどなあ」

「そうです」

船着場の入口、古びた待合所の脇で、水色のワンピースを着た女性と、眼鏡をかけた中年男性が話をしている。二人は横に並び、海の向こうを眺めていた。

「しかし、遥ちゃんも大変だねえ」

「いえいえ、私はもう慣れましたから」

遥という名の女性は目を伏せ、微笑んだ。

その後もしばらく談笑していると、海の向こうからプップツという音が聞こえてきた。それは対岸に停泊していた渡船が鳴らしたものの。

「来るね。行こうか」

「はい」

二人は待合所から離れ、船着場の先へと歩いていった。そしてその時、二人の前から歩いてくる人影があった。

「あら」

遥たちはそのうちの一人に見覚えがあった。長い黒髪に眼鏡、千草である。

「千草ちゃん、こんにちは」

「あ、遥さん。はるか こんにちは」

顔見知りの二人はお互い軽く挨拶を交わす。そして遥の視線は千草のすぐ後ろへ向かった。

「ああ、この人は新谷壮介さん。うちのお客さんで祭の見物にいらしたの」

遥の眼の動きに気付いた千草は、壮介の前からスッと横に移動した。

「どうも、こんにちは」

「どうも……」

壮介と遥は軽く挨拶を交わした。すると千草は遥たちの横へと移動した。

「新谷さん、紹介しておきます。こちらが加美遥さん。かみはるか この島の網元で一家を切り盛りされています」

千草の紹介に、遥は目を伏せ苦笑いをした。

「そしてこちらが瀬川智寛先生。せがわともひろ 昔島にあった分校の先生。今は本土の学校に勤務されています」

「どうも、こんにちは」

「どうも」

千草の紹介の後、瀬川は右手を壮介の方へ差し出してきた。少し遅れて壮介も右手を差し出した。

「先生に遥さん、今日は祭の準備でここに？」

一通りの紹介を済ませた千草が、二人に尋ねた。

「違うよ。僕は……アレだから。たまたま港の前を通りかかったら、

遙ちゃんに会ったんだよ。今日チエちゃんが帰ってくるんだって」すると千草が驚きの表情をみせた。

「へえ、千絵子さんが。すごく久しぶりな感じがしますね」

そして千草、遙。瀬川が三人輪になって談笑しはじめる。三人は顔見知りでなかなか仲も良さそう。そんな姿を壮介は脇でポツンと眺めていた。

「ああ、ごめんなさい。置いてけぼりにしちゃって」

しばらくして、脇で小さくなっていた壮介に気付いた千草が、パッと壮介の肩を叩いた。

「別に気にしていないよ。遙さんのお姉さんが久しぶりに帰ってくるんでしょ？」

脇で小さくなっていた壮介だが、三人の話の内容は、大まかに掴めていた。遙が船着場にやってきた理由は、一年振りに帰ってくる姉の千絵子を迎えにきたということ。

「そろそろ行こうか。船もうすぐ着くよ。君たちも来るかい？」

瀬川がそう切り出したので、四人は一緒になって船着場の先へと移動した。

その移動の途中、千草は遙に近付き、耳元で何か囁いた。

遙は少し戸惑っているような雰囲気だったが、最後は首を縦に振ると、千草は顔を耳元から離れた。

そして今度は壮介の方へ顔を近付けてきた。

「ん、何？」

壮介の問いかけに、千草は耳元で囁いた。

「会わせてあげますよ……お化け」

六

渡船が船着場に停泊すると、船内から次々と人が降りてくる。やはり祭当日のためか、昨日壮介がやって来た時よりも人数は多い。中には祭の法被を着た人もいたりして、その殆んどはこの島の関係

者らしき様子であった。

そしてそんな地元の匂いしかない中、明らかに趣の異なる雰囲気グループが混じっていた。

穏やかな片田舎には凡そ似つかわしくない、メッシュの入った金髪にギャルメイク。まるで渋谷のギャルがそのままの格好でやって来たというカンジ。

壮介が何者かと視線を送っていると、その姿をみつけた遥と瀬川が前に出た。

「お姉ちゃん、こっち！」

するとギャルのグループはその声に反応し、右手を挙げた。

「遥、久しぶり！」

右手を挙げたのは長い金髪に、黄色いＴシャツ、ローライズのデニムパンツという、いかにもな格好。このギャルこそ、遥の姉である加美千絵子である。

そして千絵子の後ろには千絵子と同じようなでたちの少女と、

金髪で真っ黒に日焼けした少年が続いていた。

「志都美ちゃんもお久しぶりですね。えっと……そちらは？」

「アタシの新しいカレシの洋二君だよ」

志都美は洋二の腕に絡みつきなから笑顔で応える。

「ども！ 丸桑洋二つていいいます」

洋二は遥に対して軽く会釈をした。まるでギャル男のような喋り方だ。

「ん？」

千絵子の視線は遥の後ろへと向いた。そしてその中で、見慣れない人物を発見していた。

「アンタ誰？」

千絵子は壮介の方へ指を差して訊ねてきた。その表情には露骨な警戒心が表れている。

「お姉ちゃん、指を差さないで！ この方は千草ちゃん所のお客さんで、新谷さんといいます」

「ふーん……」

千絵子は目を細め、壮介の顔を凝視する。しかし興味深くというカンジとは違い、どうでもいいというのが、千絵子の表情から見て取れた。

「チエちゃんはいつまで島に滞在するの？」

微妙な空気を察知したのか、瀬川が話題を切り出してきた。

「ああ……、明日には帰るよ。祭を見に來ただけだから」

千絵子は大きく背伸びをしながら応えた。背伸びの最後には大きな欠伸もついていた。

「チエ先輩、こちら先に行くね。荷物置いてきたらメールするから」

「あ、オッケ！」

そして志都美と洋二は軽く挨拶をして、先に船着場を後にした。

「……………」

壮介は二人の背中を目で追った際に身体を反転させた。

その時、壮介は港の異様な雰囲気気付いた。

「……………」

それは港に集まる人たちの視線という視線が、自分たちの方をむいていたからである。

確かに千絵子の一団はとても派手で目を引く存在である。しかしここまで注目されると、何だが異様であつた。

そして異様なのはそれだけではなかった。

その視線を送る人たちの表情……それは決して好意的なものではない。

壮介の眉間には一筋の皺と、一筋の汗が浮かぶ。

そんな時、横にいた千草が咳払いをした。

「こんな所じゃなんだから、ちょっと移動しましょうか」

「……そうですね」

千草と遙も、港の異様な雰囲気を察知したのだろつ。周りの人間をせかすように歩き始めた。

「そつだ遙、私たちも島一番のお屋敷にお邪魔してもいいかしら？」

「えっ？ …… ええ、勿論」

遙は少し驚いたような表情をみせたが、すぐに元に戻った。

「いいですよ？ 千絵子さん」

「別にいいけど……。そのニイチャンも来るわけ？」

千絵子が再び壮介に向かって指を差そうとしたが、寸前で遙が払い落とした。

「勿論！」

「そんな胸張られてもね……。好きにしたら」

千絵子は壮介に対して心を許していないので、乗り気ではないようだ。

壮介はそんな千絵子に軽く頭を下げた。

「何かパツとしないねえ」

千絵子は壮介の顔を見て、ため息をつくような感じで言った。

それに対して壮介は頭を掻きながら苦笑いを作った。

「先生はどうされます？」

遙の問いかけに、瀬川も苦笑いを作った。

「いや、私は遠慮しておくよ。私が一緒に行くと、色々マズいからね……」

そして港の出口にさしかかった所で、一行から瀬川が抜けた。

瀬川は手を振りながら、観光ホテルが立ち並ぶ一角へと消えていった。

瀬川を見送った一行は、島の中央部へと続く石段へと向かって歩き始めた。

「下りてくる途中、おっきな屋根があったでしょ？ あそこが加美家なの」

壮介の横に並んで歩く千草が、そう説明する。

しかし壮介は千草の声には反応しなかった。

壮介の頭の中は今、何か釈然としないものが渦巻いていた。

それは全て港での一幕に原因があった。

自分たちを、まるで睨みつけるかのように見ていた島民たち。

そして瀬川が去り際に言った言葉……。
壮介はそんなモヤモヤと喧嘩するかの如く、頭をガリガリと掻き
筆った。

七

石段を五分程登った所で、先頭を歩いていた遥と千絵子が左の脇
道へと折れた。壮介が二人の後を追っていくと、周囲とは明らかに
大きな違う屋根が顔を出した。遥と千絵子はその屋根の屋敷の中
へと入っていった。

「あそこか」

「そ、ささ行きましょ」

立ち止まって遥たちの背中を眺めていた壮介の背中を、千草が後
ろから押した。

「フフ……」

背中を押す千草は、何故か薄く、まるで悪戯っ子のような笑みを
浮かべていた。

「判ったから、そんな押すなっ」

門をくぐると、玄関先で遥が待っていた。

「さ、どうぞ」

遥は笑顔で壮介たちを招き入れる。

「あ、はい。お邪魔します」

壮介は遥に軽く頭を下げ、玄関へと入った。

そして視線を玄関先に立つ遥から、正面の屋敷内へ向けた。

「うわっ！」

次の瞬間、壮介は驚きの声を上げ立ち止まった。千草に後ろから
押されていたということもあり、背中を反るような体勢になっ
てしまったため、思わず尻餅をつきそうになってしまった。

そして後ろにいた千草は、もう壮介の後ろにはおらず、遥の横に
立っていた。

まるで今の壮介の反応を予想していたかの様。

壮介はどうしてこのようなリアクションをとってしまったのか？それは玄関奥の「あるもの」を見たからである。

それは一見してとても恐ろしい物で、その眼光は見る人全てを威嚇し、喰らい尽くしてしまうのではと錯覚する程のモノ。

鋭い眼光、口元から覗く鋭利な牙、そしていつ飛び掛ってきてもおかしくないような低い体勢で、それは壮介を睨んでいた。

まるで目の前にいる獲物を狙うかの如く……。

「これは……狼？」

よほど驚いたのか、左胸を抑えた状態で、壮介が声を絞り出した。玄関で壮介が目の当たりにしたのは、狼の剥製であった。

「あらら、こんなに驚くとは思わなかったな……」

千草はこの壮介のリアクションは予想外だったようだ。

「すみません」

何故か頭を下げる遙に、壮介は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「いやいや、こちらこそ……。で、これは？」

壮介の言葉、前半の部分は遙に向けたもの。後半の部分は千草に向けられたもの。

「これだろ？ お化けの正体は」

すると千草はニヤツと笑った。

「正解。これが新谷さんに見せたかったものの一つ。我らが大神島の守り神、大狼様よ」

千草は先に家へと上がり、壮介に手招きをした。それに応えて、壮介も靴を脱いだ。そして壮介は玄関奥に鎮座する剥製へと近付いた。近くによると、剥製の精巧さと大きさを実感することができる。「大神島は別名狼島と言われていて、昔から狼を神の遣いとして祀ってきたの。今日行う大神祭もその名残なの。今でも狼を島の守り神として、みんな畏れている」

狼について語る千草は、今まで壮介が見てきた千草とどこか違っていた。

どこか大人っぽく、そして神秘的な感じだった。

「島の年寄りらは、今でもこの島のどこかに狼が潜んでいると信じているわ。だから、夜一人で出歩くのは、この島ではタブー中のタブーなのよ」

壮介は千草の説明を聞き、狼の剥製をまじまじと見つめる。

そして壮介はあることに気付いた。

「あのさ、これって……」

すると、千草がニヤツと笑った。それは先程壮介の背中で見せたものと同じ。

「そうよ。それは二ホンオオカミでもエゾオオカミでもない。日本の狼はこんなに大きくならないもの」

すると玄関で靴を揃えていた遙が、壮介たちの元へとやってきた。「この剥製は私の祖父が海外へ旅行に行った際、現地で購入してきたものです。確かに大神島は狼を祀っていますが、直接的な関係はありません。さ、こちらへどうぞ」

遙が奥へと続く廊下へ、壮介を誘った。興味津々の壮介は狼の剥製に釘付けとなっていたが、千草に背中を押され、仕方なく奥へと移動した。

剥製は壮介の方を向くことはなく、ただただ玄関先へ、その鋭い眼光を放ち続けていた。

八

「大神島について一番古い記述は室町時代の物で、その当時は罪人の流刑地だったようです。その後江戸時代初期頃に近くの漁民らが島に居を構え始めたと言われています。大神祭がいつ頃から始まったかについてはよく判っていません。江戸時代にはこの辺りにも二ホンオオカミがいたという記述が、当時の文献に残っているのです。狼という存在が島民にとって身近な存在であったことは確かなようです。どういう経緯で狼を祀りはじめたのかは諸説あります。那智

大社の神が狼に姿を変えてやってきたとか、元々土着の信仰があったとか……。ただ当時の島民にはかなり畏れられていたのは事実のように、文献によると明治になるまでは島の娘を生贄として捧げていたという記述がいくつもあります。そして明治以降からは島独特の神楽を奉納していましたが、この神楽を取り仕切っていた宮司様が戦災で亡くなってしまい、終戦後からは神具を祀る儀式を行うことで、祭を残していくことになりました」

加美家において、壮介は祭についての説明を遥から受けることになった。千草より遥の年齢を聞き、自分よりも若い十九歳と聞いて少々驚いていた壮介だったが、祭のことを伝える遥の姿はとても凛としており、歳上である壮介が思わず固まってしまう程であった。そしてそんな遥とは対照的に、姉の千絵子は遥の隣で足を崩し、一人黙々とケータイをいじっている。島のことなど我関せずという感じである。

遥も千草も、そんな千絵子の姿を咎めようとはしない。この二人は千絵子がどんな性格をしているのかイヤという程知っているのだから。だからあえて声はかけない。言うだけ無駄と踏んでいるのだから。

そして遥の話が終わる前に、ケータイをいじりながら何の挨拶もせず、部屋を出て行った。

「スミマセン……」

壮介と千草が加美家を出発する前、遥が壮介に向かい頭を下げた。言葉には出さなかったが、これは千絵子の無礼を詫びたものであった。

「いやいや、はは……」

壮介もバツが悪そうに頭を掻いた。正直、壮介も最初は気になっていたのだが、遥も千草も一切咎めようとしなかったため、気にしないようにつとめていたのだ。

「遥さん、それじゃ私たちはこれで。突然お邪魔させて頂いてあり

がとうございました」

「ううん、こちらこそ。いつでもいらして下さいね」

遥は笑顔でそう応え、壮介と千草を見送った。

「遥さん！ それじゃ、また祭の時にね！」

「はい！」

千草は手を振って応え、石段を登っていった。

そして壮介は遥の方に軽く頭を下げ、千草の後姿を追いかけた。

そして二人の姿が見えなくなり、遥は屋敷の中へと戻った。

「あら、姉さん」

玄関を上がると、廊下に千絵子が立っていた。その手にはケータイが握られている。

「これから志都美らと会ってくるから。帰ってくるのは祭が終わった後ね」

そう言つと、千絵子は遥を横切り、玄関へと下りた。

「さっきの……、変なヤツだね。ずっと目泳いでたよ」

「姉さんがあんな態度とってたからですよ、きっと」

「フン……」

そしてその後、千絵子は何も言わず加美家から出て行った。

「……………」

遥は振り向かなかった。

振り向かなかった遥の視線の先、

そこには狼の剥製があった。

第四章 大神島開発計画

—

加美家を出発した壮介と千草は、再び石段を上り始めた。そして川住旅館の看板も通り過ぎ、壮介がまだ登ったことのないところで、石段が上がっていった。

太陽はちょうど二人の真上にさしかかろうとしている。千草は相変わらず涼しそうな表情でいるが、壮介の方はまるで頭から水をかぶったかのようになっていた。壮介が首にまいたタオルは吹き出る汗により、徐々に湿り気を帯びてきていた。

そして次第に壮介の息が荒くなってきた。膝も以前より上がらなくなってきた。不意に壮介は顔を上げると、さっきまで二、三段前にあったはずの千草の背中が、いつのまにか小さくなってしまっていた。

石段の途中で千草が立ち止まった。壮介が遅れてきていることに気付いたのだろう。しばらくして、ゼーゼーと息を切らした壮介が、ようやく千草の元までやってきた。

「大丈夫ですか？」

大汗をかき、膝が笑っている壮介とは対照的に、千草はケロっとしている。ただ、やはりこの炎天下、額には汗が滲んでいた。

「ああ、ゴメン……。凄いね君は」

「いやあ、慣れですよ、慣れ。この石段は子供の頃から駆け上がってきましたから」

確かにこの石段はこの島で暮らす人々にとってみれば重要な生活道路。大して誇るようなことでもないのだろう。

「それじゃ行きましようか。てっぺんまでもうすぐですよ」

千草はそう言うと、再び石段を上がりはじめた。

「……かなわんな」

壮介は千草の後姿を追いながら、小さな声で呟いた。

「さあ、着いたわよ」

石段の頂上で、千草がヘトヘトになりながら後をついてきた壮介に手招きをする。

「はあ、はあ、着いたー」

壮介はまるで最後の力を振り絞るかのようになり、最後の石段を踏みしめる。そしてそれまで下を向いていた壮介は千草のいる方へ顔を上げた。

壮介は周りを見渡した。そこはやや開けた広場のような場所で、その奥には鳥居が建っており、その鳥居の奥には神社らしき建物があった。

ここで壮介はこの場所には自分たち以外にも人がいることに気付いた。その大半は祭の準備をしている人で、幟を立てている人や、縁日の準備をしている人と様々である。

「ここが祭のメイン会場よ」

壮介は首に巻いていたタオルをほどき、顔をクシャクシャに拭いた。そのタオルを絞ると、ポタポタと汗の雫が滴り落ちた。

「これが大神神社ってわけですか」

壮介は再びタオルを首に巻き、そして肩にかけていたカメラを構え、鳥居に向かってシャッターを切った。

「あ、ちよつと待っててね」

カメラを構え続ける壮介を残し、千草はどこかへ行ってしまった。しかしすぐに戻ってきて、どこから持ってきたのか、お茶の入った紙コップを壮介に差し出した。

「ああ、ありがとう」

紙コップを受け取った壮介は、お茶を一気に飲み干した。

「紙コップ、もらうね」

「ああ」

空になった紙コップを千草へ渡すため、壮介は千草の方へ向き直

った。その時、千草の後ろに、恰幅のよい白髪の老人が立っていることに気付いた。

「……………」

最初壮介は全く無関係の人だと感じたが、不意に目が合った時、壮介に向かって口元を緩めたので、思わず目を見開いた。

「先生、紹介しますね。この人は新谷壮介さん。今日の祭を見物にいらしたの」

紙コップを受け取った千草は、「先生」と呼ばれた老人に壮介を紹介した。

「新谷さんにも紹介します。こちらの方は島のお医者さんの喜志先生です」

突然の対面に壮介は戸惑ったが、条件反射的に軽く頭を下げた。すると喜志は一歩前に出て、右手を差し出してきた。

「どうも、喜志です」

その言葉は、千草や遥とは違う、訛のキツイもの。壮介は再び軽く頭を下げ、左手を差し出した。

「千草の紹介どおり、こんな爺じゃが医者をやっとるで」

表情は老人独特の気難しさを含んだものではあるが、その言葉はどこか親しみ易さを感じることができたものだった。

「千草から聞いたが、君は祭を見物しに来たんだってね。どうや、今からうちまで来んか？ 祭についての資料がいくつかあるでな。美味しい茶菓子もあるで」

喜志は独特のイントネーションで壮介に切り出してきた。

壮介は千草の方をチラッと見る。すると千草は悪戯っ子のような笑みを浮かべていた。

おそらく、最初から喜志と引き合わせるつもりだったのであろう。話の進展が異様に速い。

「はあ、よろしいんですか？」

おずおずと壮介が応えようと、喜志は壮介の肩をポンポンと叩き、下りの石段へと促す。

「千草はどうする？」

「あー、私は一旦旅館に戻ります」

そう言くと、千草は先に石段を下りていった。壮介には軽く合図をするだけだった。

「何か、唐突だなあ」

何の予告もなしに、千草が離れるという展開に壮介は戸惑う。

そして一変した千草の対応に、ただ首を傾げていた。

すると、喜志が壮介の腕を軽く小突いた。

「あれじゃよ」

喜志がチラッと視線を送った方へ壮介は顔を向けた。そこには法被に鉢巻姿で幟を数本抱えている男性の姿があった。

「あれが千草の父、清太じゃ。清太は祭についてはこの島で一番熱心な男。娘が油売っているのを見つけたら、そりゃ大きな雷が落ちるというものじゃて」

「なるほどね」

見ればこの清太が一番激しく動いており、また同じ法被を着た者たちに怒声を飛ばしている。祭の準備を取り仕切っているのだろう。「それに、最近清太らは気が立っている。親子仲もそんなに良くはないだろうて……」

下りの石段へと移動している際、喜志がポツリと呟いた。

「え、そうなんですか？」

「まあ、早う行きましようて。それも含めてお話しますよ。色々ね……。どうせ、それがあの娘の狙いなんじゃろうて」

この時、喜志の言葉の意味を、壮介は掴みかねていた。自分の知らない所で、自分が関係した「何か」が動いているような感じがしていた。

そして壮介は、この喜志の言葉の意味を、嫌というほど知っていくことになる。

本当に、嫌になるほど……。

大神診療所

港の近く、年季の入った木造の建物に、これまた年季の入った看板が掲げられていた。「休憩中」のプラカードが下がったドアノブを回すと、何の抵抗もなくドアは開いた。鍵はかかっていない。

「田舎じゃからな」

壮介の表情をみただけで、喜志はそう呟いた。

別に空調が入っているわけでもないが、ひんやりとした院内。そして病院独特の匂いが壮介の鼻孔をついた。

壮介は喜志の後についていった。建物に負けず劣らず年季の入ったソファや扇風機の置かれた待合を抜け、喜志は診察室らしき部屋へと入っていった。

「これに座って、ちょっと待っててな」

喜志は診察室の隅からパイプ椅子を持ってきて、壮介の前に置いた。そして自分は診察室から出て行った。

「……………」

壮介以外誰もいない診察室。遮光性の強いカーテンがこの部屋を強い陽射しから守っているため、夏とは思えないくらいひんやりとしている。

壮介は落ち着かず、辺りを見回した。診察室にあるものも、例に漏れず年季が入っている。まさに田舎の診療所そのものであった。

喜志が出て行ってから数分後、ガチャガチャと何やら音が聞こえてきた。

「はいよ」

音が診察室の前で一旦止まると、喜志が左手に本、右手に湯飲みをのせたお盆を持って現れた。

「ここは、先生おひとりでされているんですか？」

喜志がお茶と一緒に出した茶菓子を食べながら、壮介は訊ねた。

「ああ、わし一人じゃ。前はうちの女房が手伝ってくれてたんだがの、三年前に癌で先に逝つてもうた」

「ああ……、そうなんですか」

それを聞いた壮介は思わず視線を落とした。

「別に気い遣わんでええ。もう、昔の話じゃて……」

喜志は特に気にするようなそぶりもみせず、壮介に向けて口元を緩めた。

「それで、どうじゃて？ その本」

壮介は茶菓子を食べ始める前、喜志が持ってきた本に目を通していた。本……というよりも雑誌や新聞の記事を纏めて製本したもので、どちらかというスクラップブックのようなものだ。

そしてその本は、大神島に関する記述が殆んどで、特に祭について多く割かれていた。

記事の内容については、加美家で遙に聞いたことと重複していることが殆んどで、目新しい情報は、残念ながら得られなかった。やはり大神島に関する情報は、そもそも少ないということに間違いなかった。

ただ、壮介には一つ気になることがあった。それは本の最後に書かれた製作者の名前。そこには「大神島民生活を守る会」となっていた。

「守る」とは一体どういうことなのだろうか？ 「守る」と掲げる以上、この島の生活が何らかの「危機」に瀕しているというのだろうか？

「守る」……。この島で今起こっていることで、こう表現するとは、少し違うかもしれない。

ただ、今この島は、一つの転機を迎えようとしていた。

「……」

壮介が最後のページを注視していると、喜志は何も言わず診察室

の机の本立てから、ある冊子を取り出し、壮介に手渡した。

「これは……」

冊子の表紙には「大神島観光開発計画」と銘打たれてあった。

「今、大神島はな、この計画で真つ二つなんじゃて」

喜志は複雑な心境を表してか、言い終わった後、口はへの字に曲がっていた。

三

「この大神島をはじめとする宇方地域は、三重県内で開発が遅れた地域でな、若いモンはみんな出て行ってしまう。年を追う毎にこの辺りは寂れてきおった……。しかし五年前、この地域に高速道路建設の話が持ち上がったの、地元選出の国会議員等は大層張り切って宇方地域の再開発をブチ上げたのじゃ。そしてその中に、大神島も組み込まれておったのじゃて」

三重県南東部に位置する宇方地域は、県内でも開発が遅れ、過疎化が進んでいた。そんな中持ち上がった大型事業。これを機にそれまで遅れていた開発を一気に進めていこうという狙いがあった。そしてそんな流れに、この大神島も乗せられることとなった。過疎化の進んだ小さな漁村。これを開発により県内屈指のリゾート地にするという計画がなされた。それはリゾートホテルを建設し、島の塩っぱい砂浜を整備、そしてオシャレなお店や施設を誘致しようという、言わば判で押したようなものだったが、地域の活性化という意味では、願ってもないものだった……。はずである。

「この役人が持ってきた計画に、それまで寂れはしていたものの、みんな仲良く静かに暮らしていた大神島の島民は、賛成派と反対派で真つ二つとなったのじゃ……」

賛否両論……。役人の持つてくる「計画」には最早つきもの。島や宇方地域の活性化を目指す賛成派、そして島の生活と伝統を守ろうと主張する反対派。この二つの勢力は、互いに主義主張をぶつけ

合い続けてきたのであった。

「反対派の総大將は、さつき神社で会った、川住旅館の旦那清太じやて。「守る会」の会長も清太が務めている。賛成派の大將は、港の近くにある観光ホテルのマネージャーをやつとる菅林すがはやしという男じやて」

壮介は喜志の話を、開発計画の冊子に目を通してながら聞いていた。この冊子さすがは役人の作ったもの。恐ろしく「希望的観測」に基づいて書かれてある。普通に考えて、この計画に書かれたものは読みが甘いように感じるのだが、やっと舞い込んだ開発の話、賛成派にとつてこれはまさに「宝の地図」のようなものなだろう。

「一応言っておくが、わしは賛成派、反対派のどちらにも入ってはおらん。この島唯一の医者がどつちかについたら色々具合が悪いからの」

「……そうですね」

壮介は喜志の話に納得しながら冊子を閉じ、それを喜志の元へ返した。

「川住家も元々は、この問題に深く首は突っ込んでおらんかった。あそこも外からの客商売じゃ。寂れたままより、幾分か発展してくれたほうがメリットもあるというもんじゃが……」

喜志は壮介から返された冊子を、元会った場所に戻した。

「川住家はこういう経緯で反対派の会長になつたんですか？」
すると喜志の表情がやや曇る。

「この島には三つの名家があつての、一つは加美家。そして川住家に宮司一族。宮司一族は戦災で途絶えてしもつたから、今となつては二名家というわけじゃて」

ここで壮介はピンときた。

「もしかして、元々反対派の殿というのは……加美家？」

壮介の問いに、喜志はゆっくりと頷く。

「そうじゃ、反対派の初代会長は加美大助だいすけという男じやつた」

加美大助。この男が遥と千絵子の父である。妻は遥を産んで間も

なく亡くなったそうである。

「その加美大助という男も、もう故人なのですか？」

すると喜志は首を二度横に振った。そしてその表情はやや陰しいものであった。

「わからん……」

「え？」

「わからんのじゃて。今から三年前、突如島から姿を消したのじゃ。島中探したが、どこにもおらんかった」

当時反対派の会長を務めていた加美大助。その男は、三年前に失踪していた。それを聞いた壮介は、自分の背中に何か得体の知れない物がヌルツと這うような、何ともいえない気持ちとなった。

「本土の方も探しての、名古屋や京都で大助を見たうちゅう情報もあったが、結局、今に至るまで尻尾を掴むことがきんのじゃて……」

「それで会長が、残る名家の一つ、川住家に回ってきたと」

壮介の問いに、喜志は頷いた。

「まだ若い大助の娘を殿に据えるのはあまりに酷じゃて。ああみえて清太は責任感の強い、昔気質の男じゃて」

壮介は清太の姿を少ししか見ていないが、「昔気質」という言葉には、思わず納得していた。つまりはそういう第一印象を与える風貌をしているということである。

「現在の加美家の状況というのはどうなっているのですか？」

「んああ？」

喜志にとって、この壮介の質問はやや意外だったようで、一瞬目を丸くした。

「今加美家を守っているのは、大助の次女遙じゃ。歳はお前さんとそう変わらんで。あと姉に千絵子うちゅうのがおるが、これは都会の色に染まりきってもうて、島のことなんぞ我関せずじゃ」

壮介は千絵子と会っている。喜志の千絵子に対する感想は、そのまま壮介の第一印象でもあった。

「では、加美家は遙さんが全て取り仕切っていると？」

「まあ、そうなるわな。島の寄り合いも行事も、全て遙一人で行っておる」

それを聞いた壮介の複雑な心境が、その表情に浮かんでいた。

千草より、遙は壮介よりも一つ下。女子にとつて一番楽しい時期であることを、壮介は恋人の瑞希をはじめとする周囲の女性陣に聞かされてきている。そんな中、「家」をたった一人で背負っているかなければならないという重責。可愛そうというのはあまりに薄っぺらい同情心。しかし父親が失踪し、姉は島に帰ってこない。遙の置かれた立場は、重すぎて、切なすぎて、そしてもつたいたなすぎた……。

「なんじゃ？ 加美家の遙がどうかしたのか？」

複雑な表情を浮かべる壮介を見て、喜志はキョトンとしていた。

「え、いや……」

壮介は自分の思いを言葉にはしなかった。ただ頭をカリカリと掻くのみであった。

四

午後。

川住旅館では、一時の休憩タイムとなっていた。

十六時を過ぎると宿泊客がやってくる。今日は祭ということもあり、普段の平日よりも予約の数は多い。

因みに壮介は、昼食を摂った後部屋に戻ってきていた。カメラの整備でもしているのか、部屋に入ってから籠りつきりだ。

トゥルルル……、

一時の静寂に包まれていた館内に電話の呼出音が鳴り響いた。すると、一階の部屋から祖母の千乃が顔を出した。

「誰もおらんのかい？」

千乃は部屋から出てきて、電話の元へ向かった。

「はい、川住です。……はい、はい……」

千乃は何言か受け答えをした後、受話器を電話台に置き、二階へと続く階段へと向かった。

「千草ー、電話だよ！」

千乃の声の後、千草が一階へと降りて来た。

「誰から？」

「守る会の役員さんや。清太はおるかかってかかってきたけど、今おらんから代わりに出とくれ」

千草は電話へと向かい、伏せた状態で置かれた受話器を手に取った。

「はい、もしもし。……はい、千草です」

「……………」

「え……。そんな……」

受話器を持つ千草の眉間に皺が寄った。受話器を握り締める力も思わず強くなる。

「そんなわけではないと思いますけれど……、一度伺ってみます」

その後、二言三言交わし、千草は受話器を戻した。しかし考えごとをしているのだろうか。受話器を戻した状態で、しばらくその場から動こうとしなかった。

そんな千草の状況を、千乃は不思議そうな表情で見つめていた。

「おばあちゃん、ちよつと私出てくるね！」

そう言い残すと、千草は玄関の方へ走っていった。

サンダルを履き、玄関を出てから、千草は石段を港の方へ駆けっていく。

「そんな、馬鹿な話……」

石段を駆け下りていく際、千草は呟き、そして唇を噛み締めた。

千草が港へ到着した時、船着場には渡船が到着し、十人程が港へ

降り立っていた。

「はあ、はあ……」

午前中、壮介と石段を上がった時とは違い、千草の額には大粒の汗がいくつも浮かんでいた。

千草は辺りをキョロキョロと見回した。

しかしその表情はどこか妙。その行動は明らかに人を探している様なのだが、千草の表情は、探し物が「見つからない」ことを祈っているように見えた。

「あ、千草ちゃん！」

祭の法被を着た男が、千草の元へと近付いてきた。川住家へ電話をかけてきた男である。

「電話の話、本当なんでしょうね？」

「ああ、俺は直接見たわけじゃねえから判んねえけど、港で作業していたヤツが、似た人を見かけたって……」

男より、状況の説明を受ける千草。その表情はそれまで壮介たちに見せていたものとは違っていた。この男年齢が三十代前後で千草よりも年上だが、まるで女首領と部下のような受け答えの仕方である。しかし、それ以上に、千草の表情からは明らかな動揺が見てとれた。

「判ったわ……。何か判ったら、私か父に連絡頂戴」

「おう、判った！」

そして男は千草の元を離れていった。

「……………」

千草はその場を動かず、ただ船着場を眺めている。渡船は乗客を降ろし終え、これから対岸へと出向しようとしていた。

「……まさかね」

まるで自分に言い聞かせているように呟き、そして港を後にした。

「あら」

港の出入り口で、千草はある人物の姿を見つける。

瀬川だ。

「やあ千草さん。えらく急ぎの用みたいだったね。どうかしたのかな？」

すると千草の口元が、まるで蛭のような形になった。

「先生こそ、こんな所で何をなさっているのですか？」

壮介には使ったことのない声色で、瀬川の方を向いた。言葉にはどことなく威圧感があった。

「いや、私はたまたま通りかかったただだよ」

すると千草の眉間に再び皺が寄った。

「そうですか……」

千草は吐き捨てるかの如く言葉を放ち、そして一旦は瀬川の方へ向けていた身体を元の方向へ戻し、石段の方へ歩いていった。

「私の質問に答えてくれるかな？」

背中越しに、瀬川が問いかける。千草は無視しているのか、石段の方へ向かっていった。

しかし、石段に足をかけた時、千草は振り返った。

「……………」

すると目の前には瀬川の顔があった。口元は緩んでいるが、目は決して笑っていない。

「先生……、貴方と私たちの立場をお忘れですか？　これ以上追求しない方が、身のためですよ？」

瀬川は背中に刺すような視線を感じていた。瀬川は振り向かなかったが、港の方には法被を着た数人の男性たちが食い入るように見つめている。

中には手に棒を持っている者もあり、決して好意的な目で二人のやり取りを見ていないことは明らかであった。

「フフツ……………」

千草は踵を返し、石段に足をかけた。

「いずれお話しますよ。そうですね、祭の後にでも……………」
そして千草は二度と振り返らず、石段を上がっていった。

第五章 まつり

—

そして夜。

太陽が西の海へ沈む頃、島中に張り巡らされた提灯に灯がともる。「大神祭」という文字が、赤い提灯の灯りに浮き上がった。

この日は海風が強く、提灯と同じく島中に掲げられた幟もハタハタと揺れている。

提灯に灯がともる頃、島の人々が思い思いの格好で外へ出て、神社の方へ向かっていた。壮介もその中の一人であり、「ともだち」のカメラを抱え、この日二度目となる、神社への石段を上がっていた。

壮介はそれまで、港や石段といった風景ばかりおさめていたが、この頃になると浴衣を着た人々も目に付くようになる。提灯の下を歩く浴衣姿の人というのも、なかなか絵になるものであり、カメラを持つ壮介の手を忙しくさせていた。

石段の途中で撮影を続けていると、知った顔が石段を上がってくるのが見えた。加美千絵子である。

「やあ」

千絵子と目が合うと、壮介は手を振って見せた。後ろには千絵子の連れである志都美と洋二の姿もあった。

「アンタこんな所で何してんの？」

千絵子から見れば、不自然な場所でカメラを携えている男に声をかけられたということ、あまりいい気分ではないのだろう。その表情はしかめっつらである。

「いやあ、これが島に来た目的なんですね」

千絵子は特に興味なしという感じで、足を止めずに壮介の前を通り過ぎていく。

「ま、せいぜい頑張つてね」

去り際、背中越しにそんな言葉を壮介に残していった。

そして後に続いていた志都美と洋二は、壮介に視線を送ることなく、石段を上がっていった。

三人の姿が見えなくなつた頃、壮介も石段を上がり始めた。昼間石段ですれ違う人はまばらで、その殆んどは祭の法被を着た人たちであつたが、今石段には数多くの人が神社方向へと向かい、浴衣を着ている人も多かつた。

中には恋人連れと思われる二人組も見ることができた。その姿を見て壮介はふと自分の恋人のことを思い出していた。

「そついや、大神島に来て瑞希に連絡してないな……。祭が一段落したら電話してみようかな」

そんなことを呟き、石段を上がっていった。

二

石段の頂上に到着すると、神社にはもうたくさんの人が集まつていた。神社には目立つた外灯というものがなく、暗い所はとことん暗い。しかし神社の周辺には松明が焚かれ、普段は漆黒に包まれた神社の夜を神々しく照らしていた。

壮介は携えていたカメラのレンズカバーを外し、早速撮影を開始。夜ということと、松明という不安定な灯りということもあり、光加減が難しいようで、何度もカメラの画面を見直し、撮り直しを繰り返していた。

「新谷さん！」

撮影していると、誰かが壮介の肩を叩いた。壮介が振り向くとそこには浴衣姿の千草がいた。長い黒髪をあげ、いつもとは少し違う雰囲気であつた。

「やあ」

一瞬誰か判別できなかった壮介だったが、この島で壮介の顔と名

前を知っている、眼鏡をかけた少女なんて千草くらい。すぐに千草の名前が出てきた。

「撮影は順調ですか？」

千草は手に持っていた団扇で壮介の顔に向けて風を送ってあげていた。壮介の顔は汗の雫がいくつも浮かんでいる。夜になっても、気温はそんなに下がっていない。それに加えて神社周辺は松明を焚いているので、下手をすると昼間より暑いかもしれない。

「まあね。露出の調整が大変だけれど」

壮介は一旦手を止め、首に巻いているタオルで汗を拭った。

「もうすぐ神事が始まりますよ。行ってみますか？」

「それは是非。あの人だからできている所かな？」

壮介は松明が一番集まっている場所を指差した。そこは神社の建物前で、周りには露天と思われる数件の屋台があり、その屋台が挟み込むように、人が一箇所に集まっていた。

「こっちです！」

千草は壮介の手を取り、屋台の裏手方面へと歩いていった。

「ここからだつたら、よく見えますよ」

壮介が連れてこられたのは、屋台の裏手にある「守る会」のテント。ここから祭の進行を見守るため、前を遮るものは何もなかった。「いや、はは……」

テントの中には清太をはじめ法被を着た人が数多くいた。法被を着ていないのは壮介と千草のみ。何となく場違いな雰囲気を感じた壮介は、思わず苦笑いを浮かべた。

そして周囲の雰囲気を感じつつも、神事の風景をカメラにおさめるべく、「ともだち」のカメラを胸の前に構えた。

祭の神事は、かつてはもっと大掛かりだったらしい。しかし祭を取り仕切っていた神社の神主が亡くなってしまい、それ以来簡素化されたものが続いている。

松明の灯りで赤々と照らし出された舞台には、巫女の姿をした少

女が両手で何かを抱えて、一人立っていた。

「あれは、何を持ってるんだ？」

壮介は横で神事を眺めている千草に訊ねてみた。

「あれはこの祭の神具、狼の爪よ」

「爪……」

壮介はファインダーを覗き、巫女の手元をズームアップしてみた。それはまるでかぎ爪のようなものであった。

「？」

ここで壮介はあることに気付いた。

「こう言っちゃ何だけど、神具の割に随分安っぽい素材だね」

爪の大きさは大体五十センチくらいだろうか。そんな大きさの爪を、巫女の少女が「何の苦もなく」持っている。もしこれが何かの金属ならば、それは重いことであろう。しかし、少女は軽々持っていた。そして見た感じ、光の反射具合から見ても、それが金属できていないことは明白であった。

それを聞いた千草は、ニヤツと笑う。

「よく判りましたね。そうですね、あれはプラスチックでできています」

「それはまた、どうして？」

壮介にとつて、それは素朴な疑問だった。規模はどうであれ、島の人々はそれなりに力を入れている祭である。それなのに、何故肝心の神具が、プラスチックなのか？ 壮介は釈然としないという表情であった。

「あれは、レプリカなんですよ」

「レプリカ？」

千草の言葉に、壮介は目を丸くする。レプリカということは、「本物」が別にあるということ。

「レプリカって、何で本物を使わないんだ？ だって祭の本番じゃないか」

壮介の問いかけに、千草はすぐに反応せず、一呼吸置いて口を開

いた。

「紛失したんです。三年前に……」

「紛失？」

呆気ない千草の答えに、壮介はやや拍子抜けだったが、その間にも神事は進んでいく。壮介はすぐに気を取り直し、ファインダーを覗いた。

この時、壮介は気づいていなかった。

横にいる千草の表情が、まるで苦虫を噛み潰したようになっていくことを……。

三

神事はそう時間のかかるものではなく、二十分程で終了した。その後舞台の前に集まっていた人だかりは徐々に崩れていき、帰る者、屋台の前に集まる者と様々であり、各々祭を楽しんでいた。

撮影を終えた壮介は、「守る会」のテントでビールを振舞われていた。最初は法被集団に奇異の目で見られていたが、千草が壮介の人となりの説明したようで、いつの間にか輪の中に入っていた。普段あまり酒を飲まない壮介だったが、千草が目で「飲んでおけ」と合図と送ったので、大人しく従っていた。

そして時間が経ち、松明の勢いが衰えきた頃、壮介は失礼することとなった。缶ビールを三本空けた壮介の顔は真っ赤になっていた。「気をつけてね！」

祭の片付けをしなければならぬ千草はまだ残るため、一緒に戻らず壮介を見送った。

壮介は足元に気をつけながら石段を下りていく。周りには壮介と同じく、家路に向かう人々の姿があった。この風景も撮影対象に成り得るのかもしれないが、少々酒のまわった壮介の頭はそこまで回転しなかったようである。

今の壮介は、石段を安全に下りていくことで、頭が一杯の様子だ

った。

石段をしばらく下りていると、石段を駆け上がってくる人影があった。それに気付いた壮介は目を凝らしてみると、それは千絵子であると認識した。

壮介は千絵子に声をかけようと手を挙げたが、先に一声を發したのは意外にも千絵子の方であった。

「ねえ、志都美たち知らない？」

酔いのまわっている壮介は、志都美という名前と顔を一致させるのに時間を要する。そしてようやく顔と名前が一致し、今までのことを思い出してみる。

「さあ……、神社へ行く前に会って以来、姿は見えていないなあ」

もしかしたら祭の見物人の中にいたかもしれない。しかし撮影に夢中となっていた壮介に気付けという方が無理な話である。壮介は祭から今までの記憶を丁寧と思い返してみたが、結局志都美たちの姿を見つけることはできなかった。

それを千絵子に伝えると、眉間に皺を寄せた。

「もうホテルに戻ってるんじゃないですか？」

「いや、ホテルにもいないんだよ。祭見物してたらいつの間にかいなくなっちゃってさ。ったく二人揃ってどこほつつき歩いてんだよ！」

千絵子はブツブツと文句を言いながら石段を上がっていった。

その後姿を見送った後、壮介は再び石段を下り始めた。

そしてしばらく下りていると、再び知った姿を見つけた。

「あ、こんばんは」

それは遙であった。遙は石段の途中で誰かを待っているかのように佇んでいた。

「どうしたんですか？ こんな所で？」

「はい、姉の姿が見えないので、どうかしたのかと思って……」

壮介は遙に、先程千絵子を見かけたことを伝えた。

「では神社の方へ向かったのですね」

「ええ、お姉さんの連れを探しているみたいでしたね」

取り合えず、姉の所在がはっきりしたので、遙はホッとした様子だった。

「新谷さんはどちらへ？」

「いや、もう旅館へ戻るところです」

すると遙は不思議そうな表情を浮かべた。

「新谷さん、この先を下つても川住旅館はないですよ」

「ええ！」

壮介は慌てて石段を見上げた。どうやら石段を下りすぎて、川住旅館を過ぎてしまったようである。よくよく周りを見てみれば、遙が立っているのは加美家の前。加美家は港と川住旅館の間に位置しているのだから、この先を下つても川住旅館には行き着くことはない。

「ああ……。しまったなあ」

壮介は頭をガリガリ掻き毟った。その姿を見た遙は思わず口元を緩める。

「うちで少し休んでいけますか？」

「え、いやあ、ダッシュで戻るよ。ありがとう！」

そう応えると壮介は、石段を駆け上がっていった。

遙はその後姿に向かい、ささやかに手を振った。

石段を駆け上がる最中、壮介はふと思った。

「そう言えば、遙さんも祭で見かけなかったな……」

四

川住旅館に到着した壮介は、激しい頭痛に襲われていた。急に走ったため、酒が急激にまわってきたためである。

壮介は部屋に直行し、そのまま布団の上に倒れこんだ。
そして風呂にも入らず、壮介は酒に潰されて就寝となった……。

翌朝。

東の空が白み始めた頃、壮介は目を覚ました。

壮介は起き上がると、頭を数回振った。どうやら二日酔いにはなっていないようである。

「臭っ」

しかし壮介は自分の身体が放つ臭いに顔をしかめた。

昨日あんなに汗をかいたのにもかかわらず、風呂に入っていない汗臭くなるのは当然と言えば当然。壮介はカバンから着替えとタオルを取り出し、一階の風呂場へと向かった。

一階のフロアはまだ暗かったが、厨房には電気がついており、喜美恵たちは朝食の支度をしている様子であった。壮介は特に挨拶もせず、浴室へと入った。

そして風呂から上がると、二階への階段前で喜美恵と出会った。

お互い朝の挨拶を済ませる。

「新谷さん、出発されるのですね？」

「そうですね。朝食が終わったら……。どうもお世話になりました」
壮介は深々と頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ。またいらして下さいな」

そんなやり取りをして、壮介は二階の部屋へと戻った。そして布団と荷物を片付け、帰る準備を始めた。

着替え等を詰め込んだ後、最後にカメラを手に持った。

壮介はしばらくカメラを眺め続けた。「ともだち」のことを思い出しているのだろうか……。

「お前の心残り、叶えてやったぞ。この借りは、後でたっぷり返してもらっぞ」

最後にそう呟き、カメラをカバンに仕舞った。

ワンワンワン！

朝食を摂るため部屋を出ようとしていた壮介は、突然聞こえてきた犬の鳴き声に足を止めた。

窓へと近付き障子を開けると、近くで犬が吠えているようだった。その時は大して気にもとめず、障子を閉めて部屋を出た。

一階へ下り、食堂へ向かう時、一人の女性が旅館の玄関先にいた。ワンワンワン！

犬の鳴き声の正体はそこにあった。女性は一本のリードを握っており、その先には中型の柴犬が繋がれていた。

「どうされたのですか？」

喜美恵もやってきて、女性に声をかける。

「ああ、すみません。この子いつもと違う方へ走っていつちゃってあつ！」

女性が喜美恵さんとの会話に気を取られていたその時、一瞬リードを握る手が緩んだのだらう。柴犬は突然走り出し、握られていたリードが手の中をすり抜けていった。

「コラ待てーっ！ キャツ！」

女性も後を追うが、慌てていたため、段差で躓いてしまった。

「大丈夫ですか？」

喜美恵は玄関を下り、女性の介抱へ向かった。そして壮介も靴を履き玄関を下りた。

「俺犬を追いかけますね！」

そう言うつと壮介は玄関を駆けていった。

石段前に出て辺りを見回すと、石段の下り方面に犬の姿を確認した。そして壮介は石段を駆け足で下り始めた。

犬はどんどん石段を下っていき、やがて港の見える所で一旦止まった。

「よし、そこで待つてろ！」

壮介はそう叫び、一気に駆け下りた。そして犬の元に到着した。

「よしよし」

壮介は犬の頭を撫でようと手を差し伸べた。

しかし犬はそれをすり抜けるように再び走り始めた。

今度は石段の途中から路地へと入っていき、そしてある倉庫のよ
うな建物の前で止まった。

そして犬は身体を地面スレスレまで伏せ、グルルルと低く唸って
いた。

「……………」

壮介は犬へと近付いた。犬は壮介の方を向くことはなく、ただ倉
庫の方を向き唸っていた。

倉庫はかなり古いもので、屋根は半分崩れかかっている。そして
木製の扉は半分開いた状態になっていた。

壮介は不思議な感覚に襲われていた。その表情は一気に陰しくな
った。

何かとても「イヤな予感」がしているようであった。

壮介が感じている「イヤな予感」。壮介がこれを感じるのは初め
てではない。

この夏「四度目」である……。

別にそうする必要はない。しかし壮介は恐る恐る倉庫へと近付い
た。

ワンワンワン！

壮介が扉に手をかけると、堰を切ったように犬が再び吠え始めた。
壮介は思い切って扉を開けた。

「うっ！」

開けた瞬間、言い様のない臭気が壮介を襲った。

「何だ、このにお……………」

鼻をシャツの袖で隠しながら、壮介は中へ足を踏み入れた。

そして、倉庫の中央に「何か」があった。

「……………」

壮介は反応できなかった。それが何か認識できなかった。
しかしそれを目に焼き付ける時間が経過していくにつれて、それ

が何かであることを徐々に認識していく。

そして壮介は遂にに認識した……。

「う、うわぁーっ！」

壮介は絶叫し、その場に尻餅をついた。

壮介が犬に導かれ、そして目にしたもの、

それは全身をズタズタに切り裂かれ、内臓が飛び出した女性の死体であった。

「ま、まじかよ……」

壮介は震える手で、頭をガリガリと掻き毟る。

壮介の新たな「惨劇の夏」が、ここに始まった。

第六章 惨劇の夏

—

早朝の大神島。廃倉庫で女性の死体を発見。

この衝撃的なニュースは、小さな過疎の島を一気に駆け巡った。倉庫の周りには野次馬でごった返していた。倉庫の前にはトラロープが規制線代わりに張られ、駐在の島泉と消防団しまいずみ、そして医者である喜志が現場を管理した。

あまりに残酷な死に方をした女性。その上にはブルーシートが被せられている。顔の判別ができない位損傷が激しく、かろうじて性別が判る状態であった。

トラロープの向こう側にいる人々の面持ちは皆沈痛。そして亡骸の発する匂いに口元を押さえるものもいた。

「警察が来たぞー！」

野次馬の後方から、誰かの声が聞こえた。野次馬が揃って振り向くと、消防団員に先導されて、数人の捜査員と十数人の制服警官の姿があった。

「下がってください！」

制服警官たちはトラロープの前に立ち塞がり、倉庫前に群がる野次馬を後ろへと押しやり、そして捜査員はトラロープをくぐり、倉庫の中へと入っていった。

「ご苦労様です！ 大神島駐在の島泉です！」

捜査員たちの姿を見た駐在の島泉は、背筋をピンと伸ばし敬礼をした。

「ご苦労さまです」

隣にいた喜志も私服警官に向かい頭を下げる。

捜査員の一人、大柄で口髭をたくわえた男が一步前に出て警察手帳を出した。

「どうも。捜査主任の歌籐かとうです。早速ですが被害者の確認をしたい」
喜志は歌籐をブルーシートの前へと促した。

歌籐はブルーシートを捲った。

「うわぁ……」

捲った途端、後ろにいた捜査員たちから声が漏れる。中には口元を押さえ、目を逸らす者もいた。

「これは酷いな……」

捜査主任という責任ある立場であり、かなり場数を踏んできてい
るであろう歌籐ですら、思わず口元を押さえた。その姿は死体の損
傷の激しさをまざまざと物語っていた。

「長渡ながと！ 鑑識かなしを入れる！」

歌籐は捜査員の一人に合図をし、貴志の方を向いた。

「誰がこんな惨いことを……」

喜志の表情はこれ以上ない位沈痛なものであった。

「とにかく、これから全力を挙げて捜査します。さ、先生は外へ」
貴志は頷いた。しかし、出ようとはせず、歌籐の方へ近付いた。

「何か？」

喜志の行動に、歌籐は怪訝な表情を浮かべた。

そしてボソツと呟いた。

「身体は酷く切り刻まれているが、死因はおそらく窒息じゃ。首に
何かで絞められた跡がある……」

「何？」

首に何かで絞められたような跡……。

それはこの女性が、何らかの事故ではなく、誰かに殺されたこと
を意味していた。

その後、喜志と消防団員は外へと出され、警察による現場検証が
始まった。

倉庫の中では私服の捜査員と鑑識員が、現場の写真や指紋採取等
に追われている。

「主任！」

死体の傍にいた捜査員が歌籐を呼んだ。

「ここ、見て下さい」

捜査員が指差した箇所、それは首元であった。

「絞殺か……」

「殺害場所はここです。間違いなさそうですね。犯人は被害者を何らかで首を絞めて殺害した後、鋭利な刃物で身体を切り刻んだ」

「そうだな。被害者の身元を確認できそうなものは？」

「今の所何も……。ただ肌の感じや着衣からみて、十代から二十代の若い女性のようにです」

歌籐は再びビニールシートを捲った。

「しかし、肝心の顔がこれでは……」

横にいた捜査員は思わず目を逸らした。警察も人の子ということである。

その後女性の遺体は、鑑識員と制服警官の手により、倉庫から運び出された。遺体は一先ず診療所に運ばれることとなった。

倉庫から遺体が運び出されたと同時に、歌籐も倉庫から出てきた。

「長渡！ 第一発見者は？」

すると長渡という捜査員ではなく、駐在の島泉が歌籐の前にやってきた。

「はい！ 第一発見者は現在駐在所に拘留中があります！」

「何？」

「……………」

第一発見者である新谷壮介は今、駐在所の檻の中にいた。

壮介にとって、これは非常に不本意な状況である。壮介は死体を発見し、石段を転がり落ちるようになり、港の近くにある駐在所へと駆け込んだ。

すると……、

「何であんな場所へ行ったんだ？」

という島泉の質問に端を發し、

「お前はどこの誰だ？」

「犬は本当に自分で倉庫の方へ行つたのか？」

などと、まるで壮介を尋問するかのような態度をみせ、終には、

「実は第一発見者が一番アヤシイ」

という持論を展開し、壮介を無理矢理檻へとぶち込んだのであった。

「……………」

状況は非常に不本意なものであったが、そんな中壮介は腕を組んで考えごとをしていた。

この夏、壮介にとって一生に一度あるかないかのような出来事が、立て続けに起こっている。

そしてこの時壮介が思い出していたこと。それは「ともだち」のことであった。

この夏出会った「ともだち」も、無残な姿で発見された。

あの全身ズタズタにされた死体を目にしてから、「ともだち」が命を失ったあの事件のことを、否がおうにも思い出すことになったのだ。

「畜生……。この夏は踏んだり蹴ったりだな！」

壮介は何かを振り払うかのように頭をガリガリと掻きまわった後、ゴロンと横になった。駐在所の檻は小さな窓一つしかなく、風通しは非常に悪かったが、鉄格子の向こう側に扇風機が用意されていたので、汗びつしよりというわけではない。

「それにしても、あの死体は……………」

壮介が倉庫の状況について思い出そうとした時、ガラガラガラ……………」

誰かが駐在所に入ってくる気配を、壮介は感じた。

壮介は身体を起こし、目の前にある扉を凝視していると、扉のガラスに複数の人影が映った。

「こちらです」

島泉の声がすると扉が開いた。

「第一発見者であり、現在重要参考人として拘留しております。名を新谷壮介といいます」

壮介の前に現れたのは、歌籐と長渡、そして喜志であった。

「し、新谷君じゃないか！」

鉄格子の向こうで慄然とした表情を浮かべている壮介を見つけ、

喜志は大声を上げて驚いた。

「喜志先生、お知り合いですか？」

喜志が壮介のことを知っていたので、島泉は意外そうな表情であった。

「ええ、彼はよく知ってるでな。何で彼をこんな所に入れたんですか！」

「いや、だから重要参考人として……」

「彼はこの島の人間じゃないで！ それにあんな惨いことをしでかすような男じゃないで！ はよ出したりいな！」

喜志は顔を紅潮させて島泉に詰め寄った。喜志のそんな反応に、島泉は戸惑った。

「まあまあ先生。島泉君、どちらにせよ私も彼の話を聞きたい。とりあえず檻から出してやれ」

「は、はい！」

島泉はポケットから鍵を取り出し、檻の扉を開けた。

二

檻から出された壮介は、駐在所の取調室で、歌籐の質問を受けることとなった。壮介は自分の住所と氏名、そして何故大神島へやってきたのか詳しく歌籐に話した。

壮介は大神島へやってきた理由として「ともだち」についての話をしたが、信州水崎で巻き込まれた事件については、あえて触れなかった。「ともだち」について、壮介は「ネットで知り合った撮影

仲間」と答えた。

最後に歌籐は、死体発見時の状況を質問してきた。壮介は川住旅館の玄関先で犬に引つ張られた女性と会った所から、倉庫で死体を発見し、駐在所に駆け込む所までを正直に話した。

「うん、判った」

壮介が話している間、歌籐は腕を組んで話に聞き入り、その横で長渡は壮介の話した内容をメモしていた。

「新谷君、死体発見現場に入った時、何か気付いたことはあるか？」
歌籐の質問に、壮介は当時のことを思い出そうと目を閉じ黙り込んだ。

しばらくして、壮介は髪の毛をワシヤワシヤと掻いた。

「何も出てこんか？」

そんな壮介の姿を見た長渡はため息をつき、持っていたペンを机に置いた。

壮介は考えていた。

何故あのような無残な殺され方をしなければならないのか。

もし単純な殺人なら、相手が呼吸していないことを確認できれば、それで成立する。

相手の始末を長引かせてしまうことで、自身にも危険が及ぶ可能性がある。

そんなリスクを背負ってまで、相手の死に拘る理由とは……。

それは、恨み。

被害者は加害者に何らかの恨みを買い、そして惨殺されたということ。

しかし今の壮介には、それが何なのか全く見当がつかない。

そして壮介が気になっていることはもう一つあった。

死体を発見した時、気が動転してしまっていたので、よくは思い出せない。

しかし、あの死体が身に着けていた衣服に、壮介は確かに見覚えがあった。

それを歌籐に話そうとした、その時、

「主任！」

一人の捜査員が駐在所に駆け込んできた。そして歌籐に近づき耳打ちをする。

「そうか！」

耳打ちをした捜査員は歌籐に向かい一礼をすると、すぐ駐在所を出て行った。

「どうかされたんですか？」

島泉が歌籐に尋ねた。

「うん、被害者の身元が判明した。新居志都美二十歳だ」

新居志都美。志都美……。

「ああーっ！」

壮介はやつと気付いたようだった。

あの死体の人物に……

三

「志都美ーっ！ 志都美っ！ うわああーっ！」

志都美の亡骸は、倉庫から運び出され診療所の個室に安置されていた。

亡骸にはブルーシートそして毛布が被せられ、その惨たらしい姿を見せていなかったが、遺体から発する匂いだけはどうしようもなく、何とも言えない匂いが部屋の中を充満していた。

そしてその亡骸の横で、志都美のカレシである洋二が泣き崩れていた。

倉庫で発見された遺体が志都美と判明し、この診療所へやって来たのは洋二だけではなかった。千絵子、遥の加美家姉妹と千草も診療所へやってきていた。

しかし三人は亡骸が安置されている部屋の外でパイプ椅子に並んで座っていた。三人の表情はいずれも暗い。あの惨たらしい姿を見たのだろうか。遥はずっと口元にハンカチをあてがっていた。

倉庫で見つかった死体の身元判明のきっかけは洋二だった。

昨晚の祭で志都美と一緒に過ごしていた洋二だったが、祭の最中に志都美とはぐれてしまったのである。ケータイに連絡してみるも通じず、神社だけでなく港の方も探したが、結局見つからなかった。滞在先のホテルにも帰っていないが、洋二は志都美が千絵子の元にいるのではと考え、先に就寝したのであった。

そして翌朝、加美家へ向かおうとしていたところ、偶然千絵子と出会い、志都美が昨晚加美家へ行っていないことを知ったのである。そこへ舞い込んできたのが、倉庫で若い女性の死体発見の一報。それを洋二たちに教えたのはこれまた偶然出会った千草である。

そして洋二たちは死体が安置されている診療所へとやってきて、身に着けていた衣服や、身体的特徴等から、この死体は志都美であると確認したのであった。

「志都美ーっ！ うわああーっ！ 志都美ーっ！」

扉の向こう側から、洋二の嗚咽が止め処なく聞こえてきていた。千絵子たちは誰もしゃべろうとせず、ただただ自分たちの足元を見ているだけであった。

「ん？」

遥が顔を上げた。誰かが診療所へやってくる気配を感じた。そして間もなく扉の開く音が聞こえ、何人かが診療所の中へと入ってきた。

「ご苦勞様です！」

人影がみえると扉の横に立っていた警官が敬礼をした。診療所へやってきたのは、歌籐、長渡、喜志、そして壮介であった。

「新谷さん！」

壮介の姿を見つけた遙は驚きの声を上げる。その遙の声につられ、千草と千絵子も顔を上げた。

「新谷さん、どうしてここへ？」

千草も驚きの声を上げた。壮介がここへ現れることなど予想もしていなかったであろう。

「え、いやあ、まあ何となくかな……」

壮介は頭をポリポリと掻いた。特に呼ばれたわけではないが、あのまま駐在所に残っていると、また檻へぶち込まれるのではと感じたため、貴志の後をついてきたのであった。

「まあ君は遺体の第一発見者だ。今はまだ勝手な動きをされちゃ困るからな」

長渡が壮介に釘を刺した。勿論、壮介についてこさせたのにも、警察の思惑があるということ。

それは壮介への疑いが、まだ完全に晴れていないことを意味している。

「さて……、君たちは？」

歌籐は並んで座っている千絵子たちに視線を送った。

「被害者の連れです」

長渡が歌籐にそう耳打ちをした。

「で、部屋の中で泣いているのは？」

「被害者の恋人です」

それを聞いた歌籐は長渡にこちらへ連れて来るよう合図を送り、そして長渡は部屋の中へと入っていった。

パンツ！

「じゃあ、俺が志都美を殺したつてのかよっ！」

診療所の待合室に怒号が響いた。

怒号の主は洋二。洋二は頬を涙で濡らしているが、その目は涙以外の理由で血走っていた。

「まあ落ち着け。まだそうとは言っていない。ただ、お前さんが新居志都美と何時頃まで一緒にいたか確認したいんだ」

「だから、時間なんてはつきり覚えてねえって、何度も言ってるじゃないかよ！」

苛立ちが頂点に達した洋二は待合室のソファから立ち上がり、向かい側に座っていた歌籐と長渡に怒鳴り散らした。今にも二人の刑事に掴みかかるかという様子だった。

「ええい、落ち着かんか！」

傍にいた捜査員が、洋二の脇を抱え、ソファに座らせた。

「離せコラ！」

ソファに座らされた洋二は、捜査員の腕を乱暴に振り払った。

「さっきお前さんは、新居志都美とはぐれてから、神社や船着場を探して回ったと言ったな。それを証明できそうな人はおるか？」

興奮する洋二を前にしても、相当な場数を踏んでいる歌籐の対応は冷静であった。むしろ歌籐にとって「よくある事」くらいにしか感じていないのだろう。

「さ、さあな！ 探すのに気がいつてたから、途中で誰とすれ違ったとか一々覚えてねえよ！」

洋二は吐き捨てるように言葉を放った。

「何時くらいにホテルへ戻ったんだ？」

「十時前くらいだよ。それが何だってんだ！」

歌籐は特段変わったことを訊ねているわけではないのだが、冷静さを失っている洋二にとって、歌籐の話す言葉全て挑発的なものに聞こえてしまうようだ。

「随分早いじゃないか。恋人が行方不明だってのに」

「はあ？ お前何言ってるの？」

長渡の言葉に、洋二は敏感に反応する。長渡の放った言葉、それは明らかに「棘」を含んでいた。

歌籐らが洋二に対し、何らかの疑いの目を向けていることは事実である。しかしそれが単に最後に志都美と一緒にいた人物だからだ

けではない。

祭が終わったのは午後九時。千絵子の証言によると、千絵子が洋二・志都美とはぐれたのが、当時の祭の進行具合から考えて大体午後八時三十分頃。それから二人の姿を見た者はいない。洋二が志都美とはぐれた時、まだ祭は行われていたので、二人がはぐれたのは九時より前ということになる。そして洋二が志都美とはぐれ、島中を探し回ってホテルに戻ってきたのが十時前。時間にして約一時間十五分。

歌籐らは、この「七十五分」に引つかかったのだ。自分の恋人を探す時間にしてはあまりにも短く、そしてホテルに戻ったら、もう探すことなく就寝しているという「あっさりさ」を不審に感じていたのだった。

そしてもう一つ、洋二に疑いの目を向ける要因が、志都美の亡骸にあった。

志都美は何者かに首を絞められてから、身体を鋭利な刃物でズタズタに切り裂かれている。

しかし志都美の身体には犯人と争ったような痕跡……例えば、衣服の乱れや、犯人に抵抗して引つ掻いた後が、まるで見られなかった。

これは何を意味しているのか？ 場数を踏んできた歌籐はすぐピンときたであろう。

犯人は被害者の顔見知りではないか？……と。

「悪いが、もう少し付き合ってもらうぞ。お前さんが昨晚の事を細かくキレイに思い出してくれるまでな！」

未だ興奮し続ける洋二に向けて、歌籐は低いトーンで言い放つ。その目は鈍く光り、周りの空気は一気に張り詰めた。

「チツ。何でこんなことに……」

先程まで威勢のよかった洋二であるが、歌籐の眼光で完全に威圧されてしまい、そ弱々しくそう呟いた。

四

ミンミンミン……

真夏の太陽が青い空のてっぺんまで昇った頃、

昨日祭の行われた神社の近くにある島の公民館には数人の警官が出入りしていた。

公民館の入り口には「大神島殺人事件捜査本部」と書かれた紙が張られている。

公民館の二階の部屋では、診療所に引き続き歌籐らは洋二を取り調べ中。ここまで執拗に洋二を取り調べているということは、やはり洋二に疑いの目を強めているということのようである。

そして公民館一階の大部屋。ここには壮介と加美姉妹がいた。

「……………」

三人とも表情は硬く、いずれも無言。何を喋っているのか判らないという様子だ。公民館を出入りする警官も、そんな三人の心境に配慮しているのかは判らないが、無駄に話しかけてくる者はおらず、傍に麦茶のペットボトルを置いていくのみであった。

壮介は大部屋の時計を見た。時計は五時十三分を指している。壮介たちがここへやって来た時から、この時計は一分たりとも進んでいない。そして壮介は腕時計に目をやった。壮介の時計はもうすぐ十二時になるうとしていた。

正午を過ぎると、三人にオニギリが差し入れられた。しかし三人とも手をつけようとしなかった。

壮介は加美姉妹の方へ目をやった。二人とも俯いており、その表情は決して明るいものではなかった。

「ん、なんだあいつら？」

一人の警官が、窓の外を見て言った。その言葉につられ、壮介は窓の外が見える所へ移動した。

その窓からは、昨日祭が行われた神社の境内が一望できるのだが、その境内に十数人の人影があった。

そしてその集団は公民館の方へ向かってきていた。

「なんだお前は！」

公民館へと突き進んでくる集団に、入り口を守っている警官が警戒を強める。

そしてその集団の中心にいる男性が、一歩前に出てきた。

「ここの責任者と話がしたい」

その男性はこの暑い中、黒スーツにオールバックと、過疎の島には似つかわしくない格好をしている。本人は至って普通に話しているつもりかもしれないが、その姿は明らかに威圧感が漂っていた。

「誰だ、あいつ？」

すると壮介の横へ千絵子がやってきた。

「あれは大神島ホテルのマネージャー、菅林よ」

「すがばやし……」

壮介にとって、菅林の名前を聞くのは、これが初めてではなかった。

「ああ、開発計画賛成派の」

その壮介の言葉を聞いた千絵子は目を丸くした。

「アンタ、なんでそんなこと知ってるわけ？」

「え、いやあ、昨日喜志先生に聞いたんだよ」

すると千絵子は眉間に皺を寄せた。

「まったく、余所モンに余計な事教えやがって……」

壮介たちは公民館入り口で警官と立ち話をする菅林を注視する。

話は途切れ途切れでしか聞こえてこないが、取り合えず菅林たちの要求は、ここの責任者である歌籐に会わせろということのようである。しかし警官はそれを拒んでいるようであり、半ば押し問答のようになっていた

「ん、あれは？」

菅林の後ろの集団に、壮介は見知った男を見つけた。

「なあ、あの右端の人って、確か……」

「うん、瀬川だよ」

菅林が束ねている集団の中に、あの瀬川の姿があったのだ。

「あの人は開発計画賛成派の副リーダー的存在よ」

「ふーん、あの人が……」

壮介は頭をポリポリと掻いた。

ここで壮介はあることを思い出した。それは千絵子たちを出迎えに船着場へ行った時のこと。あの時、壮介は港にいる人間殆どの視線が、自分たちに集中しているような感覚に襲われた。この時は何故なのか全く検討がつかなかったが、瀬川の立場を知った時、それについて合点がいく。

それは大神島開発計画。あの時、壮介と一緒にいたのは加美姉妹に千草、そして洋二に志都美である。千草の父親は開発計画反対派である「守る会」のリーダーであり、そして加美姉妹の父親大助は先代の「守る会」リーダーである。そんな集団の中に、開発計画賛成派のナンバー2がいるのだから、視線を集めても不思議ではない。それにあの時、港にいる殆どの人間が、祭の法被を着た「守る会」のメンバー。好意的な目で見る者はおそらく皆無であろう。

「新谷さん！」

遙が壮介の名を呼んだ。振り向くと大部屋に長渡が姿を見せていた。

「あつ刑事さん、あれ、あれ」

壮介は長渡を呼び、窓の外を指差した。長渡は壮介の元へとやってきて、窓の外を見た。

「ん、何だあいつらは？」

「大神島開発計画賛成派の方々らしいですよ」

長渡は眉間に皺を寄せて、窓から離れ、大部屋から出て行った。そして程なく、窓の向こう側に姿が現れ、賛成派に應對している警官の方へ向かった。

「あ、ご苦労様です！」

長渡の姿を見た警官は敬礼をした。

「アンタがここの責任者か？」

菅林が長渡の前に立ち、訊ねてきた。

「私は捜査本部の長渡だ。主任は今取調べ中で立て込んでいる。用があるなら私が聞こう」

すると菅林はスーツの胸ポケットから封筒を取り出した。

「これを責任者へ渡してほしい」

封筒は長渡の方へ差し出されたが、長渡はすぐには受け取らなかった。

「これは何だ？」

「嘆願書ですよ」

菅林の言葉に、長渡は眉をひそめる。

「警察の方に宣言しておいてほしいんですよ。今回の事件は、開発計画と一切関係ございませんと」

菅林をはじめとする賛成派の主張はこうである。

今回の事件、その猟奇性から考えて、マスコミが喰いついてくること確実。そんな中、賛成派が一番恐れることはマスコミにあることないこと書き立てられ、風評被害を喰らうことであり、それをできる限り阻止したいのである。そのため賛成派は、集団で捜査本部へやってきたのである。

「それは充分判っている。ありもしない話をされるのは捜査本部としても不本意だからな」

長渡はそう答え、差し出された封筒を受け取った。

「そちらの意見は主任に伝えておく。さ、もうよろしいでしょう」
すると菅林はニヤツと笑い、一歩下がった。

「頼みますよ。何せこの島の命運がかかっているんですからね」

菅林は振り返り、後ろにいた賛成派の集団に合図を送った。すると集団も振り返り、公民館から離れていった。

そしてこのまま神社の境内を後にすると思われたその時、

「あっ！」

集団の一人が声を上げた。賛成派の視線は神社から港の方まで続く石段に向けられていた。

その石段をこれまた十数人の集団が上がってきていた。その集団はそろいの法被を着て、旗を掲げる者もいた。そしてその旗には「大神島民生活を守る会」と銘打たれていた。

五

「なんやお前らっ！」

「何でお前らがここにおるんやっ！」

大神島開発計画賛成派と反対派、二つの派閥が顔を合わせた瞬間、神社の境内が一気に殺伐とした雰囲気となった。両派とも、今にも飛び掛ろうかという感じである。

「菅林、お前こんな所で何しとるんや？」

反対派集団の中心には、千草の父である清太がいた。清太は憎しみのこもった視線を菅林へと突き刺した。

「私たちは警察の方々にお話があつてここへ来たのですよ。アンタこそここへ何しに来たんですか？」

菅林の言葉もまた、鋭い棘を含み、清太へと向けられた。

「俺たちは神社を守らなあかん責任があるんじゃ！ お前らには神社に一步も踏み入れるなど何度も言っているやろが！」

清太の発言の後、後ろに控える反対派の集団から「そつだそつだ！」と合いの手が入る。それに対し、菅林の後ろに控える賛成派の集団からは、「うるせえ！」等と罵声が発せられた。

「ふん、アンタらは相変わらずですね」

菅林は清太らを鼻で笑うように吐き捨てた。

「お前ら、今度は何を企んでるんや？」

「企んでいるとは失敬な！ 私たちは今回の事件が計画に影響を与えないよう、警察のみなさんをお願いにあがっただけですよ」

すると清太はニヤツと笑う。

「ん、何がおかしいんや？」

その笑顔に、菅林は露骨に不快感を示した。

「へん、計画なんぞ潰れてまえばいいんや！ 島の伝統を守れんよ
うな奴に、未来なんかあるか！」

この清太の発言に賛成派からは再び怒号が飛び出した。それに対して反対派もすさまじい怒号で返す。まさに一触即発だ。

「お前ら、何をやってるか！」

あまりの騒ぎに、ついに見かねた警官数人が両派の間へと入った。両派とも興奮おさまらぬという感じではあるが、警官が介入したことにより、乱闘に発展することはなくなった。

菅林は振り返り、後ろに控えていた瀬川と二言三言交わした。

「みんな落ち着け！」

瀬川が怒り狂う集団を宥めてまわった。菅林はここで「守る会」と争うのは、賛成派にとってメリットがないことを悟ったようである。

「みなさん、行きますよ。こんなのを相手にしてはいけません」

そして菅林は、前に立ち塞がる「守る会」の集団を避け、石段の方へ移動した。賛成派の集団もそれに続いた。

「このボケが！ お前も狼様に呪い殺されてしまえ！」

清太が最後に毒づいたが、菅林は振り返ることなく、石段を下りていった。

菅林たちが去った後、神社の境内には何とも言えない気まずさだけが残った……。

大神島開発計画を巡る賛成派と反対派の争い。その一部始終を壮介はじつと見つめていた。これが島を二分する争いである。

壮介はふと横を向いた。そこには壮介と同じく窓の外を見つける加美姉妹の姿があつた。

しかし姉妹の表情はそれぞれ違っていた。神妙な表情で見つめる遙に対し、千絵子はまるで汚いものでも見るかのような蔑みの視線であつた。

そんな二人の表情を見比べ、壮介は頭をガリガリと掻いた。

「ったく、どいつもこいつも！」

窓の外を見つめ、千絵子が苛立ちに任せて吐き捨てた。隣では遥が膝を抱えて座っている。

神社の境内には「守る会」の法被を着た面々が次々と現れ、境内周辺をうろついていた。何をしようとしているのかは壮介たちには判らない……。

壮介も千絵子と同じく、窓の外を眺めているが、心は全く別の所にあつた。

壮介は清太が去り際に言つたことを思い出していた。

「お前も狼様に呪い殺されてしまえ！」

清太は「お前も」と言つた。ということは、もう一人「呪い殺された」人物がいるということ。

もしそれが今回殺された志都美のことを指しているのならば……、
「ああ、くそ……」

苛立つた壮介は、頭をガリガリと掻き耨る。

そんな時、後方から壮介の名を呼ぶ人物がいた。

振り向くと声の主は喜志であつた。

そして喜志の隣には長渡も一緒におり、壮介たちに向かつて手招きをした。壮介は加美姉妹を促して立ち上がり、喜志たちの元へと移動した。

「新谷君はもう終わつてもいいぞ。長い時間ご苦労だった」

長渡は壮介の肩をポンと叩いた。

「先生もお疲れ様でした。ご協力感謝します」

「いえいえ、こんな爺でも役に立つなら、いつでも協力しますで」
二人は互いに深々と頭を下げた。

「じゃあ行こうか」

喜志は壮介を出口の方へと促した。

「あの、遥さんたちは？」

「加美家の方々には、まだ聞きたいことがあるんだ。申し訳ないがもう少し協力してくれ」

すると長渡の言葉に、千絵子の苛立ちが爆発した。

「何だよ！　うちら洋二の付き添いで来ただけで、そんな関係ないじゃんか！」

「落ち着いて！　二、三聞きたいことが増えたんだ。すまないが協力してくれ」

長渡は千絵子をなだめるような口調で答えた。

千絵子は納得できないような様子であったが、遥は長渡に向かって頭を下げた。

「判りました。ほら、お姉ちゃん」

「ありがとう。ではこっちへ来てくれ」

二人は長渡へ促され、公民館の二階へと上がっていった。

その姿を見送った壮介は、玄関の方へと移動した。

「あれは……」

公民館の玄関で、壮介はある人物の後姿を確認した。

それは洋二だった。

「あれだけ細かく尋問されてたつばいのに、もう疑いが晴れたのか？」

洋二の後姿を見つめながら、壮介はボソツと呟く。

「彼が犯人じゃないのは、判ったことじゃて」

壮介の小さな呟きに、傍にいた喜志が返してきた。

「それはどういうことです？」

壮介の問いかけに、喜志は黙ったままであった。そして無言のまま靴を履き、玄関を出た。

「喜志先生！」

壮介は慌てて靴を履き、貴志の後を追った。

「喜志先生、僕は一つ気になっていことがあります」

「なんじゃて？」

壮介が気になっていること、それは壮介が駐在所の檻に入れられている時……。

「先生が、檻に入れられている僕を見た時、駐在さんに向かってこう言いましたね。「彼は島の人間じゃない」と」

すると喜志の眉がピクツと動いた。

「はて、そんなこと言っただろうか？」

壮介は、何故この島の人間でないという事実が、今回の殺人事件の容疑者ではない証明になり得るのか、ずっと気になっていたのである。

「何か関係あるのですか？ 今回の殺人事件と、この大神島が」

「……………」

壮介の問いかけに、喜志はしばらく無言であったが、ついにその重い口を開いた。

「あの殺人、島の人間でないとできない、思いつかない……………」

壮介は貴志の言っていることの意味が理解できなかった。

「あの傷、君も見ただろ……………」

志都美の身体は鋭利な刃物で全身をズタズタに切り裂かれていた。

「あの、まるで獣に引っ搔かれたような傷じゃて」

「引っ搔かれたような傷……………」

壮介はあの時のことを思い出してみた。確かにそれはまるで引っ搔かれたような傷であった。

そしてここで壮介はピンときた。

「ま、まさか……………あれは」

「そうじゃ、あの傷は狼の爪でつけられたものに間違いないじゃろうて」

狼の爪……………それは大神祭で使われている神具。しかし祭で使われているのはプラスチック製のレプリカで、本物は三年前に紛失し

たと、壮介は千草から聞かされていた。

「しかし、祭で使われているものに殺傷能力はないはずですよ。まさか、本物がこの島のどこかにあるというんですか？」

すると喜志は大きなため息をついた。

喜志は一体何を知っているのだろうか？

喜志は一体、壮介に何を伝えようとしているのだろうか？

「本物の……、鉄製の狼の爪は三年前にどこかへ消えてしまった。それは知っているんじゃない？」

喜志の問いかけに、壮介は深く頷いた。

「実はな、その狼の爪と同じ日に、忽然と姿を消した者がいたんじゃない」

壮介の頬に汗がツウツと流れ落ちる。

「加美大助じゃ。あいつは狼の爪を持って、どこかへ消えてしまったんじゃない」

加美大助……、遥と千絵子の父親である。

「じゃ、じゃあ、二人は？」

「間違いないじゃろう……。警察は大助を重要参考人として身柄を押さえにかかるじゃろうて。それで大助の情報を姉妹から聞き出したいんじゃない。尤も、二人が大助の居所を知っているとは思えんがの」

三年前、狼の爪を持って失踪した大助が、島に帰ってきている？
そして志都美を惨殺した？

警察はそんな疑いを持っているのか？

しかし、ならば何故大助は志都美をあんな無残な姿にしなければならぬのか。

壮介には殺人の動機が全く思いつかない。

そしてまた頭をガリガリ搔いていると、喜志が壮介の肩を掴んだ。
「新谷君！」

喜志の目は真剣そのものである。

「悪いことは言わん。早くこの島から出られよ！ この島には、と

んでもなく恐ろしい「狼」がおる！」

突然の喜志の必死の訴えに、壮介は身体を硬くする。
壮介は何も言葉を返すことができなかった。

ミーンミーンミーン……

セミの鳴き声だけがやかましく響いていた……。

第七章 姉妹の想い

—

真夏の太陽が、西の海へと傾き始めた頃、島の南側にある小さな砂浜（といっても全く整備されておらず、ゴミや流木が散乱している）に一人の少女が佇んでいた。

その少女は長い黒髪を海風でなびかせ、ただただ海の向こうを見つめている。

表情はどう表現していいか判らない。ただ、少なくともほころんでいる様には見えない。何か、とても厄介なことを思案しているようにも見えた。

ジャリ……

女性が一步前に出ると、小石の混ざった砂浜が音を立てる。一步、また一步と波打ち際に向かって歩を進める。

そして足元に波がかかるくらいまで来たところで、少女は足を止めた。

ジャリ……

少女の後方で、砂浜を踏みしめる音が聞こえる。しかし少女は振り向かない。今までと同じように、海を見つめている。

ジャリ…… ジャリ……

砂浜を踏みしめる音は、次第に少女の元へと近づいていく。そして少女の真後ろまで来たところで、その音は止んだ。

「こんな所で、何をしているんだい？」

足音の主は一人の男性。男は海を見つめ続ける少女に、優しい口調で声をかけた。

それに対し、少女は何も聞こえなかったかのようにまるで無反応。振り返ることも、返答することもない。

「ふふ……、君がこの砂浜に来るのは久し振りじゃないかな？ よ

くよく考えたら、君と初めて出会ったのも、この砂浜だったね」

男は少女の背中に向かい、ペラペラとしゃべり始めた。まるで恋人に自慢話をするかのように……。

「あの時の君も、こんな感じだったね。一見したら寂しそうな雰囲気だけれど、近寄ってみたら火傷しそうなくらい熱く煮えたぎっている」

男は話し続けるが、女性は全く反応しない。

ジャリ……

男は歩を進め、そして少女の横に並んだ。少女は視線を送ることもなく、正面を向いたままだ。

「噂……聞いたよ」

今まで柔らかな口調で話していた男のトーンが、一気に低くなった。

「聞いた時、僕も嘘じゃないかって思ったんだ。そんな筈はないとでも、もしかしたら本当の話なんじゃないかって……」

ジャリ……

すると今まで無言で海を見つめていた少女の踵が返った。少女は海と反対方向を向き、視線は足元へ落ちていた。

「勿論、君の話を疑っているわけじゃない。ただ、今回の一件……、どうも一筋縄じゃないような気がするんだ」

「……………」

すると少女は男の方を向いた。少女の表情に喜怒哀楽はない。ただ口を真一文字に結び、男の瞳に喰い入っていた。

そして、

男は少女を抱きしめた。

男は少女の耳元で何かを呟いた。何度も何度も……。

しかし、

「あ……………」

少女はそれを拒否するかのように、男の胸から飛び出した。

そしてもう男の方へ振り向くことはなく、砂浜を去っていった。

独り残された男は、その後姿を追うことはなく、ただただ少女の影がみえなくなるまで見つめていた。

風にたなびく、長い黒髪を……。

二

「お邪魔しまーす」

カバンを抱えた壮介は診療所の二階へと上がっていった。

「ここじゃて、好きに使ってくれてええ」

喜志は二階の一室へと壮介を通した。四畳半のその部屋には家具類は全く置かれておらず、長い間使われていない様子。中へと通された壮介は、部屋の真ん中にカバンを置いた。

壮介が診療所の二階へとやってきたのには訳があった。

壮介がこの島へとやってきた目的は、祭の風景を写真におさめることである。それが終わった壮介はこの日の朝に島を離れる予定であった。

しかしこの夏二度目となる殺人事件遭遇。しかも第一発見者である壮介を、警察は簡単に帰す筈がない。主任である歌籐は事件解決の目途がつくまで島に残るよう、壮介に指示してきたのだ。

しかし壮介は祭が終わればさっさと帰るつもりにしていたため、余分なお金を持ってきていなかったのである。つまりそれは川住旅館の追加支払いができないということ。主人である清太はタダで泊めるわけにはいかないと、壮介の滞在を拒否。事情を知っている喜美恵が壮介を弁護するも、結局聞き入れられることはなかった。

途方にくれた壮介であったが、ここで喜志が救いの手を差し伸べ、診療所の二階にある空き部屋を、壮介は無償で借りられることになったのである。

「本当にありがとうございます。危うく駐在所の檻に逆戻りするところでした」

壮介は苦笑いを浮かべながら、何度も貴志に頭を下げた。

事実、壮介の滞在場所がどうしても決まらない場合、捜査本部が壮介の寢床を考えるとなっており、あの駐在所の檻も選択肢の一つであった。

「で、新谷さんはこれからどうするんじゃない？　ずっとここで縮こまってるわけにもいかんじゃて」

「そうですね。取り合えずは島を色々探検してみようと思います。島から出ない限り、外を出歩くのは勝手ですからね」

壮介が警察から指示を受けているのは「事件にケリがつくまで島から出ないこと」。つまり考えようによっては、島を出ない限りはどう行動しても自由というわけである。それを聞いた喜志は思わず笑みをこぼした。

「まあ勿論、危ない橋を渡るようなことはしませんよ。もう檻の中へ入れられるのはまっぴらですから」

「確かに。何せあの駐在所は古いからの」

喜志は何か含みを持たせ、豪快に笑った。それにっられ壮介も思わず笑ってしまった。

そして部屋に荷物を置いた壮介は、一階へと降り診療所を出た。喜志はこれから午後の診療ということで、壮介一人で出かけることとなった。

まず壮介は遺体発見現場である倉庫へと行ってみることにした。現場は今も規制線が張られ、倉庫の入り口の前には制服警官が二人直立不動である。一般人である壮介はどうにも中へは入れそうにない。そして今も現場検証が行われているのだろ。捜査員が数人倉庫の前を歩き来していた。

「こんな所でずっと立っていたら、また怪しまれるな……」

警官の視線が気になりだしたのか、壮介は頭を掻きながら、結局何もせず倉庫前を離れることとなった。

そして石段を上がって程なく、見覚えのある建物が現れた。

「あ、遺体発見現場って、加美家のすぐ下だったんだ」

一際目立つ大きな屋根の加美家である。例の倉庫が加美家よりも下にあったことを、壮介は初めて気付いた。

壮介は加美家の門へ首を突っ込んでみる。すると玄関の扉が開いていた。誰かいるようである。

そして壮介が門の中へ足を踏み入れようとした時……、

「わあっ！」

誰かが壮介の背中を押した。危うく顔面から転びそうになった壮介であるが、何とか体勢を保ち後ろを振り返った。

「あ、千絵子さん……」

壮介の後ろには加美千絵子がビニール袋を携えて立っていた。

「アンタ何してんのよ？」

千絵子は壮介を睨み付けた。その視線には強い警戒心が滲み出ている。それに気付いた壮介は取り繕うように苦笑いを浮かべた。

「あ、いやあ……。も、もう捜査本部から解放されたんですね。よかった……」

壮介は取り合えず話題を変えてみたが、とても白々しい。千絵子もそれ察知したようで、壮介の笑顔に対しても警戒心を解こうとはしなかった。

「もうだいぶ前に終わったよ。メチャうざかったけれど、遥の顔も立ててあげないとね」

そして千絵子は壮介を横切り、玄関の方へ移動した。

壮介は思い切って訊ねてみた。

「お父さんのことですか？ 聞かれたのは……」

すると千絵子の足がピタツと止まった。壮介は振り返り、千絵子の背中を見た。千絵子は振り返ることなく立ち止まったまま……。

壮介は次の言葉が喉まで上がってきていたが、あえて言わなかった。千絵子の反応を見ているのだ。

そしてしばらくの沈黙があった後……、

「入りなよ。用があつてうちに来たんでしょ？」

千絵子は振り返らず、そう言い残し、屋敷の中へと入っていった。

そして壮介も、屋敷の中へと入っていった。

三

屋敷の中へと入った壮介は、居間へと通された。壮介の突然の訪問に、遥は少し驚いた様子だったが、すぐに来客用の座布団と扇風機、そして冷たい麦茶を出してきて壮介をもてなした。

居間にはテーブルを挟んで千絵子と壮介の二人。お互い麦茶を飲みほすと、視線を合わせた。

「お父さん、島に帰ってきているんですか？」

壮介は単刀直入だった。

加美姉妹の父である加美大助……。彼は三年前、大神神社の神具である狼の爪とともに、忽然と姿を消した。

そして今朝、全身を狼の爪で切り裂かれたと思われる、新居志都美の遺体発見。

そこで否が応にも噴出してくるのが「加美大助犯人説」である。もしかしたら、加美大助はいつの間にか島に舞い戻ってきているのではという憶測が起こるのである。

そして千絵子は、しばしの沈黙の後、大きくため息をついた。

「つたく、刑事と同じこと聞いてくんだったの」

千絵子はお盆の上に載せられている、麦茶の入った水差しを手に持ち、麦茶を自分のコップへと注ぎ、グイッと飲みほした。

「それに関しては何も知らない。少なくとも、うちらは何も知らない」

千絵子の視線は、空になった自分のコップへ向けられている。

「でも、何か島で変な噂が流れているんだ」

「噂？」

千絵子の声のトーンが変わったことを、壮介は敏感に感じた。

「私も又聞きだから、詳しい事は判らないんだけど……、昨日大神島行の渡船で、親父に似た人が乗ってらしいんだ」

「……！」

壮介は思わず頭をガリガリと掻いた。

「じゃあ、警察はそれを確認したかったんですね」

壮介の問いかけに千絵子は頷く。警察も聞き込みか何かで、千絵子が聞いた噂は耳に入っているだろう。そして狼の爪が今回の凶器であるならば、加美大助が大神島へ帰ってきている可能性が高い。

そして同時に、今回の犯人が加美大助である可能性も、高いということである。

これは三年間、父の帰りを待っていた姉妹……、特に遙にとって、あまりに酷な現実であった。

「なあ、アンタはどう思う？　うちの親父が志都美を殺した犯人だと思う？」

千絵子の問いかけに、壮介はしばらくの沈黙の後、口を開いた。

「今の状況では何とも言えない。情報が少なすぎるから……」

警察にとつてもそれは同様。加美大助が大神島に帰ってきているかどうかは単なる噂に過ぎない。とりあえず加美大助の所在を掴まない限り、話は進展しそうにないのだ。

おもむろに千絵子は空のコップを手に持った。

「もし……もし、親父が志都美を、本当に殺したってんなら……」
コップを持つ手は小刻みに震えていた。

「どんな理由があっても、私は絶対に、親父を許さない、ゆるさない……」

そして小刻みな震えは手だけに留まらず、千絵子の身体全体に広がっていった。

その時、襖の向こうで、鼻を吸るような音が聞こえた。

それはおそらく、二人の話を立ち聞きし、声に出して泣くことを必死に耐えている遙であった……。

「お父さんを、信じてあげようよ。まだ犯人と決まったわけじゃない……」

すると千絵子は顔を上げた。目には涙が溢れんばかりに溜まって

いた。

「だったら、だったら何で、消えちまったんだよ！ 何でうちの
こと放っておいて、いつまで経っても帰ってこねえんだよっ！」

千絵子は両手でテーブルをドンツと叩いた。衝撃でコップの底が
一瞬浮いた。

ここで壮介は、自分の発言がいかに軽率なものだったか悟った。
この姉妹、三年前に父親が謎の失踪を遂げた後、とんでもない苦労
があつたに違いない。加美家を独りで守っている遥は勿論のことだ
が、一見チャラチャラした格好の千絵子にも、それなりの苦労があ
り、また遥以上に父親のことを心配しているのだ。そんな二人に薄
っぺらな同情心をかけることは、してはいけないことなのである。

「ゴ、ゴメン……」

壮介は自分の発言を悔い、そして恥じた。頭をカリカリと掻き、
そして唇を噛んだ。

「いや……、別にアンタが悪いわけじゃない。こつちも急に大きな
声出して悪かった」

千絵子も冷静さを取り戻したようで、壮介と同じように頭をカリ
カリと掻いた。

「遥、いつまでそんな所にいんの。アンタもこつちに来て」

千絵子の呼びかけに、しばらく間があつた後襖が開いて遥が居間
へと入ってきた。

手には湿ったハンカチが握り締められていた。

「私たちがまだ幼い頃、母は病気で亡くなりました。それから父は、
男手一つで私たちを育ててくれました。厳しくもあり、優しくもあ
る……、私たちが今あるのは父のおかげなのです。だから……、そ
んな大好きな父に殺人の疑いがかかけられているなんて、とても信じ
られません。そんなの、絶対に有り得ないんです！」

遥は時折震える声で、壮介に今の心境を吐露した。涙こそ流れて
いないが、手にはハンカチがしっかりと握られている。

遥にとって、父に殺人の嫌疑がかけられていることは、まさに身を切り裂かれることと同じこと。そもそも、狼の爪を持ち去ったという話も遥は疑いを持っていた。大助が失踪したと同時期に紛失したということは事実であるが、だからといって大助が持ち去ったという証拠は何一つない。全ては憶測なのである。

そして大助が大神島に帰ってきているということも噂にすぎない。しかし……、ならば大助は三年前、何故姿を消してしまったのか？

壮介は腕を組み、考えごとをしていた。そして頭をカリカリと掻いた後、口を開いた。

「聞きたいことがあるんだけど、いいですか？」

「あ、はい」

壮介の問いかけに遥が頷いた。

「喜志先生に聞いたんだけれど、お父さんは「守る会」の初代会長だったんですよね？　三年前、開発計画絡みで何か変わったことってありましたか？」

それを聞いた遥は黙り込んだ。三年前の記憶を引っ張り出しているようである。隣に座っている千絵子も、遥と同じような表情をしていた。

「……よく覚えてないな。正直あんまり興味なかったから先に口を開いたのは千絵子であつた。」

「そうですか……。遥さんはどうですか？」

壮介は再度遥に問いかけてみた。

「そうですね、私もよくは覚えてないのですが……」

遥は口元に手をあて、申し訳なさそうに答えた。

「ただ、三年前は開発計画の風当たりが今よりも強かったと思います」

三年前はまだ開発計画が大神島に持ち込まれて日が浅い。

「そうだね。この島の人間は揃って保守的だから。正直、ガチガチの賛成派は今でも菅林と瀬川の二人くらいじゃないの」

「保守的ね……」

壮介はかつて千草の話した「ある言葉」を思い出した。

この島は、忘れられることを、自ら望んだ島

「……、今の反対派と賛成派の割合ってどんな感じなんですか？」

「そうですね……。今は大体半々くらいですかね。計画の具体的な内容が発表されてから、賛成する方が一気に増えました」

計画の具体的な内容……。それは壮介が診療所で見た開発計画の冊子に書かれてあったもの。あまりの希望的観測に壮介が鼻で笑ったアレである。

この島の人間の殆どが保守的な思考ならば、多くが外から持ち込まれた開発計画に対し拒絶反応を示すのが普通である。しかしこの三年間の間で島の人間の約半分を心変わりさせたのだから、菅林らの辣腕に頭が下がる。逆に加美大助から「守る会」の会長を引き継いだ川住清太は厳しい立場に置かれることとなったのだらう。あの神社でのやり取りの激しさは、開発計画賛成・反対だけでなく、殿同士の意地のぶつかり合いの表れでもあった。

「これは噂だけれど、菅林は結構な札束をバラ撒いたらしいよ」

千絵子はテーブルに頬杖をついていた。開発計画には全く興味がないという様子である。

しかし壮介はそんな姿に違和感を覚えた。

「結構、お詳しいみたいです」

すると千絵子は大きなため息をついた。

「まあね。この島の人間になっちゃったら、お金の汚い話は嫌でも耳に入ってくるのよ」

「そうですか……」

「そうよ。それが嫌で島を出たようなものなんだから」

壮介に答える千絵子は、やや不機嫌そうな表情であった。

「だから、遥には感謝してる。私が好き勝手やってるのは、全部遥のおかげだから」

千絵子は頼杖をついたまま、視線を隣の遙に送った。その表情は先ほどとは違い、とても優しいものであった。

「お姉ちゃん……」

そんな千絵子に、遙は少し照れながらも笑顔で返した。

「仲、いいですね」

「そうね。私の可愛い妹だから！ 手を出したら只じゃおかないよ！」

千絵子は壮介に向かい、「冗談交じりにそう答える。

千絵子と遙……」。

姉は金髪にメッシュにギャルファッション。妹は昭和の田舎娘といった感じ。

見た目は両極端で、今は離れて暮らしている。しかし心はいつでも繋がっている。

そんな姉妹の絆を感じた壮介は、笑顔を見せずにはいらなかった。

四

「ところでアンタ、今喜志先生のところにいるんだってね？」

玄関まで見送りに来た千絵子が、壮介に訊ねてきた。

壮介は加美家で姉妹と話し込み、随分長居をしてしまった。西の空は赤くなり、東の空には暗くなり始めていた。

「ええ、危うく宿無しになるところを、喜志先生に拾ってもらいました」

「ふーん。で、御飯とかどうしてんの？」

「まあ適当に。港の近くに色々あるみたいだから、そこで調達しますよ」

すると千絵子は一旦屋敷の方へ振り返ってから、一步壮介に近付いた。

「もしよかったらさ、今晚うちで一緒に食べない？」

壮介は千絵子からの突然の提案に戸惑った。昨日初めて会った時から今の今まで、壮介に対し警戒の目を向けていた千絵子が、どういう風の吹き回しかという感じである。

「いやあ、別に深い意味はないんだけど、遥がね……」

千絵子は玄関の様子を気にしながら、頭を掻きながら話し始めた。「最初話してた時は、内容が内容だったから、遥すんごいブルーだったんだけど、その後アンタの話している時、けっこう楽しそうだったんだよね。あんな遥、久しぶりにみたよ」

父である加美大助の話の後、壮介たちは他愛のない雑談に花を咲かせていた。遥の島での生活の話、壮介の通う大学の話、千絵子の勤める職場での話……。そんな話をしているうちに、それまで重苦しかった空気が徐々に和んできたのだった。そして沈痛な面持ちだった遥の表情にも、どこことなく余裕が生まれ、そして笑顔を見せることもあった。

「まあ私もさ、仕事の関係で全然島に戻ってこれなくてさ、今回も一年振りなんだ。ホントはもっとちゃんと帰ってきて、遥を支えてあげたいんだけど……」

千絵子が話し始めたのは、その派手な見た目からとても想像できないものだった。周りから「島を捨てた」「妹を捨てた」などと後ろ指を指され、またその格好も相まって偏見の眼差しで見られている。本人もそんな島にはある程度の「見切り」をつけているのかもしれない。

しかし妹を想う気持ちは今も昔も全く変わっていない。どれだけ離れていても、会えなくても、遥のことを想っている。そしてそれは遥も同じであろう。遥も同じように千絵子を想っている。

「私はホントにダメなお姉ちゃん……。私ばかり好き勝手やってる……」

千絵子は自嘲気味に笑った。千絵子は自分を責めていた。自分のせいで、遥は大神島に縛り付けられていると……。

「だからさ……だから、遥には！」

ここで壮介は一步前に出た。それを見た千絵子の言葉は詰まった。
「判りました」

「え？」

壮介の突然の発言に、千絵子は戸惑った。その姿を見た壮介は、苦笑いをしながら頭を掻いた。

「今晚、お呼ばれます。ただ、喜志先生には一声かけさせてもらいます」

それを聞いた千絵子は一瞬目を丸くしたが、すぐ普段の表情に戻る。

「そう、判った。じゃあ遥にも伝えとくね」

そして壮介は門の外へ出た。

「あ、そうだ！ 一つ聞き忘れたことがあった」

壮介は門の外へ一歩足を踏み出していたが、その足を門の中へ戻した。

「そう言えば、新居志都美さんとは、具体的にどのような関係だったんですかね？」

すると千絵子は少し悲しそうな表情となった。志都美が亡くなったことによる心の傷は、当然のことながら簡単に癒えるものではない。

「同じショップで働いている者同士。アイツは私のこと先輩って呼ぶけれど、実際はアイツの方が先輩なの。まあ私の方が年上だからそう呼んでたんだろうけど」

つまり歳は千絵子の方が上だが、職場歴は新居志都美の方が長いということ。

「カレシの洋二は、実は私もよく判らないんだ。どっかのコンパで知り合ったとか言っていたけど」

「そうですか……」

まあ都会の若者にはよくある話である。壮介のカノジョも、コンパで知り合ったことがきっかけである。

「ありがとうございます。では一旦診療所へ戻ります」

壮介は千絵子に向かって頭を下げ、石段を下り始めた。

「あつ、ちよつと待って！」

数段下りたところで、千絵子が壮介を追ってきた。壮介が振り向くと、千絵子は今まで壮介には見せたことのない笑顔であった。

「ありがとうね、壮介！」

壮介に向かってそう叫ぶと、千絵子は屋敷の方へ戻っていった。

千絵子が始めて、壮介の名前を呼んだ。

千絵子はようやく、壮介に対する「壁」を取り除いたようである。それを知った壮介は少し照れ笑いながら、石段を下りていった。

千絵子が壮介に対する「壁」を取り除いたきっかけとは？

それは千絵子が自分を責め続けていた時、一歩前に出て言葉を遮ったからだろうか……。

あの時、壮介は何を考え、一歩前に出て言葉を遮ったのだろうか。「あのまま話し続けられていたら、潰れてしまっていたかもしれない……」

もしかしたら壮介は、そんなことを考えていたのかもしれない……。

五

東の空がほぼ暗くなり、西の空が僅かに赤い光を放つ頃、長い黒髪をなびかせて、その少女は港にいた。

少女には相変わらず表情というものがなく、口を真一文字に結んでいる。

そして少女は船着場の棧橋から、本土の方をずっと見つめていた。何度も渡船が往復する中、まるで誰かを待っているかのように佇んでいた。

そんな少女の姿を見て、声をかける人は何人かいた。しかし少女は何も反応も示さず、今となっては誰も少女へ近付こうとはしなかった。

「……………」

長い髪が夕風揺れる。その姿はどこか神秘的な美しさを放っているのと同時に、少しでも触れたら壊れてしまう脆いガラスのような儚さも漂わせていた。

そしてそのままの状態で、どれほどの時間が経っただろうか。

少女の口元が僅かに動いた。

そして……、

「何か御用？」

少女が口を開いた。誰に対して訊ねているのか？ 少なくとも少女の前方には誰もいない。

ならば、少女の後方に、誰がいる。

そして少女を振り返る。

振り返った少女の前には、一人の男性が立っていた。

「やあ」

男性は右手を挙げ、少女に笑顔で話しかけた。

少女は長い黒髪を夕風にはためかせ、じっと前を見つめていた。

「あれ以来、姿見てなかったけれどどうしていたんだい、千草さん」

「新谷さん？」

千草は壮介の登場に少し動揺した様子で、眼鏡の奥の瞳がやや泳いでいた。

「いやあ、港の前を通りかかったら、千草さんっぽい後姿があったんでね。人違いならアレだったんだけど、思い切って声をかけさせてもらったよ」

壮介は頭を掻きながらそう話した。

「ところで、こんなところで何をしてるんだい？」

壮介にとって、千草がこんな時間に港にすることが不思議でならなかった。普通ならこの時間帯、川住旅館は夕食時で一番忙しい時である。そんな時に旅館を離れて港にいるというのは、意外なことであった。

「……………」

壮介の問いかけに、千草は沈黙を保ったまま。再び口を真一文字に結んでいた。

「千草さん？」

そんな千草の様子を、壮介は不審に感じた。いつもの千草とはどこか違うと。

そして壮介も口を真一文字に結ぶ。様子がおかしい千草に対し、どう話しかけていいか苦慮している様子だった。

沈黙したまま向かい合う壮介と千草。このままずっと時間だけが流れていこうとする。

その時、千草の口元が僅かに緩んだ。

「知りたいですか…………？」

壮介は戸惑った。千草の表情が、壮介の知っている千草のものではないように見えたから。

「新谷さん、あなたの顔に書いてありますよ。フッフ……………」

すると千草は歩を進め、壮介と肩が並んだかと思えば通り過ぎ、栈橋を後にする。

「もし本当に知りたいならば、ついて来てください」

千草は一瞬振り向きそういい残すと、港の出口の方へ去っていくとする。

「あ、ま、待って！」

それを見た壮介は戸惑いながらも、千草の後を追いかける。

「どこに行こうって言うんだ？」

壮介は背中越しに訊ねた。

すると千草は立ち止まり、振り向かずには答えた。

「この大神島の象徴、忘れられた浜ですよ……………」

第八章 夕闇の砂浜

—

辺りはもう真っ暗だった。

西の空だけが僅かに明るい、そんな時刻。

壮介は黙々と歩き続ける千草の後を追っていた。

「……………」

もう辺りは暗く、外灯もない道を歩き続ける。今の壮介はあまりの暗さに、千草の姿を見失ってしまうどころか、足元を踏み外して側溝に落ちてしまうという不安にかられる有様だ。

壮介は千草の後を追っているだけなのだが、もうついていくのがやつとで、とても横に並んだり前方に出たりということができない。それはあまりの暗さに恐る恐る歩いているということもあるのだが、それ以上に壮介は言葉にできないような息苦しさを感じていた。千草の歩くペースはいつもと変わらないようにみえるし、急な上り坂を歩いているわけでもない。

何かが壮介の胸を締め付けている……。

それは一体何なのか、壮介には見当もつかない。

「はあ、はあ……」

歩き続けるにつれ、壮介の呼吸が荒くなる。頬には汗が流れ落ち、壮介はまるで炎天下の中歩いているような状態となっていた。

壮介はふと足元を見た。

「ここは……」

港で千草と出会い、壮介はずっと石畳の上を歩き続けていた。しかし今壮介が歩いているのは石畳ではなく、まるで整備されていない獣道のようなところ。辺りを見回すと、いつの間にか周囲は草木が生い茂るような場所になっていた。どうりで真っ暗なわけである。そしてもう一つ壮介が気付いたこと。

それは波音だった。それもすぐ近くに。

壮介は波音のする方向へと顔を向けた。そこは漆黒の闇で何も見えないが、この暗闇の向こうに海があることを視覚以外の感覚で確かに感じ取っていた。

そして視線を再び正面に戻したその時だった。

「あれ？」

そこに千草の姿がなかった。まるで暗闇に飲み込まれてしまったかのように、消え去っていたのだ。

壮介は少し戸惑ったが、パニックになることはなく、そのまま前へと進み続けた。

しばらく歩き続けていると、急に道幅が狭くなり、木々の枝や葉っぱが壮介の顔や肩にふれる。壮介は枝や葉っぱを掻き分けるように前へと進む。

そして……………。

ジャリ……………、

砂を踏むような音がしたかと思うと、木々で遮られていた前方の視界が開けた。

「ここは……………」

壮介の目の前には、真っ黒な海が広がっていた。寄せては返す波の音が、静かに周囲を包んでいる。

壮介は辺りを見まわし、自分は今砂浜に立っていることを認識する。

ジャリ…………ジャリ…………、

壮介は再び歩き始める。砂浜は周りを樹木や磯場で囲まれているようで、海沿いには完全に遮断された場所になっていた。

砂浜には大小の石がゴロゴロしており、またゴミや流木といった漂流物も多く見られ、お世辞にも綺麗とは言えず、全く整備されていない様子だった。

「ん？ あれは……………」

壮介の視線は波打ち際に向けられていた。そこには人影がひとつ

……。

言うまでもなく、それは千草。

壮介は少し躊躇いながらも、波打ち際に佇む千草のほうへ歩いていった。

「フフフ……………」

壮介が千草の傍までやってくると、千草は何か意味ありげな笑みをこぼす。

港からここに至るまで、壮介にとって千草の行動は全く訳が判らないものであった。何の目的があつて、ここまで壮介を連れてきたのか？

「ねえ、ここは一体？」

千草の傍までやってきた壮介は、辺りを見回しながら訊ねた。すると千草は壮介の目を見て、ニヤツと笑う。

「フフフ、ダメじゃないですか新谷さん。こんな夜に出歩いちゃ…お化けに連れて行かれちゃいますよ」

「へ？」

千草の言葉に、壮介は目を丸くした。言っている意味が全く判らないという様子だ。

「き、君は一体？」

動揺する壮介に、千草は再び笑みで返し、海の方を向いた。

「新谷さん。実はね、島の名所で一つ、案内し忘れていた所があるんですよ」

すると千草は眼鏡を取り、壮介の方へ振り返った。

「それがここ、狼ヶ^{ろうがはま}浜です」

間もなく完全な闇が支配する空……。その中で笑みを浮かべて佇む千草はとても艶っぽく、神秘的。しかしそれ以上に何とも言えない妖しい美しさを放っていた。

その妖しい美しさは、壮介が思わず見とれてしまう程であった。

「そしてここは、大神島の象徴にして、みんなから忘れられた浜」
千草は壮介の瞳から視線を外し、とても十代とは思えないような妖しさを放ちながら語り始めた。

「この浜は、かつて狼の社が存在し、狼を鎮めるための生贄を捧げる場所だった。明治に入って、今の大神神社が建てられ、社もそちらへ移された。そして時代が進むにつれて、みんなこの場所の曰を忘れていき、そして終いにはこの浜の存在すら忘れていつてしまった……」

暗闇の中、千草は語り続ける。波の音しかない砂浜、千草の透き通るような声はまるで芝居の台詞のように次々と紡ぎだされていく。

「何故、忘れられていったと思います？」

千草は壮介に問いかけた。この問いかけを壮介にするのは二度目

……。

「みんなが、それを、望んだから？」

あの時、千草が言ったことを、壮介は恐る恐る答えた。
すると千草は微笑んだ。

「正解」

千草は壮介へと近付き、そして壮介の頬に手をあてた。

「私が言ったこと、覚えていてくれたんですね。嬉しい……」

壮介の頬にあてられた手に力が入り、爪が立てられた。

突然頬に走った痛み、壮介は思わず千草の手を振り払った。

「なっ……」

今度は自分の手を頬にあてる壮介。突然のことに動揺する壮介の姿を見た千草は、笑っている。

おかしい。

千草を見つめる壮介の視線はそう表現していた。今まで見たことのない千草が、壮介の前にいる。

ジャリ……と砂浜を踏む音が聞こえる。その音に壮介は一步後ろ

へと下がる。壮介の額には暑さからではない汗が滲んでいた。

「そしてこの島は、忘れられることを望んだ島だったんです」

千草の言葉を紡ぐ……。しかし壮介は千草の言葉よりも、千草と一定の距離を保つことに全神経を集中させていた。

「この島は古来より外界との接点が殆どなく、また自分たちの価値観を最優先してきました。よってこの島独自の価値観というものが生まれました」

千草は再び壮介から視線を外し、海の方へ向かった。しかし壮介は警戒を解かない。

「長い年月を経て、この島は外界に対して、非常に閉鎖的な社会となりました。新しい文化を拒み、変わっていくことを絶対的な悪としました」

変わっていくことが、絶対的な悪……。

それを聞いた壮介は、あの「守る会」を思い出していた。

彼らがあそこまで激しく開発計画に反対する理由の根底には、この島社会に代々伝わる精神が影響しているということなのである。

「でも……でも、もうそんな時代じゃないですよね」

壮介はビクツと身体を震わせる。背筋に冷たいものが走ったような様子だった。

壮介が思わず恐怖を感じる程、今の千草は言い様のない妖しさを放っているのだ。

「な、何が言いたいんだ？」

壮介の頬を脂汗がつたい、そして壮介は震える声で千草に訊ねる。すると千草はゆっくりと笑顔で振り返った。

「この島の人間はね、新しいものは拒み続けるけれど、自分たちにとって不都合なものは、簡単に忘れていく、とても都合のいい思考回路なの。本当、身勝手よね」

言い終わると同時に、千草の身体が壮介の方へと向いた。それを見た壮介は反射的に身構える。

「フフフ……」

そんな壮介を見て笑っているのか、千草は口元を緩めている。

しかし目は明らかに笑っていない。壮介が恐怖を感じているのは、その不自然な千草の表情にあった。

「判るよね？ 新谷さんなら、判って……くれるよね？」

「な、何を……」

壮介は千草に対して何かを言いたいようだったが、喉が張り付いて声帯が震えない、声が出ない。

「いずれこの島には、大きなホテルや旅館が立ち並び、外から人がたくさんやってくる。島の伝統なんてどこかへ吹き飛んでしまうでしょう」

千草は壮介へと一歩一歩近付いていく。今の壮介はまさに蛇に睨まれた蛙。後ろへ下がろうにも、足は全く動こうとしなかった。

「そして……この島に昔からあったものなんて、簡単に忘れてしまおう」

とうとう千草は壮介の目の前、それも両者の鼻がくつつくくらいの距離。お互いの呼吸が、お互いの鼻先をくすぐる。

「でも……、それが時代の流れというものですよね？ そうやって、常に時代は移ろいでいった……」

「！」

千草は再び壮介の頬に手をあてた。しかも今度は両手で。千草の瞳は壮介の瞳を捕らえようとする。しかし壮介は目を逸らす。

「そう考えれば、いつまでも昔のことにかじりついているなんて、とても滑稽ですよね！」

千草の口が、まるで口裂け女のように、その顔の端々まで広がった。そして壮介を洗脳するかのように、執拗に瞳を追い続けた。

「新谷さんも、そう思いますよね？ そう、思うよね！」

その瞬間、再び千草の手に力が入り、壮介の顔に千草の爪が喰い込んだ。

「うわっ！」

壮介は思わず声をあげ、力一杯千草を振り払った。その拍子に振

り払った側の壮介がバランスを崩し、砂の上に尻餅をついた。

壮介は痛みに顔をしかめる。それは尻餅をついた時の衝撃によるものではなく、頬に爪を立てられたことによるもの。壮介は右手で頬を押さえた。出血こそしていないが、生々しいミミズ腫れが出来ている。

「あら、大変……」

千草の言葉には、感情というものが全くこもっていない。千草は壮介の前に膝をつきしゃがみ込んだ。

「大丈夫、怖がらないで。その傷、私が治してあげる……」

言い終わると同時に、千草は自分の顔を、壮介の顔に近付けてきた。

そして……、

ベロツ……………、

舐めた……。

壮介の頬を、舐めた……。

「！」

壮介は驚きと恐怖のあまり、千草から離れようとする。

しかし……、

千草は壮介の両肩を掴んだ。しかも細身の少女とはとても思えないような力で、壮介の両肩を掴んでいる。決して華奢ではない壮介だが、全く逃れることができない。

「ほら、怖がらないで……。何なら私のことも舐めてくれて、いいのよ？」

千草は壮介の身体に馬乗りとなり、再び壮介の頬へ顔を近付けた。そして千草の舌が壮介の頬を這おうとした時、

「う、うわあああつ！」

遂に壮介の恐怖がピークに達した。壮介は大声とともに瞬間的にものすごい力を出し、千草の身体を押しつけた。今度は千草が尻餅

をついて砂の上に倒れこんだ。
そして壮介は、千草を介抱することなく、一目散に砂浜から走り去っていった。

三

漆黒の闇。波音だけが、静かに聞こえる……。

その中に、一人の少女が佇む。

その少女の名は、川住千草。

先程、壮介の身体に馬乗りになろうとして、跳ね除けられ、服には砂が沢山ついてしまった。

「……………」

千草は無言で、砂まみれとなった自らの姿を見つめている。壮介に跳ね除けられるも、その表情に怒りや悲しみといった感情は表れていない。

そして……、

「フフ……………」

笑った……。

「あの時と、同じじゃない……………」

千草はポツリと呟いた。そして海の方へと振り向き、一步一步波打ち際へと近付いていった。

「あの時の貴方と同じ……………」

そして足元に波が被るうかというところで、千草は止まった。

「でも……………」最後は私のモノになった。最初はあるなに嫌がっていたのにね」

暗闇に包まれた砂浜、千草以外には誰もいない。何の影もない。

千草は一体何者に対して話し続けているのだろうか？

「フフ、フフフ……………」

千草は肩を震わせながら笑い続けた……………。

そして、

「いるんでしょ？ さつさと出てきなさいよ！」

砂浜に、千草の絶叫が木霊した。

「ほら、いるのは判つてんのよ！ 今もどっかに隠れて、私のこと
見ているんでしょ？ 隠れてないで男らしく出てきなさいよ！」

千草は突然砂浜を走り出した。そして何者かを威嚇するかのよう
に、物凄い形相で喚き散らした。

「はっ！」

散々喚き散らした後、今度は急に静かになった。

「んもう、何怖がつてんのよ」

すると、さつきとは正反対に猫撫で声でしゃべり始めた。

「貴方、もしかして私のこと怖がつてるの？ フッフ、ホント怖が
りなんだから……。ほら、私全然怒ってないわよ。うん、怒ってな
い……。ほら、早く出ておいで、そして私といいことしましょ」

千草はブラウスのボタンに手をかけ、ブラウスを脱ぎ捨てた。そ
して上半身下着姿で、砂の上に座った。

「ほら……。はやくおいで」

千草はまるで車の下へと潜り込んだ飼い猫を呼ぶような声で語り
かけている。しかしどちらの方を向いて語りかけているのか、全く
判らない。それは千草自身も同じであろう。

「ほら、おいで……。おいで……」

最初は優しい猫撫で声。しかし次第にその声に棘が飛び出してく
る。

「おいで、おいで……。おいで！ お・い・で！」

千草の呼ぶ声に、誰も何も反応しない。ただただ波の音がするだ
け。

「……………」

遂に千草は黙り込んでしまった。

そして……、

「この、くそつたれがああっ！」

およそ人間とは思えない、鬼のような絶叫が、砂浜全体に響き渡

つ
た
……
。

第九章 混迷

—

豹変した千草を目の当たりにした壮介は、混乱と恐怖により狼ヶ浜から不恰好な形で逃げるように走り去った。途中、何度も足がもつれて転びながらも、必死に暗がりの道を駆け抜ける。そしてようやく港前の整備された道まで辿り着くと、壮介は全身の力が抜け切ってしまったかのように、その場にへたり込んでしまった。

「はあ、はあ、はあ……」

壮介は呆然としていた。その姿は、先程自分の身に起こったことを、一つ一つ思い出しているように見える。

壮介は自分の身体に砂がついていることに気付き、パツパツと手で振り払う。

そして、自分の頬についた傷に触れ、確信する。

これ夢じゃないと……。

「あああつ！」

壮介はまだ混乱している様子。奇声を上げ、頭をグシャグシャと掻きまわった。

その時、壮介の前に一筋の明かりが灯った。それに気付いた壮介は瞬時に立ち上がり身構える。

その明かりは壮介の方へ向かって近付いてくる。それに気付いた瞬間、壮介の表情は一気に強張った。目は見開き、額からは脂汗がいくつも流れ落ちる。鼓動が早くなり緊張が高まる。

「誰？ そこにいるの！」

前方の光から発せられたのは女性の声であった。しかし次の瞬間、強張っていた壮介の表情が緩み、再びその場にへたり込んだ。額からの汗は止まらないが、壮介の緊張は解けたようである。

壮介はその声の主を知っていた。

光は壮介の方へと近付いてきて、その光は女性の持つ懐中電灯であることを、壮介は認識する。

「新谷さん？ 新谷さんですか？」

道の真ん中でへたり込んでいるのが壮介であることに気付いた女性性は、慌てて壮介の元へ駆け寄ってきた。

「き、喜美恵さん？」

「どうしたんですか、こんなところで？」

駆け寄ってきた女性は、千草の母喜美恵だった。喜美恵はこんな所でへたり込んでいる壮介を不審に思いながらも、只ならぬ様子であることは理解した様子で、壮介に手を差し伸べた。

「何かあったのですか？」

喜美恵の問いに、壮介は困惑した。

言ってもいいのか、浜での出来事を、あの千草のことを、と……。しかも今日の前にいるのは千草の母喜美恵。壮介が躊躇うのも無理はなかった。

しかしだからと言って、何もなかったということも無理がある。何せ、道路にへたり込み、全身砂だらけで顔は汗ダラダラなのだから。

「……………」

壮介は頭をポリポリと掻くものの、しばらく黙ったまま……。その姿を見て喜美恵はますます不審がった。

「い、いやあ……別に大したことじゃないんですよ……」

しかしこのまま黙っているはずだと判断した壮介は、とにかくできる限りの笑顔を浮かべ、そして言葉を搾り出す。

「そ、そうなんですか？」

壮介のやつと搾り出した言葉に、喜美恵は顔をしかめる。喜美恵の目に今の壮介の姿は、どうみても「大したことではない」ように見えないからだ。

その喜美恵の表情の変化を見た壮介は、発言のまずさに気付き思わず頭を掻いた。

「え、い、いやあ……」

壮介は何か言わないといけない。ここで黙ってしまったては、さらに不審がられてしまう。

「ちょ、ちよつと……道に迷ってしまったて……」

壮介の言葉に、喜美恵は再び顔をしかめるが、ここで黙ってしまったてはまずいと、壮介は言葉を連ねていく。

そして壮介は喜美恵にこう説明した。

自分は加美家に呼ばれ、診療所から向かう途中、道を間違ってしまった。最初はすぐにあの石段に辿り着くだろうと樂觀していたが、だんだん暗くなるにつれて今自分がどこにいるのか全く判らなくなつてしまい、そして妙な獣道のような所に迷い込んでしまった。外灯もない暗闇の中、島に伝わる狼伝説を思い出してしまい、半ばパニックに陥り必死に道なき道を駆け回つた。そして何とかここまで辿り着いたのだ……と。

それを聞いた喜美恵は、釈然としない様子ではあつたが、大神島は夜になると、港以外は暗闇に包まれることも事実であり島の間人でも恐怖を感じることもある。だから喜美恵はそれ以上の追求はしなかつた。

「立てますか？」

喜美恵は壮介に再び手を差し伸べる。

「あ、いや、大丈夫です」

何とか切り抜けることができた壮介は、安堵感から笑顔を浮かべる。そして一度頭をポリポリ掻いた後、スクツと立ち上がった。

「加美さんの所へ行かれるんでしたよね？　そう言えば千絵子ちゃんを探していましたよ」

壮介は加美家の去り際、千絵子に一旦診療所へ戻つてから来ると伝えている。加美家から診療所まで石段を往復で三十分程。それがもうあれから二時間以上経過していた。加美家の二人は心配でやきもきしていることであろう。

「ああ、そうですね。僕はこれから加美家へ向かいます。では、僕

はこれで……」

急に加美家のことが心配になった壮介は、喜美恵に一礼をしてその場を後にしようとする。

「あの……」

しかし壮介は喜美恵に呼び止められる。その瞬間、壮介の心臓は胸から飛び出してしまいうくらいに跳ね上がった。

「あの……、千草、知りませんか？」

壮介の心臓は数えるのも追いつかないくらい、高速で鼓動を刻んでいる。しかし壮介はそんな動揺を悟られぬよう、喜美恵の方へ振り返る。

「千草さんが、どうかしたのですか？」

喜美恵は不安気な表情を浮かべる。

「ええ、実はお昼に出てっってから、あの娘戻ってこないんです。いつもなら夕方頃には必ず戻ってくるのに」

壮介は汗を拭う。もう何が原因で出てきた汗か判らなくなっていた。

「そうなんですか……。確かに変ですね。あんな働き者の千草さんが、旅館の仕事を放っぱりだすなんて」

壮介は普段どおり答えているが、内心かなり言葉を選んでいる。そして答えていいのか迷っていた。

触れてしまっているのか迷っていた。

狼ヶ浜で見た、千草のことを……。

「すいません、僕も会ってないです。というか、ぶっちゃけそれどころじゃなかったの……」

結局壮介は、狼ヶ浜での一件を、喜美恵には伝えなかった。

本来なら、娘の身を案ずる母のために、伝えるべきことなのだろう。しかし今の壮介には、そこまでの心的余裕はなかった。

早くこの場を離れたい。その一心だった。

「そうですか……」

壮介の返事を聞いた喜美恵は、落胆の表情。こんな暗闇の中、一

人で娘を探しているのだ。それだけでも不安であるのに、今朝この島で殺人事件が起こっている。それにより喜美恵の不安に拍車がかかる。

「私はもう少し探してみます。新谷さんもお気をつけて」

「すみません、お力になれなくて……。もし見かけたらお知らせします」

喜美恵は壮介に一礼をして、港の方へと歩いていった。

そして壮介も、加美家へ向かうため石段へと歩いていった。

二

「この馬鹿っ！」

石段を駆け上がり、やっとの思いで加美家に辿り着いた壮介を待っていたのは、千絵子のビンタであった。

あの時、壮介は一旦診療所へ戻ると言って、加美家を後にした。普通なら三十分程で往復してこれそうな道。壮介の帰りに合わせるため、加美家では慌しく夕食の準備が始まる。

しかし三十分経過どころか一時間経つても、壮介が戻ってくることはなかった。

不審に思った遙は診療所へ電話する。診察に追われていた喜志ではあったが、壮介が一時間ほど前に顔を出していたことを遙に伝えた。

壮介は確かに診療所に戻り、そして加美家に行くと喜志に告げている。しかしそれからの足取りがぶつりと途切れてしまった。

喜志と話す遙の顔色が、次第に青ざめていく……。そして受話器を置いた頃、両目には涙が溜まっていた。

普通なら、どこかで道草喰ってんのかくらいにしか思わないこと……。

しかし今の大神島は普通ではない。

今朝、この島で新居志都美が惨殺されたのだ。

喜志の答えに、どうしようもないくらいの不安に襲われた加美姉妹。もしかして壮介の身に何かあったのではということが頭をよぎる。

そして不安のあまり泣き出す遙を見て、千絵子は壮介を探しに外へ出た。

神社、港、商店、ホテル等、島中を駆けずり回ったが、結局壮介を見つけることができなかった。

そして肩を落として加美家に帰ってきて、屋敷の中へ入ろうとしていたまさにその時、壮介は帰ってきた。

ビンタされた壮介は、何も言わなかった。というより、何も言えなかった。

このビンタの意味が、身に染みているからだ。

今朝殺人事件があったばかりで、犯人も捕まっていない。そんな中壮介は、本意とはいえ加美姉妹の前から姿を消してしまった。

千絵子の怒りも当然なのだ。

「ごめん……」

壮介はただ、そう言うしかなかった。

「あつ、新谷さん！」

人の気配に気付いたのか、遙がやってきた。そして壮介の姿を確認すると、涙に濡れた笑顔で壮介の元へ駆け寄ってくる。

「よかった……」

遙は安堵の表情を浮かべているが、瞳からは涙がポロポロと零れ落ちる。それが今までどれ程までに壮介の身を案じていたかを物語っていた。

「さあ、どうぞ。夕飯にしましょう」

遙は涙を拭きながら、壮介を屋敷の中へと促した。

とても、とても暖かく……。

「どうぞ、遠慮なく召し上がってください」

居間のテーブルには料理が所狭しに並べられていた。二人が壮介

のために作った料理。しかし作られてからもう大分時間が経過してしまっただけもあり、やや冷えたものとなっていた。

「私と遥が心を込めて作ったんだ。残したら只じゃおかしいよ！」

千絵子はまだ少し不機嫌な様子だったが、壮介の前に箸とコップを置いた。

「あ……はい」

「つたく、もう心配かけんじゃないよ！」

千絵子はそう言うと、壮介の頭をポンとはたいた。

そして三人は、遅い夕食をとりはじめた。

最初はまだ先程の緊張感が残っており、言葉少なではあったが、徐々に三人の表情も柔らかくなっていく。

そして三人は談笑しながら食事を終える。

片付けが終わった頃、千絵子が壮介の元へとやってきた。

「今晚泊まっていけないか？」

そろそろお暇しようと考えていた壮介は、予想外の言葉に目を丸くする。何せここは姉妹二人しかない。そこに男が泊まろうというのは、壮介にはやや抵抗があった。

「いやね、遥がさ……」

千絵子は頭を掻きながら話す。これは千絵子にとっても不本意なことなのだろう。しかし遥の様子が千絵子に決断させた。

「遥がさ、こんな真夜中に島を歩かせるのは不安だから、泊まってくれらおうって言うもんだからさ。私は別にどっちでもいいんだけれど、やっぱりまだ不安なんだよ……」

壮介は悩んでいた。

別に泊まっていけないのは悪いことではない。折角言ってくれているのだから、断るのは悪い。

しかし壮介にはそれを躊躇わせる理由がある。

カノジヨの存在だ。

首を縦に振ろうとすると、フツとカノジヨの顔が頭をよぎるのだ。悩みに悩み、頭をボリボリ掻いていると。

「……………」

襖の陰からこちらを見つめている遙の視線に気付く。
その瞳はとても不安げなもの……。

この瞳に壮介は遂に折れることになった。

「明日の朝までお世話になります」

結局、壮介は畳に三つ指つく格好となり、加美家で一晚過ごすこととなった。

翌朝、六時頃に壮介は目覚めた。

壮介はまだ眠っていたい様子であったが、トイレに行きたくなくなったため、仕方なく布団から這い出した。

壮介がいるのは加美家の客間。いつ使用されるか判らない部屋ではあるが、綺麗に掃除されている。布団も今朝干したかのような感じだ。

トイレに行った壮介は、ついでに顔を洗うため洗面台の前に立つ。そして鏡に映る自分の顔を見つめた。

「何か、猫のヒゲみたいになっちゃったな」

鏡に映る自分の顔を見た壮介は、そう呟き頬をさする。

壮介の頬には絆創膏が左右二枚ずつ貼られていた。

この頬の傷、昨晚狼ヶ浜で干草につけられたもの。壮介は寝る前に一応の消毒を行い、一晚だけ絆創膏を貼っていたのだ。

「もう大丈夫だろ」

壮介は絆創膏を剥がす。ペリペリと音をたてて剥がれていく。

傷跡は残っているが、出血はしていない。壮介は剥がした絆創膏をズボンのポケットにおさめ、洗面所を後にした。

そして客間へ戻ろうとした、その時だった……。

「ああ、おはようございます」

客間の前に、遙が立っていた。その姿を見つけた壮介は笑顔で挨拶をする。

「……………」

しかし遙は無反応。というか表情がなかった。

その遙の様子を不審に感じた壮介は、遙の元へ駆け寄る。

「どうしたんですか？」

すると遙は無言で玄関の方……いや外を指差す。

そして唇を震わせながら、壮介にこう告げた。

「ち、ち、千草ちゃんが、ちぐさちゃんが……、し、し、死んじや
ったよ……」

三

早朝の港。

普段は人がまばらな時間帯であるが、この日の朝は騒然としていた。

港周辺には制服警官がひっきりなしに往来し、また野次馬もどこからか溢れ出してくる。

また昨日の事件を受け、TV局や新聞社の記者も数多く見られた。そんな人々は、ある場所を中心にドーナツのような形となって、
どンドン膨らんでいた。

そして人だかりの中心にあるもの、それは渡船の待合所であった。
この待合所。古びたプレハブ小屋で、外見も中身もかなり寂れた
もの。壁は所々錆び付き、屋根には蜘蛛の巣が張っている。

しかし待合所の中は凄まじい状況となっていた。

壁や床にはおびただしい血飛沫が飛び、中には天井まで届いてい
るものもあった。

そしてそんな待合所の一角……。

まるで地の底から湧き出してきたような血溜まりができており、
その真ん中にブルーシートを被せられた「何か」があった。

ブルーシートの端から人間の手がはみ出している。

その手は肌色ではなく、真っ赤に染まっていた……。

「……………」

血溜まりの傍ら、捜査主任の歌藤が口元に手をあて、厳しい表情でブルーシートを見下ろしている。

歌藤は勿論、このブルーシートを被せられた「何か」を直に見ている。この待合所の惨状を見れば、このブルーシートの下にある「何か」がどのようなものなのか想像に難くない。そして実際にそれを見た歌藤は、まさに絶句していた。

「主任……」

捜査員の長渡が待合所へ入ってきた。しかし絶句する歌藤の姿を見て、彼が言おうとしていたことを躊躇わずにはいられなかった。

「長渡……」

しばしの沈黙の後、口を開いたのは歌藤の方だった。

「被害者の身元は？」

そして長渡は胸ポケットから手帳を取り出す。

「か、川住千草、十八歳……。島にある旅館の主人、川住清太の長女です」

第一発見者は渡船の船頭だった。

朝、渡船の準備をするため港へとやってきた船頭は、待合所の前を通り、船へと向かう。

その時、いつもは開いたままになっている待合所の引き戸が、今日に限って閉まっていることに気付く。不審に感じた船頭は、船には向かわず待合所へと入った。

そしてそこには……。というわけである。

「長渡……。状況を説明しろ」

長渡に指示を出す歌藤だが、口元を押さえたままだ。

「はい……。被害者の状況は、昨日の新居志都美とほぼ同じ。全身を鋭利な刃物でズタズタにされています。しかし死因は失血死ではなく、おそらく頸部圧迫による窒息死。昨日の新居志都美と同じく、首を絞められたような跡があります」

「つまり……。犯人は首を絞めて殺した後、全身を切り刻んだとい

うわけか」

歌藤の言葉に長渡は頷く。

「ただ、昨日の新居志都美殺害とは一つ異なる点があります」

「異なる点？」

「はい……。被害者の後頭部に、何かで殴られたような打撲痕があるんです。傷痕の状況から考えて、殺害直前につけられたもののようです」

つまりこういうことになる。

犯人は千草の背後から、鈍器で後頭部を殴打。それにより怯んだ千草の首を絞めて殺害。そして鋭利な刃物で全身を切り刻んだ……。想像しただけでも、背筋の凍る所業である。

「死亡推定時刻は？」

その質問に対し、長渡は一旦外へ出て、鑑識員と思われる人物と二言三言交わした後、歌藤の元へ戻ってきた。

「具体的な時間はまだ判りませんが、鑑識の話によると、昨晚午後十一時から今日の午前三時にかけての間と思われます」

歌藤は長渡の返答に、口は開かず頷くのみ。その表情は非常に陰しいもの……。

その表情は何を物語っているのか？

あまりの惨状を目の当たりにしたためか。

それとも自分がいながら、第二の殺人を起こさせてしまったことへの言い様のない悔しさか……。

四

「失礼します！」

現場検証をしている歌藤らの元へ、一人の制服警官がやってきた。そしてその後ろには……。

「千草……、ちぐさ……」

千草の両親である、清太と喜美恵がいた。

喜美恵は両目を真つ赤に腫らして今にも崩れ落ちそうな体勢となり、それを清太が必死に支えている。

その姿を見つけた歌藤は立ち上がり、入り口のほうへ向かう。

「捜査主任の歌藤です」

歌藤は川住夫妻に警察手帳を提示。そして夫妻を中へと入れた。

「身元に関しては所持していた物から確認させてもらいました。が一応ご両親の方からもご確認をお願いします」

そして歌藤は川住夫妻をブルーシート横へと促した。と言っても飛び散った血は未だ処理されていないため、遺体の損傷があまりにも激しいため、やや距離を取ってからの確認となる。

「では、お願いします」

歌藤はブルーシートの端を持ち、そつと捲り上げる。

「ああっ！」

そこには青白い顔をして眼を閉じる一人の少女。

トレードマークの眼鏡はしていないが、それは人目で千草だと判別できた。

歌藤はブルーシートを丁度千草の顎の部分まで捲り上げている。

これ以上はあまりに無残で、とても見せられないからだ……。

「ああっ！ 千草！ ちぐさ！ ああああっ！」

千草の変わり果てた表情を見た瞬間、喜美恵はその場に崩れ落ちた。そして地面を引つ掻き、大声で泣き叫んだ。

「千草あ……」

そして父の清太も目から大粒の涙を流す。その表情には父としての無念さが、これ以上ないくらい滲み出ていた。

「誰が、誰がこんな惨いことを……」

そしてとうとう清太もその場に崩れ落ちる。

「……………」

その両親の悲しむ姿、歌藤はただ黙って見続けるしかなかった……。

「ではこちらへ……」

川住夫妻は制服警官に抱えられ、待合所を後にする。清太はそれほどでもなかったが、喜美恵は両脇を抱えられないと、今にも地面に崩れ落ちるという様子であった。

その二人の後ろには長渡が続く。そして待合所の近くにある民家の倉庫へと移動。警察が捜査のため家主から一時的に借りたものである。

「では……、いくつかお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

長渡は歌藤に比べてまだまだ若い。二人は一人娘の変わり果てた姿を見た後、大丈夫なわけがない。

喜美恵は相変わらずだったが、清太はやや落ち着きを取り戻した様子で、長渡の問いかけに浅く頷いた。

「まず千草さんですが、何時頃ご自宅を出られたのですか？」

その問いに、清太はしばらく考え込む。

「さあ、私は漁の仕事をしていたので、出る前に姿を見かけてからは……。お前はどうかんだ？」

清太は喜美恵に話を振るが、やはり泣き続けるだけで、清太の声が届いていることすらも怪しかった。

「おい、しっかりせえ！」

清太は泣き続ける喜美恵の肩を、ブンブンと揺らす。清太の瞳にも光るものがあつた。

「……、私も、朝食の、準備から、姿を……見て、ない……です。ああ、千草……あああっ！」

喜美恵はやっこの思いで言葉を紡ぐ。しかし言い終わると再び泣き崩れた。

「朝食の準備というのは、大体何時頃までですか？」

「今朝は釣り客がおらんかったからな、片付けも入れて大体八時半頃には終わる」

長渡は喜美恵に向けて訊ねたが、代わって清太が答える。

「それまでは旅館にいたんですね？」

この長渡の問い、漁に出ていた清太は判らない。清太は再び喜美恵の肩を揺する。

涙で声にならない喜美恵、しかし首を何度も縦に振り、長渡の問いに答えた。

「判りました。千草さんに最近変わったことは？」

清太はしばらく考え込んだ後、首を振った。

「そうですか……」

両親の回答に長渡は顔をしかめる。

「では……」

「あの……」

引き続き質問を続けようとする長渡に、清太が声をかぶせてきた。「家内がこんな状態なんで……しばらく間、おかせてもらえんてしよつか？」

清太は千草を失い、未だ泣き続ける喜美恵の肩を抱える。

清太の訴えは切実であった。娘を失ったことは清太も辛い。清太だつて喜美恵のようにその場に泣き崩れそうな思い。もう二人の精神力は限界に達していた。

長渡はしばらく考え込んだ後、一度大きく頷いた。

「判った。それではまた日時を改めて……。今日はご協力ありがとうございました」

長渡は立ち上がり、夫妻に礼をして倉庫から出て行った。

そして清太は悲しみに暮れる喜美恵の肩を抱き、倉庫を後にした。

五

長渡が港へ戻ってきて、待合所の遺体の運び出しとなった。

遺体は今回も一旦診療所へ安置されることとなる。これで診療所には遺体が二体安置されることとなるが、新居志都美の遺体は午前中に県警の方へ移送されることになる。

遺体が運び出されようとすると、待合所周辺は騒然となる。捜査員に記者とTVカメラ、そして野次馬が押しかけてくる。それらを制服警官が必死に制止する。その間に鑑識員と捜査員の手により、遺体を運び出していった。

そんな騒然となった群集の一番後ろに壮介と千絵子、そして喜志の姿があった。

「これから……どうなるんだろう？」

壮介がポツリと呟く。それに対する答えは、どちらからも返ってこない。千絵子も喜志も、壮介と同じ思いなのだろう。

壮介は頭を掻き毟る。もう何が何だが判らないという様子。

警察から正式な発表はまだだったが、待合所で惨殺されていたのは千草であるということは既に広まっている。

おそらく、千草は狼ヶ浜での壮介とのやり取りの後、何者かに殺された。つまり壮介は千草が犯人と接触する前に出会った、最後の人物かもしれないということ。

あの時のことを、壮介はまだ誰にも話していない。それは千草の様子があまりにも異様だったため、誰かに伝えることをずっと躊躇っていたからである。

話せば、また自分が犯人ではないかと疑われるであろう。しかし話さなければ、自分はズブズブとこの深淵にはまっていくなになる。

言おうか言わまいか……。双方の気持ちだが、壮介の中でせめぎ合っていた。

「来るぞ。場所を変えよう」

喜志が壮介の腕を引っ張る。遺体を運ぶ捜査員たちが壮介たちのいる方向へと進んできていた。

「ほら！ 道あけて！」

周りを取り囲む記者や野次馬たちへ向かい、警官の怒号が飛ぶ。しかしそんな中、一人その場を動かない男がいた。

「ほらどいてどいて！」

その男は捜査員一行が前方に出てきたのにもかかわらず、一歩たりとも動かない。男はまるで通せんぼをしている状態だった。

「あ、あれは、瀬川さんじゃ……」

その男に壮介は見覚えがあった。捜査員たちの前に立っている、その男は瀬川だった。

「何じゃアンタは？」

後方に控えていた歌藤がやってきた。そして歌藤はすぐ瀬川の異変に気付く。

「おい、お前！」

瀬川は顔を伏せた状態で立っているため、その表情を窺い知ることはできない。しかし歌藤の視線は顔ではなく右手に注がれていた。瀬川の右手には朝日を反射し、眩しい光を放つモノ……、分厚い出刃包丁が握られていた。

その包丁の存在に気付いた捜査員たちの間に、一気に緊張が走る。先頭には歌藤、そして異変に気付き駆け寄ってきた長渡が立つ。

「千草……、千草……」

瀬川は顔をあげることなく、ただ千草の名を呟く。

そして足元に雫がポタツ、ポタツと夕立の雨粒のように堕ちていく。

「アンタ川住千草の知り合いか？ 悲しいのは判るがちょっといてくれんか？」

長渡がそう言いながら瀬川に近付いた。

その時、

「うわっ！」

突如瀬川が手に持った包丁を振り上げた。突然の行動に、長渡は驚き後ずさりをする。

右手に包丁を天高く掲げ、そして瀬川はゆっくり顔を上げる。

その時、瀬川は晒っていた……。

「いかん！」

何かを感じ取った歌藤が、瀬川を取り押さえようと前に出ようと

した、その時！

「ちぐさあーっ！」

瀬川は天に向かって、絶叫したと同時に、自らの腹に包丁を振り下ろした。

現場は、先程とは違う意味で、騒然となった……。

「医者、医者を呼べっ！」

歌藤と長渡は一瞬にしてできた血溜まりの中に倒れる瀬川を囲み、興奮した様子で警官に指示を飛ばす。彼らも大量の返り血を浴び、ワイシャツは真っ赤に染まっていた。

瀬川の返り血は勢いよく回りに飛び散り、野次馬たちをさらに騒然とさせる。

そしてそんな返り血の一滴が壮介の頬にかかった。

壮介は瀬川に釘付けとなり、一步も動けなくなっていた。

そして……、

「うわあああーっ！」

壮介も天に向かい絶叫。

壮介の視線の先にある真夏の太陽は、さっきまでとは打って変わって、分厚い雲に覆われようとしていた……。

第十章 糸口

—

この日、壮介が大神島へやってきてから初めて、太陽が隠れた。雨こそ降ってはこないが、空はとも十二時前とは思えないくらい暗いもので、どんよりとした雲で覆われていた。しかし太陽が射していないからといって、この日が涼しいというわけではない。ジメジメとして逆に汗が吹き出してくるくらいであった。

診療所の二階、喜志に貸してもらった部屋で、壮介は頭を抱え、横になっている。部屋はとても殺風景で、壮介の隣で扇風機がブーンと音を立てて動いているのみ。それ以外では壮介の荷物が隅に置かれていくくらいで、他には何も無い。

頭を抱え横になる壮介だが、眠っているわけではなく、目はしっかりと見開いている。しかし時折瞬きをするだけで、壮介の身体はぴくりとも動かなかった。

壮介はこの部屋に帰ってきてからずっとこの状態。その訳は、勿論港で起こった事件……。

千草が何者かに惨殺され、そして瀬川が謎の割腹を遂げたこと……。

千草は港の待合所から運び出され、診療所一階に安置されている。そして瀬川も一旦は診療所へ運ばれたものの、ここでは処置しきれないため、本土へと緊急移送された。瀬川の傷は出血が激しかったものの幸い急所から外れており、命には別状ないと喜志は語った。

しかし……腹部から間欠泉のように吹き出す光景、あの一面に赤い色が吹き出す光景が、壮介の目に焼き付いて離れない。おそらくそれは、壮介が今まで見てきた中で、最も衝撃的なものであったのだろう。人間から血が吹き出す光景なんてそうそう見えるものではない。

壮介が大神島へやってきてから、とても恐ろしいことが立て続けに起こっている。まるで壮介が死神ではないかと錯覚するように、昨日と今日惨劇が続いていた。

「……………」

壮介は考える。

新居志都美と川住千草。この二人に何らかの接点があるのか？二人の殺され方をみて、同一犯人であることはまず間違いない。つまり犯人は二人を殺す共通の「理由」があったということ。

そしてもう一人、重要な鍵を握る人物……。

加美姉妹の父、大助。

大助と千草は、同じ開発計画反対派ということで接点はあったであろう。しかし島の間人ではない志都美との接点について、壮介はまるで見当がつかない。

そして悩みに悩んだ壮介は、頭を掻きまろうと爪を立てる。

ブルブルブル……

そんな時、壮介のお尻が震える。勿論、本当にお尻が痙攣を起こしているわけではなく、ズボンのポケットに入れてある壮介のケータイが震えているのである。

壮介は横になったままの状態で、ケータイを取り出す。

そのディスプレイには「俺の嫁」と出ていた。

「瑞希……！」

それは壮介のカノジョである岡本瑞希からであった。壮介は畳の上に座り直し、電話に出る。

「もしもし……」

「もしもし、壮介君？ 私！ やつとかかった！」

その声は、紛れもなく瑞希であった。そして瑞希の声を聞いた壮介の表情は、一気にほころんだ。

「もう、心配していたんだからね」

瑞希のその言葉が、壮介の胸に染みる……。

考えてもみれば、壮介が大神島へやってきてから、瑞希に一度も連絡を入れていなかった。勿論避けていたというわけではない。何度が連絡を入れようと考えていたのだが、その度に何かしらの事件に巻き込まれ、結局ここまでできずにいた。

「何で電源切ってたのよ？」

「え？」

続けて出た瑞希の言葉に、壮介は声を上げる。しかしすぐにピンとくる。

壮介のケータイは常に電源は入っていた。しかし瑞希は何度電話をかけても、呼び出し音はなかった。

それはつまり電波が届いていないということ。この大神島、都市部から離れたド田舎であることに加えて、周囲を山と海に囲まれた地域。電波の届く範囲が限定されてくるのである。恐らく、港の近くにあるこの診療所では、辛うじて電波が届くのであろう。逆に、川住旅館や加美家、大神神社には電波が届かない。

「悪いな、連絡遅れちまって。この辺電波が届きにくいんだよ」

「それならいいんだけど。もうこつちじゃ大騒ぎになってるのよ！」

構わないと言っではいるものの、やはり瑞希の口調は荒い。カレシの身をずつと案じていたのだから、瑞希の様子は当然といえば当然。ここで素っ気なく返されたほうが、壮介にとってはショックであらう。

「大騒ぎって、どれくらいなんだ？」

この事件について、壮介は自身が現場で見聞きした以外の情報、つまり新聞やTVでの報道についてまるで入ってきていない。旅館にも診療所にもTVはないし、新聞もない。警察に探りを入れようにも、壮介は未だ参考人として目をつけられているので、下手に動くと思わぬ火傷を負う恐れがある。

「うん、こつちではワイドショーとかでガンガン流れているよ。島の呪い連続殺人事件とか銘打たれて」

呪いという言葉に壮介は嫌悪感を覚える。壮介はこの夏、何度この言葉を聞いたことであろう……。

「どんなカンジで流れている？」

「どんなカンジ？ ええとね……、昨日はお嬢様の件かな？」

「お嬢様？」

壮介は「お嬢様」にピンとこない様子だった。

「ほら、昨日の朝死体で発見された女の子のこと！」

昨日の朝、死体で発見されたのは新居志都美。

「え、あの娘ってどこかのお嬢なのか？」

「うん。ちよつと待ってね、調べるから」

電話口の向こうから何かを漁る音が聞こえた。

「ええと……、三重県の建設業、新居興産社長の長女って、新聞に書かれてあるわ」

壮介は新居志都美の素性を、加美千絵子の同僚ということ以外、よく知らない。しかし瑞希の話によると、新聞やTVでは志都美の人となりが大々的に報道されている様子であった。

「今は速報で今朝の事件で持ちきりだよ。確か壮介君が泊まった場所の人だよな」

もう早くも千草の事件が報道されている。まあマスコミにとっては格好のネタであろう……。

「ああそうなんだ。それでな……」

この時、壮介は窓の外が騒々しいことに気付く。

壮介は電話で話し続けながら、窓の方へ移動する。そして窓を開けてみる。

そこには大勢の報道陣に囲まれて、数人捜査員と、喪服を着た人たちが診療所へと向かってきていた。

ここで壮介は、今日の昼頃に志都美の遺体が本土へ移送されることを思い出した。

ということは、あの喪服を着た人たちは、志都美の親族ということ。

「悪い、またこっちから電話するわ。サンキュ」

壮介は電話を一方的に切り、部屋を出て一階へと降りる。階段を降りた時、ちょうど喪服の一団と鉢合わせとなる。その一団の中に長渡も混じっており、壮介へ向かい「あっちへ行ってる」と無言で合図を送った。その合図により、壮介は階段の踊り場まで上がり、隠れるように一団に視線を送る。

喪服の一団は全員で四人。両親と思われる二人と、兄弟と思われる少年二人……。皆表情は沈痛に沈痛を重ねたもの……。

そしてその一団の後ろに、もう一人知った顔があった。

「あれは……、賛成派の菅林」

新居一家に何故か菅林が、まるで一家の保護者のように同行。そして一家とともに安置所へと入っていった。

二

新居一家と菅林が安置所に入ってから数分後、扉が開いた。

そして家族と一緒に、布を被せられた一台のストレッチャーが、警官たちの手によって運び出される。

運び出される間、誰も口を開こうとしない。ただ家族のすすり泣く声だけが、診療所の廊下に響き渡っていた……。

ストレッチャーが階段前を通り過ぎると、踊り場にいた壮介は一階へと降り、一団の後を追う。

一団は待合所の横を通り、出入り口へ。出入り口付近には大勢の報道陣が待機しており、診療所の前は騒然。そこに警官たちは規制線を張り、キャスターを通す道を作る。

そして一団とストレッチャーは大量のフラッシュの中、診療所を後にした。

「やっと……か」

待合所で一団の背中を見送った壮介の背後で声がする。振り返ると、廊下に喜志が立っていた。

「喜志先生、戻ってらしたんですか……」

「ああ、遺体の引き渡しに立ち会わんといけなかったからな」

喜志はゆつくりと動作で、待合所のソファに腰を掛ける。その表情には疲れが滲んでいた。

「千草のほうも、夕方には持っていくそうじゃて」

「司法解剖ですか？」

壮介の問いかけに喜志は無言で頷く。立て続けに衝撃的な事件が起きている。喜志の老体にはさぞ堪えるであろう……。

ソファに身を横たえた喜志は大きなため息をつく。

「初めてじゃ、こんな……こんな恐ろしいことは」

それはこの島のほぼ全ての人間が同じ思いであろう。つい一昨日まで祭で賑やかに笑い声の響く島だったのが嘘のようである。

「あの……、お疲れのところすみません。お伺いしたいことがあるんですが」

「……何じゃて？」

喜志は身体を動かすことはなかったが、視線だけを壮介の方へ向ける。

「瀬川さんは千草さんとどういう関係だったのですか？」

壮介の問いに、喜志は首だけを少し動かした。

「ああ……。これじゃてな」

喜志はそう言うのと、左手の小指を突き出した。

「へえ……。それは意外だな」

壮介は意外と言ったが、内心はそれ以上に驚いていた。二人の年の差はもとより、開発計画の賛成派副大将と反対派大将の娘という間を考えれば、それはあまりに危険な関係といえる。

「勿論、これは秘密の関係じゃて。この件を知っているのは、わたしを含めて二、三人。大神島最大のタブーじゃ」

壮介は頭を掻く。もしこの事実をあの清太が知ったら、烈火の如

く怒るであらう。

尤も、怒り狂う相手は、もうこの世にはいないが……。

壮介はもう一つ疑問に思っていることを、喜志にぶつけてみる。

「先程新居志都美さんの遺体受け取りの際、ご家族に混じって菅林さんがいましたよね？ あれは一体……」

「……ああ」

喜志の返事は早かったものの、今度はその後の言葉がなかなか出てこない。

喜志は理由を知っている。しかしそれを言うのを躊躇っているような様子であった。何故躊躇うのか、当然壮介には全く判らない。

「……」

「喜志先生……？」

とうとう喜志は口を真一文字に結んでしまった。そしてゴロンとソファに寝そべった。

「しゃべり過ぎて、わしゃ疲れた。ちょっと寝るで……」

喜志はポケットからハンカチを取り出し、それを顔の上においた。それ以後、喜志は壮介が何度呼びかけても、ウンともスンとも言わなくなってしまった。

「……」

この喜志の行動、壮介には理解できなかった。何故口をつぐんだのか？ 壮介は特に変なことは聞いていない。ただ新居一家に何故菅林が混ざっていたのかを訊ねただけである。

壮介は釈然とつしなかつたものの、これ以上喜志に詰め寄っても収穫は得られないと判断。頭を掻きながら待合所を後にした。

ガチャッ

壮介は静かに診察室へと入る……。

菅林について喜志に訊ねるも、返答を得ることはできなかった壮介。しかしそれにより途方に暮れて頭を掻き続ける壮介ではなかった。

実のところ、ちょっとした目星はついてたのだ。そして壮介はそれを確かめるべく、この診察室へとやってきたのだ。

以前壮介はこの診察室で、喜志にあるものを見せられた。大神島開発計画である。

開発賛成派と菅林と、親が地元建設会社社長という志都美にもし接点があるとすれば、まずこれで間違いはない。

壮介は計画の書かれた冊子を開く。そして菅林と志都美の接点を探す。一ページ、一行、一文字、隈なく探していく。

「……あつ、あつた！」

そしてそれは見つかった。冊子最後のページに載せられた協賛者名簿にである。

新居志都美の名前こそなかったが、大神島外協賛者の欄に「新居興産株式会社」とあった。

これで新居志都美の家と菅林が繋がった。あの場に菅林がいたことも、これで一応納得できる。

しかし壮介には一つの疑問が浮かんた。

何故喜志はこれっぽっちのことを、壮介に語らなかったのだろうか？

喜志は何か特別な事情を抱え、そのために自らのからは言えないとでもいうのか？ ならばその「特別な事情」というのは、一体何なのか？

納得したのも束の間、壮介は再び頭を掻く。

「……………」

そんな壮介のいる診察室……。

扉の向こう側、喜志が苦虫を噛み潰したような表情で立っていることを、壮介は知る由もなかった。

コンコン……

「警察だ。入るぞ」

長渡がドアをノックしてから病室へと入る。四畳半程の個室に医師と看護師、そしてベッドには瀬川がいた。

医師は長渡と目が合うと、軽く会釈をする。長渡も会釈をして、警察手帳を提示した。

「よかった、大事に至らなくて」

長渡はベッドで横になる瀬川に声をかける。しかし瀬川が口を開こうとせず、ただ無機質な天井を眺めていた。

瀬川の目はしっかりと開いている。意識もあり呼吸は少し荒いもののしっかりとしている。しかしその表情には「生気」が感じられない。朝は何ともなかったのに、無精髭が伸び、所々白髪が出ていた。

千草の死を目の当たりにし、割腹自殺を図った瀬川。

当初は非常に危険な状態だったが、幸い急所は外れており、大量出血の割りに傷は浅かった。しかしそれにより瀬川の意識が途切れることがなく、処置を受けるまで瀬川は地獄のような痛みと闘うこととなってしまった。

瀬川にとって、それは死ぬよりも苦しいことだったであろう……。

「申し訳ないが、少し席を外してもらえないかな」

長渡が医師たちにそう告げる。医師と看護師は再び軽く会釈をした後、病室から出て行った。

「さて……、早速で悪いが、色々聞かせてもらおうぞ」

長渡はベッドの横に置かれていたパイプ椅子に座り、そして手帳を広げる。

「……………」

しかし、瀬川は何の反応も示さず、天井を見つめるだけだった……。

……………

「あ、もしもし主任ですか？ 長渡です」

病院の駐車場で、長渡はケータイで話をしていた。

空は灰色の雲に覆われ、射すような陽射しからは免れているものの、その分ジメジメとして言い様のない不快感に襲われていた。

長渡が電話をしている相手は、大神島に残って捜査を続けている歌藤。

「瀬川、駄目でした。まだ話ができる状態じゃないですね」

「そうか……、ケガはどうなんだ？」

「腹部裂傷で、医師によると全治一ヶ月という話です。でももう一般病室に移っています」

「そうか。取り合えずはよかったな。引き続き、瀬川に張り付いていてくれ」

「了解です。そちらは何か進展しましたか？」

「いやあ、今のところさっぱりだ。一応川住千草と新居志都美の共通する交友関係について、聞き込みを行っているんだが……」

その後、長渡は何言か話し、ケータイを切り、ポケットからハンカチを取り出して額の汗をぬぐう。

そしてハンカチをポケットに仕舞い、ふと空を見上げる。

「こりゃ一雨きそうな空だな……」

長渡の言う通り、空は今にも泣き出しそうな様相。この地方には久しぶりの雨となりそうであった。

そしてこの空は、大神島へも続いていた……。

四

十三時前に、壮介は診療所を出た。

目的は昼食の買出しで、行き先は港前の商店。

壮介が島へとやってきた時、千草が買い物をしていた商店である。商店は診療所から歩いて五分程、今回初めて行くことになるが、場所は港前の目立つところにあるので、迷わず行くことができた。

喜志の話によれば、ここ以外にも商店や食堂が島に点在している
そうであるが、迷うと色々と厄介であるため、一番手堅いこの商店
に決めていた。

ただ食事の買出しといっても、壮介に大したもののは作れない。せ
いぜい弁当やオニギリ、カップ麺程度のものである。

壮介は商店で、カップ麺とサンドイッチ、そしてペットボトルの
お茶を一本購入して、すぐに商店を後にする。

別にゆっくり買い物をすればいいのだが、やや急いで商店を出た
のには理由があった。

とうとう空が泣き始めたのである。まだポツリポツリ程度ではあ
るが、これでは決して済まないことは、凡そ昼間とは思えないくら
い暗さの空が物語っていた。

商店を出た壮介は小走りで、診療所へと戻る。まだ小降りも小降
りだが、夏の雨はいきなり勢いを増すことがある。

そして壮介が診療所前に差し掛かった時であった。

診療所方面と島の西側へと続く道への分かれ道付近に、壮介の知
った少女の後姿があった。

「あれは、遥さんか？」

壮介の位置からは、その表情を見ることはできないが、少女の着
ているワンピースに見覚えがあった。

遥はその分かれ道を直進し、島の南側へ続く道へと入っていく。

壮介は遥に声をかけようと、小走りに後を追う。

しかし壮介の足が急に止まる。

「確か、あっちって……」

その時、壮介は思い出した。

この道はあの狼ヶ浜へと続く道でもあるということ……。

よく見ると、診療所方面へと続く道は、石畳で整備されているが、
西側へと続く道のほうは、整備されていない砂利道で、周囲の雑草
や茂みの量がどっと増えている。

島の西側には民家が殆どなく、島で一番寂しい地区である。そん

な所へ、遙はたった一人で入ろうとしていた。

そしてこの先には、壮介が変貌した千草を目の当たりにした、あの狼ヶ浜がある……。

壮介はあの時のことが未だに脳裏に焼き付いて離れない。正直言つて、この先へは二度と足を踏み入れたくない気分なのだ。

しかし壮介はそちらへと足を向けた。本当は行きたくないはずなのだが、何故か自然と足が動く。

「この先に、この惨劇を解く、何かがあるかもしれない」

そして壮介は大きな声で、遙の名を呼ぶ。

雨は降っているが、耐えられない程ではない……。

全く根拠のない思いが、もう後戻りできないところまで壮介を誘おうとしていた。

五

「遙さーん！」

壮介は大きな声で名を呼ぶも、それは全く届いていないようで、遙は壮介に振り向くことなく砂利道を歩き続ける。

そしてその砂利道は次第に周囲を木々や茂みで覆われはじめ、まるで獣道のようになってくる。

壮介は遙の後を追い続ける。最初は追いつこうと考えていたが、遙がどこへ向かっているのか気になったので、気付かれないように一定の距離をとってついて行く。

「このまま行ったら、狼ヶ浜だよな」

この道は昨晚、千草に連れられて通った道。夜は勿論暗かったが、昼は昼で暗い。周囲の木々が日光を遮っているからだ。さらに今日は空を厚い雲が覆っているため、余計に暗かった。

程なくして波音が聞こえ始める。横を向くと、木々の間から海が

見える。壮介は昨晚確かにここを歩いて狼ヶ浜へ行つたのだとジワジワを思いだす。あの時聞いた音が、ほぼ同じタイミングで奏でられている。

そして目の前が開ける。そこには石やゴミが散らばった砂浜が広がる。

狼ヶ浜である。

「遥さんは？……」

壮介は遥の姿を探す。すると壮介から見て右側の磯場に遥の姿があった。遥は危なっかしい足取りで、磯場を進んでいた。

壮介は遥の後を追う。磯場はそれ程険しいものではないが、こんな所で転んだら出血もののケガをしてしまう。壮介は足元に気をつけながら磯場に足を踏み入れる。

「ん、あれは？」

磯場に足を踏み入れた壮介の目に飛び込んできたのは、磯場の崖にできた大きな洞であった。遥はその洞へと向かっている。

ザーーーーツ

雨が急に強くなってきた。そのためか、遥の足が速くなる。壮介も足元を気をつけながらも歩幅を広げる。

その時遥が不意に後ろを振り返った。そして後ろをついてきていた壮介の存在に気付く。

壮介と目が合った瞬間、かなり驚いたような表情を見せていたが、雨の勢いが増してきたこともあり、遥は壮介に手招きし、洞に入るよう促す。

それを見た壮介は急いで遥の元へと向かった。

「新谷さん、どうしてここに？」

壮介と顔を合わせた遥の第一声はこれである。

しかしそれは壮介も同じである。何故遥はこんな所に来ているのだろうか？

壮介は不思議そうな表情を浮かべる遥の顔から視線を落とす。遥

は胸に紙袋を抱えていた。

「いやあ、港前で呼んだんだけど、気付いてもらえなくて……。ゴメン、何かつけてきちゃったみたいで」

「いえ、私は全然構わないですが……。ここは島の人でもあまり近づかない所なので」

その言葉に壮介は苦笑いを浮かべる。

「濡れちゃいましたね。大丈夫ですか？ よかったら、これ使ってください」

そう言つと、遥はポケットからハンカチを取り出して壮介に渡した。

「ああ、ありがとうございます」

壮介はハンカチを受け取り、腕や首筋を拭いた。

「まさか、こんなに降ってきちゃうとは思わなかったです」

壮介からハンカチを受け取った遥も苦笑いを浮かべる。

「そうですね……。ところで、遥さんはどうしてここへ？」

壮介は再び遥の抱える紙袋に視線を落とす。それに気付いた遥はクルッと振り返った。

「……お参りです」

「お参り？」

遥は無言で洞の奥へと歩を進める。壮介もその後ろをついていく。

「あ、あれは……」

すると程なくして、小さな祠が姿を現した。

「ここは、昔の大神神社なんです」

遥はそう言つと、祠の前で腰を下ろす。

「ここが？」

この時、壮介は千草の言っていた「狼の社」について思い出し、背筋をビクツとさせる。千草の言っていた、生贄を捧げるための社は実在していたのだ。

「そして、ここは私たちにとって、とても大切な場所なんです……」
「大切な場所？」

遥は紙袋から、花とワンカップ酒を取り出した。

そして祠の前に挿してある枯れた花と、紙袋から取り出した花を交換し、ワンカップ酒を祠の前に置いた。

「……………」

そして遥は拍手を打ち、手を合わせて目を瞑る。それにつられ壮介も手を合わせる。

十秒程そのような状態が続く。

そして遥は目を開け、手を下ろす。

「ここは、私と姉の秘密の遊び場でした」

遥は立ち上がり、壮介の方へ向き直る。すると壮介は未だ目を閉じて手を合わせたまま。その姿に遥はクスツと笑みを浮かべ、それに気付いた壮介は慌てて目を開ける。

「姉は昔から腕白で、いつも男の子に混じって遊んでいました。そんな姉に連れられて、私はこの場所を知りました。何でも、姉が一人で探検ごっこをしている時、偶然ここを見つけたそうなんです」

遥は枯れた花を持ってきた紙袋に仕舞う。そして持ってきていた雑巾で社を拭く。

「それ以来、ここは私と姉の秘密基地のような場所となりました。姉は、ここは秘密の場所だから、誰にも言っちゃダメだと私に言いました。今考えたら、こんな社があるのだから、秘密なんて有り得ないですよ。でも当時の私たちは子供だったから、誰も知らない秘密の場所を作ったことが、楽しくてしょうがなかったのです」

遥は再びクスツと笑う。あの頃の子供じみた「秘密ごっこ」に笑っているのだろうか。

「今でもここにはよく来るの？」
すると遥は頷く。

「よくって程ではないですが、二週間に一度くらいは、ここの掃除に」

壮介は社へと近付く。社の向こうは真っ暗だが、次第に目が慣れてくる。

「ん？」

そして壮介は社の奥に、まだ空洞があることに気付く。

「この奥は何があるか知ってる？」

「いえ、そこまで入ったことはないですね。古い注連縄が張っています」

壮介は足元に気をつけながら社の奥へと進む。

「あ、新谷さん、危ないですよ！」

遙が呼び止めるも、壮介は暗闇の奥へと突き進んでいく。

社の奥は三、四メートル程の幅があるものの、高さは二メートルで、壮介が頭上を気にする程度。

そして五メートル程進んだ所に、所々緑色に変色した注連縄が張られていた。空間はその先も続いているようで、壮介がいくら目を凝らしても何ら見えなかった。

「これか……、随分年代物の注連縄だな」

壮介はそう言いながら、注連縄に手を触れようと近付く。

「あれ？」

そして壮介が注連縄に触れた、その時！

「うわっ！」

「きゃっ、新谷さん！」

暗闇の中、壮介は足を滑らせて転倒した。頭は打たなかったものの、腕や足を岩に強打した。

「いつて……」

身体を岩に打ち付けた壮介は悶絶。しばらくその場から動けなかった。

「新谷さん！　だ、大丈夫ですか！」

遙が心配そうに駆け寄る。

「あ、ああ……、ご、ごめん」

全身に走る激痛を堪えながら、壮介は身体を起こす。

「きゃっ！」

遙が再び悲鳴を上げる。そして震えながら壮介の左腕を指差す。

「新谷さん、腕から血が……」

見ると、壮介の左腕から出血があり、肘から下へと流れ落ちていた。

「ああ、ホントだ……」

壮介は右手で流れる血を拭う。血は腕から流れ、地面の石にも付着していた。

「ああ、けっこう出てんな」

壮介は右手で、石についてしまった血も拭い去る。

「……あれ？」

急に壮介は眉間に皺を寄せる。

壮介の視線は自らの血を拭った石へと向けられていた。

「新谷さん、どうされたのですか？」

壮介は地面に転がる一つの石を手を持った。

「……………」

そして壮介はその石を手でこすり始めた。

何度も何度も、手が擦り切れてしまうのではないかと感じる程に、石を擦る。

その意味不明な行動を、遥はキョトンとした表情で見つめている。五分程、壮介は石を擦り続けた。

そして今まで擦り続けていた石をポケットに入れ、立ち上がった。

「新谷さん……」

遥は壮介に駆け寄り、持っていたハンカチを左腕の傷口にあてがう。出血は未だ止まっていない。

しかし壮介の関心は、そちらになかった。

ただ注連縄の張られた、暗闇の向こう側をじっ見つめていた……。

六

その後壮介と遥は、雨が小降りになったのを見計らって狼ヶ浜を出発。共に診療所へと向かった。

診療所に入ると、待合所に喜志が立っており、壮介が遙と連れ立って帰ってきたことに少し驚いていたが、同時に壮介の腕の傷にも気付き、すぐ診察室へと通された。

傷は尖った石による裂傷で、縫合の必要はないもののけっこう深いものであった。取り合えず消毒の処置がなされ、二の腕には包帯が巻かれた。

「二、三日左腕はあまり動かさんようにな」

喜志は何故このような傷を負ったかについて、壮介に訊ねてはこなかった。

そして壮介は喜志に礼を言い、診察室を後にした。

「ありがとう、もう大丈夫」

待合所で壮介は遙に頭を下げた。遙の表情は未だ心配そうだ。

「本当に、ごめんなさい……」

「いやいや、遙さんは何も悪くない。完全に俺の不注意だ」

壮介は左腕を押さえ、申し訳なさそうな表情で答える。確かに、この怪我は壮介が注連縄に氣をとられたことによるもの。遙に特別非があるということではない。

「そんな思っていた程ひどくないみたいだから。二、三日このままでいたら大丈夫ですよ」

壮介は未だ不安げな遙へ向け、ニカッと笑顔を作り、腕をブンブン動かしてみせる。

「いでっ！」

だが、無駄に動かしすぎたのか、左腕を押さえて顔をしかめる。

「はは、いやいや……」

壮介は苦笑いを浮かべ、頭をポリポリと掻いた。

「……もう」

そんな壮介の姿を見て、遙にも笑顔が戻った。

その後、やはり壮介の左腕を心配していたものの、遙は診療所を後にした。

遙の背中を見送った壮介。遙の姿が見えなくなると、すぐさま二

階へと上がった。

二階の部屋に戻った壮介は、ポケットに中に入れていた石を取り出す。

石はソフトボールくらいの大きさで、灰色をしている。そしてその灰色のなかに、赤黒いシミがついていた。

壮介は社の奥でしたように、その石の表面を手で擦ってみた。何度も、何度も、繰り返し擦ってみる

.....

壮介は自分の掌を見つめる。

手には何もついていない……。

「まさか、これは……」

壮介はガリガリと髪の毛を掻き毟る。

「このシミ、これがもし、血ならば……」

壮介は頭を抱え、しばらく黙り込む。

そして、ガバツと顔を上げる。

「詳しく調べてみる必要があるそうだな……」

壮介の瞳が、いつになくギラギラしていた。

きっかけはちょっとした好奇心。

その結果、思いのよらない所にまで辿り着いてしまう。

そしてそれは、もう後戻りのできない所。

壮介は見つけてしまったようだ。

この惨劇を解く、糸口を……。

第十一章 点と線

—

ザー——……

十五時を過ぎても、雨は止む気配をみせなかった。

「もしもし、歌藤だ。どうだそっちの方は？」

大神神社横の公民館。現在ここは連続殺人事件の捜査本部となっており、数人の捜査員が昼夜を問わず出入りしていた。

その中のリーダーが、今電話をかけている捜査主任の歌藤。

そして歌藤の電話相手は、捜査本部副主任の長渡である。

現在長渡は本土の病院へと運ばれた瀬川に張り付いている。

「そうか、まだダメか……」

病院に搬送されてからの瀬川、意識はあるものの未だ何も話そうとしない。瞬きもせず、ただ天井を見つめるという状態が続いていた。

「判った。じゃあ一旦引き上げてくれ。お疲れさん」

歌藤はこのまま張り付いても埒があかないだろうと判断。一度時間を置くことを決め、長渡に島へ戻ってくるように指示をした。

「明日の朝までに戻ってきてくれ。あと……、例の件どうだった？」

歌藤の声のトーンが少し低くなる。そして何故か周囲の視線を気にしている様子だった。

「………、そうか」

そして歌藤の表情が神妙なものとなる。

「………わかった。ご苦労だった」

歌藤はその表情のまま受話器を置く。しかし歌藤は電話の前を動こうとはしなかった。

「確か……」

歌藤は警察手帳を取り出し、あるページで手を止める。そして再

び受話器を手を持った。

開いたページにはどこかの電話番号が書かれているようで、歌藤はそのページを見ながらボタンをプッシュしていく。

「……………」

しかしボタンを押す手が途中で止まる。しばらくその状態で動かなかった歌藤だが、警察手帳を閉じて受話器を戻した。

「……………」

そして電話の前で腕組みをする。

「主任、どうかされましたか？」

そんな歌藤の行動を見ていた捜査員の一人が声をかけてきた。

「ん、いやいや」

歌藤は我に返ったのか、苦笑いを浮かべながらその場を離れる。声をかけた捜査員は首をかしげながらその姿を見送る。

歌藤は部屋の窓側へと移動し、窓を開ける。

雨は未だ降り続けている。

雨の向こうには大神神社。神社の周囲には「守る会」の法被を着た男集が集まり神社を守っている。昨日今日と殺人事件が続き、しかも会長の娘が殺されたのだから、これ以上ないくらいピリピリとした雰囲気となっていた。

「うーん……………」

歌藤はそんな風景を見つめながら、こう呟く。

「しばらく、様子をみてみるか」

すると歌藤は窓側から離れ、再び電話の前へ。受話器を取りボタンをプッシュする。

「もしもし、捜査本部の歌藤だ。島泉君か？」

電話の相手は大神島駐在の島泉のようであった。

「……………いやいや、そういうことで電話したんじゃないよ。ほら新居志都美の遺体第一発見者の、君が駐在所に拘留していた大学生……………そう新谷壮介なんだがね、一応の取調べは終わったからそろそろ自由の身にしてやろうと思うんだ。このままにしておくとか色々とうる

さくなるだろうし」

受話器の向こうから、島泉の驚く声が漏れる。かなり大げさなりアクシヨンをとったようである。

「そこでだ、島泉君の方から新谷壮介にその旨を伝えてやってくれかね。それじゃ頼むよ」

ガチャ

歌藤は島泉に返事する余裕も与えず、電話を切った。

それから十数分後。

島泉は診療所へと出向き、歌藤から言付かった、もう帰ってもいいという旨を壮介に伝えた。

二

「あ、もしもし瑞希か？ 俺だ」

「もしもし、壮介君！」

島泉より歌藤の伝言を受け取った壮介は、真っ先に瑞希へと電話した。

しかし壮介は、自分が晴れて自由の身となり、やっと帰れるということを話さなかった。

「なあ瑞希、ちょっと調べてほしいことがあるんだけど、頼めるか？」

「え？ う、うん、いいけど」

自由の身になったからといって、壮介は一目散に島から逃げようなんて考えてはいなかった。

「なあそっちで、今朝せが……否、男性が自殺をはかったっていうニュースは流れているか？」

「えっ……、うん午前中は速報で流れてたよ。それがどうかしたの？」

瑞希は壮介の突拍子もない質問に戸惑うものの、そこは壮介自慢の力ノジヨである。

「その男性なんだけどな、どこの病院に収容されたか判るか？」

「病院……、ちょっと待つてて」

瑞希は受話器を置き、壮介に訊ねられたことについて調べはじめる。その間壮介は無言で瑞希からの答えを待つ。

そして数分が経過……。

「あ、もしもし。ゴメン、お待たせ」

「おう、どうだった？」

「その人が搬送された病院だけど、詳しいことは判らなかった。ゴメン……」

瑞希の答えに、壮介は渋い表情。尤も、発表するとマスコミが押しかけてきたりするので、病院名が伏せられているのは仕方のないことである。

「でね、ネットでその地域の大きな病院を検索してみたの。そうしたら宇方総合病院っていう所が引つかかったの。壮介君のいる島から一番近いし、多分、そこじゃないかなと思うんだけど」

瑞希の言っていることは的を得ていた。この過疎地域で救急搬送に対応できる病院は限られている。また大神島からの距離、瀬川の怪我の状況を考えて、真っ先に運び込まれるのはこの病院であると考えるのが妥当だろう。

「宇方総合病院だな。住所判るか？」

「ちょっと待つてね。ええと……」

壮介はカバンからメモ帳とボールペンを取り出し、瑞希から伝えられる病院の住所を書き取った。

「サンキュな、瑞希」

「うっん、私は全然大丈夫だよ。壮介君こそ大丈夫？ また変なことに巻き込まれてない？」

瑞希の言葉に、壮介は頭を掻いた。もう十分巻き込まれている。しかもこれから壮介は、自分から事件の渦の中へズブズブに埋もれていこうとしているのだ。

「俺だって全然大丈夫だよ。早くケリつけて、お前に会いたいって

！」

「うん……。待ってるよ！」

壮介と瑞希、二人は電話越しで、久しぶりに笑いあった。

瑞希との電話を終えた壮介は、早速荷物をまとめる。そして部屋を出て駆け足で一階へと下りる。

「おや、出かけるんかい？」

出口へと向かう壮介は、廊下で喜志とばったり出くわす。

「ええ、ちよつと！」

しかし壮介は挨拶も早々に診療所を後にした。

「何じゃ、あないに急いで……」

喜志はそんな壮介の姿を見て、首を傾げていた。

その後診療所を出た壮介は、雨の降りしきる中、港へと向かう。

そして本土への渡船に乗り込んだ。待合所は未だ規制線が張られたままだったが、幸い渡船が停泊していたのですぐ出航となった。

雨は降っているものの、風はそれ程吹いておらず波は穏やかで、晴れの日と同じような感じ。壮介は最前列のシートに座り、前方に見える本土側の栈橋を見つめていた。

「さあ、行くぜ！」

壮介は拳を握り締め、そう呟いた。

三

東の空がだんだん薄暗くなり始めた頃、

雨降る川住旅館の前に、二つの人影があった。

千絵子と遥の加美姉妹である。

「ごめんください……」

二人は川住旅館の玄関へと入り、声をかける。最初は誰もいないかのようにシーンとしていたが、しばらくすると奥のほうから足音が聞こえてきた。

「あら、チエちゃんに遙ちゃん。いらっしやい……」

奥から出てきたのは喜美恵であった。今までずっと泣きはらしていたのか、目の下にはクマができていた。

「おばさま……、大丈夫ですか？」

そんな表情をみた遙は、喜美恵を気遣う。それに対する喜美恵の返答はない。今の喜美恵には空元氣を出す氣力もないようであった。

「どうぞ、上がってくださいな……」

そして喜美恵は力なく、二人を中へ促した。

「喜美恵さん……」

千草を失い、悲しみに暮れた喜美恵の変わり果てた様子に、千絵子も絶句するしかなかった。

チーン……

仏壇へと通された二人は仏壇に線香を供え、無言で手をあわせる。仏壇には千草の写真が飾られている。高校の集合写真のものなのか、写真の中の千草は制服に三つ編み姿であった。

仏壇に千草の遺影は飾られているものの、千草の亡骸はここにはなかった。現在は診療所に安置され、今日中には司法解剖のため警察へと移送されることになっている。よって千草が川住家に無言の帰宅をするのは、それが済んでからということとなる。

「うう……、千草あ……」

仏壇の遺影に向かい手をあわせる二人、その後ろで喜美恵が嗚咽を漏らしていた。それに気付いた遙は振り向き、喜美恵の背中をさすってあげた。

「おばさま……」

背中をさする遙の目にも涙が浮かぶ。千絵子や遙にとっても、千草は昔からの幼馴染。その悲しみは計り知れない。

「千草……」

千絵子は喜美恵たちの方へは振り向かない。ただただ遺影の千草を見つめ続けている。

「……ぐす」

そして千絵子は視線を遺影から外すと、頬をつたう涙の雫を指で拭った。

「どうぞ」

その後落ち着きを取り戻した喜美恵は、千絵子と遥にお茶を出した。二人が訪問してくれたからかどうかは判らないが、喜美恵の表情がわずかに緩んでいた。対して加美姉妹は未だ目に涙を溜め、手にはハンカチが握り締められていた。

「チエちゃん、遥ちゃん、今日はありがとう」

テーブルを挟んで、喜美恵は加美姉妹に頭を下げた。

「いえいえ、とんでもないです。私たちなんか……」

「本当に、こんな酷いことになってしまつて……」

千絵子と遥は頭を下げる喜美恵に向かい、両手を振った。

「千草ちゃん、いつ帰ってくるのですか？」

遥がハンカチで口元を押さえながら訊ねる。「千草」の名前を出すに涙が溢れてくるようであった。

その問いに、喜美恵は無言で首を振る。現時点で家族にもそれは判らなかった。

「そうですか……」

遥は肩を落とす。それを見た隣の千絵子は、そつと遥の肩を抱く。

「まだ全然判らないんですよね、犯人」

すると喜美恵は一度小さく頷く。

「あのね……、そのことなんだけどね、ちよつと二人に聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」

突然の質問に、二人は少し驚くも、ほぼ同時に頷いた。

「私はうちお父さんから聞いて……お父さんも守る会の人から聞いた話なんだけど、祭の日に変な噂が流れていたらしいの」

「変な噂？　どんなことですか？」

神妙な表情の遥は、喜美恵に訊ねる。

「ええ、あの……。き、気を悪くされないで下さいね。え、えっと」
自分から切り出した話題にも関わらず、喜美恵の歯切れは何故か悪い。

「それって、うちの親父のことでしょ？」

その時、喜美恵の言葉を遮る形で千絵子が口を開いた。

「チエちゃん、知っていたの？」

喜美恵は千絵子が噂の件を知っていたことに驚く。そして千絵子の言葉に遥は混乱した。

「私も守る会の人から、人伝にだけれど……。親父によく似た男が、観光ホテルの送迎船に乗っていたって話ですよね？」

千絵子の言葉に、喜美恵は意外そうな表情となる。

「まあ、どっから湧いて出てきたのかは知らないけれど」

千絵子は目を伏せ吐き捨てる。

「私がお父さんから聞いたのも、チエちゃんと大体同じです」

「……」

話を聞くのが辛いのか、遥はハンカチをギュツと握り締めている。

「だから昨日刑事がうちらをしつこく尋問してきたの。警察は親父が犯人じゃないかって考えているんだよ」

「チ、チエちゃん……」

千絵子から出た言葉に、喜美恵も目を丸くする。実の父親に殺人の嫌疑がかかっているのにも関わらず、あまりにぶっきらぼうな言い方だったからである。

「あの、クソ親父……」

そして千絵子も拳を握り締める。しかしそれは遥のそれとは違う。

「哀しみ」ではなく「憎しみ」であった……。

「今日は突然お邪魔してすみませんでした」

「いえいえ、今日は本当にありがとう」

玄関先で喜美恵と加美姉妹は互いに礼を交わす。

「もう大分暗くなってきたわね。雨降っているから足元に気をつけ

てね」

加美姉妹が川住家へやって来た時、東の空が薄暗くなってきた程度だったが、雨が降り続き太陽が出ていないこともあり、現在はほぼ真っ暗であった。

「困ったことがあったら、いつでも遠慮なく言って下さいね。何でもお手伝いしますから」

遥の言葉に、喜美恵は瞳を潤ませ、そしてもう一度深々と頭を下げた。

「では、失礼します」

遥と千絵子は小さな紙袋を一つずつ抱えている。千草の部屋で譲り受けた、千草の遺品である。

そして二人は玄関の軒下で傘を広げ、表へと出た。

「あ、そうだ！」

その時、喜美恵が声を上げ、二人を呼び止めた。

「警察の人から聞かれていたんだけど……、千草のことなんだけれどね、最近千草の様子で気付いたことってあるかな？」

不意な質問に、千絵子と遥は顔を合わせる。

「私は一年振りにあって以来だから、よく判らないかな……。遥、あんたは？」

千絵子の言葉に、遥はしばらく考え込む。

「いいえ、特には……。ごめんなさい」

「ううん、いいのいいの、気にしないで。親の私でも判らないんだから」

喜美恵は申し訳なさそうに手を振る。

「ごめんなさい足止めしちゃって。じゃ気をつけて……」

「はい、それでは失礼します」

千絵子と遥は喜美恵に向かって礼をし、そして川住家を後にした。

太陽が沈み、夜になっても雨は降り続いた。

陽が落ちてから雨足がさらに強くなってきたので、歌藤らの捜査は日没とともに打ち切られた。

天気予報では今夜中に止むとの見通しなのだが、雨は勢いを増し
てきている。捜査本部の歌藤らは本当に止むのかと不安な表情を浮
かべていた。

「このまま雨が降ると、屋外の鑑識作業に影響がでえますね」
捜査員の一人が歌藤の隣で呟く。

「しゃあない。お天道様には勝てんよ」

歌藤は窓から真つ暗な空を見上げ、渋い表情で答える。

「歌藤主任！ お電話です」

捜査本部内に歌藤を呼ぶ声が響く。電話を取った制服警官からで
ある。

「誰からだ？」

「長渡さんからです」

「長渡か……」

歌藤は早足で電話口へと向かい、制服警官から受話器を受け取る。

「もしもし、歌藤だ」

受話器の向こうから、長渡の声が漏れる。制服警官はその声に聞
き耳を立てるが、歌藤が鋭い視線を向けると、さっさと退散してい
った。

「……………そうか。思った通りだな」

歌藤がニヤリと笑う。

「で、もう行ったのか？ ……そうか」

再び受話器から長渡の声が漏れる。その声はやや興奮している様
子だった。

「……………よし、判った。では明日朝に戻ってきてくれ。お疲れさん！」

歌藤は受話器を置いた。そして再び窓際へと移動する。

「……………」

月の出ていない真つ暗な空を見上げ、歌藤は何を思う。

「さあ、ここからどう出るよ？」

歌藤がボソツと呟く。すると横にいた捜査員の一人が歌藤の方を向く。

その視線に気付いた歌藤は無言で手を振りその場を離れ、そして部屋を後にする。

その時、一人の若い捜査員が戻ってきた。

「主任！」

「おうお疲れさん、大分濡れてもうたな」

戻ってきた捜査員は雨に大分打たれており、白いワイシャツが地肌に張り付く程濡れてしまっていた。

「加美大助の件どうだった？」

歌藤は濡れた捜査員にタオルを手渡して訊ねる、

「はいそれなんです、ちよつと妙なんですよ」

「妙とは？」

若い捜査員は頭や腕を拭きながら答える。

「加美大助と似た人物がホテルの渡船に乗っていたという噂は、守る会の間ではけっこう広がっていたみたいです。しかし、実際その人物を見たというのは誰もいないんです」

すると歌藤の眉間に皺が寄る。

「ホテルの船頭は？」

「はい、船頭もそのような人物には心当たりがないとのことですよ」

若い捜査員が歌藤に、聞き込みの結果を報告していく。すると歌藤の眉間の皺は次第に深くなっていき、遂に歌藤は腕を組んで黙り込んでしまった。

「すると……、加美大助の噂だけ一人歩きして、実際島で見た人間は誰もいないということか」

「そ、そうなりますね」

「判った！ 雨の中ご苦労だった。今日はもう休んでくれ」

そして若い捜査官は、歌藤に敬礼してその場を去っていった。

「……………」

歌藤は再び黙り込んでしまった。

歌藤をはじめとする捜査本部は、今回の連続殺人事件に加美大助が関与していることは間違いないとしていた。

しかし肝心の加美大助の足取りが全くといっていい程掴めない。島を出たという痕跡は勿論、島に入ったという痕跡すら見つけることができないのだ。

そもそも何故加美大助に照準を定めたのか？

それは遺体の状況にある。

遺体は鋭利な刃物で全身をズタズタに切り裂かれている。その傷は大神神社の神具である「狼の爪」によるものであるとみられている。

そしてその「狼の爪」は、加美大助失踪とともにどこかへいつてしまった。つまり「狼の爪」は加美大助が何らかの理由で持ち去ったのではという可能性があるのだ。

しかしここまで加美大助の島での足取りが見つけれられないとなると、犯人は別にいるという可能性も出てくるのだ。

そもそも動機は何なのか？

歌藤はこれに一番頭を悩ませていた。犯人が加美大助でも他の誰かでも、その動機が全く見当つかないのだ。

ただ遺体の損傷具合から、犯人は被害者に対して何からの恨みがあるだろうと、歌藤は踏んでいる。

「明日の夜には、解決していたら、いいのにな……」

激しさを増す真つ暗な雨空を眺め、歌藤はボソツと呟いた……。

五

翌朝、

昨日の雨空からうつてかわり、夏の青空が二日ぶりに戻ってきた。昨晩は遅くまで雨が降り続き、地面には水溜りが多数できていたが、太陽が東の空から昇ってくると、それら水溜りは徐々に小さくなり

始めていた。

そんな朝陽さす港に、一人の少女が佇んでいた。
遥である。

「……………」

遥は眩しい朝陽に目を細めながら、港の向こう側にある海を見つめている。港には遥以外の人影はない。船着場の待合所は未だに規制線が張られ、誰も立ち入ることはできない。尤も、規制線が張られていなくても、夥しい血飛沫が飛び散っている待合所に入ろうという者は皆無であろう。

遥は昨晚一睡もできなかった。殺された志都美や千草のこと、父のこと、そして犯人のこと。それらに思いを巡らせていると、とても安眠できる精神状態にはなれなかったのである。そしていつの間に夜が明け、外へ出てきた次第であった。

プップ

本土側の港で渡船が出航の合図を出す。釣り客のため、大神島の渡船は早朝から運転している。大神島と本土の間は近く、年代物の船でも五分とかからない。出航したかと思えば、船はもう大神島の船着場へ接岸しようとしていた。

船が接岸すると、釣り客と思われる数人の男性が船から降りてきた。釣り客は無言で佇む遥には気にも留めず、さっさと港を後にする。

「出航するよー」

船頭は一応遥に声をかける。しかし遥は反応しない。それを見た船頭は不思議そうな表情を浮かべながらも、船を本土へ向けて出航させる。

この光景、今朝遥が船着場に姿を見せてから、延々と続いていた。
「……………」

海を見つめ遥は何を想うのか……。その表情から遥の内心を窺い知ることはできない。

そして再び本土側の港から、プップと船の出航を知らせる合図

が鳴らされる。

船は変わることなく、五分少々で本土側から大神島の港へとやって来る。この日の朝は風がなく、波も殆ど立っていない。

船は船着場へと接岸して停止する。そして先程と同じく、数人の釣り客が島へ降り立つ。

「えっと、お金どこだったっけ？」

「ここや。ニイチャン、いい加減覚えな」

その時、遥の瞳が揺らぐ。遥は船着場に停泊する渡船に視線を変えた。

「新谷さん？……」

遥は壮介の名を口にして、渡船へ恐る恐る近付いてみる。

そして渡船から一人の男性が顔を出す。壮介であった。

「新谷さん！」

遥は壮介が意外な所から姿を見せたため、驚きの声を上げる。そして遥の存在に気付いた壮介も、同様に驚きの声を上げた。

「遥さん！ どうしたのこんな朝っぱらに？」

壮介は渡船から船着場に降り立つ。そしてその壮介の元へ遥は駆け寄る。

「新谷さんこそ。いつ島から出ていたのですか？」

「昨日の夕方に。ちよつと確かめたいことがあってね」

「確かめたいこと……ですか？」

「ああ、ちよつとね」

壮介は遥の問いに、ややはぐらかし気味に答えながら、船着場を後にする。そして遥はその後ろをついていく。

壮介も昨晩はあまり眠れていないのか、顔色はあまりよくなかった。しかしその瞳はとてもギラギラしている。

その瞳の色を見る限り、壮介は島の外で何かを掴んできたようであった。

「今から狼ヶ浜の祠へ行く」

遙の問いに壮介は早歩きで答える。壮介の足は診療所にも加美家にも向かわず、あの狼ヶ浜へと続く砂利道へと向いていた。

「祠の所へですか？ あそこに何が？」

早足で砂利道を進む壮介の後ろ、遙は背中へ向けて訊ねる。

「それはまだ判らない」

意外な答えに遙は目を丸くする。しかし壮介の足は止まらない。

「ただそこにはこの事件を解く何かがある。それが何かを確かめるために行くんだ」

遂に壮介は走り出していた。遙も必死に後を追う。

砂利道が獣道となり、太陽と青い空が生い茂る樹木で隠れる。そして目の前が開け狼ヶ浜が姿を見せる。壮介は足場の悪い中でもスビードを緩めることなく、祠のある洞を目指す。

「はあ、はあ、はあ……」

壮介の後を追う遙の額からは汗が吹き出す。遙の足では今の壮介に並ぶことはできなかった。

そして壮介は洞の中へと入っていく。やや遅れて遙も洞に到着した。

「はあ、はあ……、し、新谷さーん！」

洞の中、遙の壮介を呼ぶ声が木霊する。しかしそれに対する壮介の返事はない。

「新谷さん、一体どうしたんだろう？」

遙は洞の中を進む。程なく祠が現れるが、そこに壮介の姿はない。遙は祠の後方を抜け、洞の奥へと進んでいく。

「あ、新谷さん！」

すると洞の奥、注連縄が張られている所に壮介の後姿があった。

壮介の姿を見つけ、駆け寄ろうとした時、

「あ、ちょ、ちよつと新谷さん！」

遙が驚きの声を上げる。壮介が注連縄をぐぐり、奥へと入っていたからだ。

「え、あ……、ど、どうしよう……」

遙は壮介の後を追っていきかかったが、それは躊躇われた。遙にはこの注連縄をぐくり奥へと進んでいけるほどの度胸はなかった。

「新谷さーん！」

遙は腹から声をだして壮介の名を呼ぶ。すると壮介は遙の方を振り返り、両手を振った。

「え、えつと……」

壮介の行動に対し、どうしていいか判らなかつた遙は、取り合えず壮介の方へ向かい両手を振ってみた。

しかしそれを見た壮介は、さらに奥へと進んでいく。

「ああ、ど、どうしよう……」

奥へと進むことができない遙は注連縄の前で、ただただ壮介の帰りを待つしか術はなかった。

六

「あれ、遙さんこっち来ないのか……」

後ろを振り向き、遙がついて来ていないことに気付いた壮介は、そう呟いた。

壮介は注連縄をくぐった先、真つ暗な洞の中を歩いていた。手には島へ帰ってくる前に予め購入した懐中電灯が握られている。

壮介は大神島へ戻る際、真つ先に訪れるつもりになっていたのが、この洞である。

ここには何かがある。

そんな直感が、今の壮介を突き動かしている。壮介は躊躇うことなく一歩一歩奥へと進んでいく。

そしてしばらく進んでいくと、突如暗闇が途切れ、灰色の壁が現れる。洞の端まで行き着いたのだ。

壮介は懐中電灯で周りを照らしてみる。上下左右隈なく照らす。
「ん？」

壮介から見て左の壁側に何かを見つけた。壮介は懐中電灯で照ら

しながら近付いてみる。

「これは……」

壮介はあるものの前に立ち、そして再び懐中電灯でそれを照らす。それは青色の布であった。壮介はそれを恐る恐る手に取ってみる。

「これは……、パンツ？」

壮介が手に取ったもの、それは男性用の下着であった。所々泥で汚れ、破れてはいるものの原型は十分留めていた。

「……………」

壮介は下着を手に持ったまま黙り込む。そして片方の手で頭を掻き篦る。

「もしかしたら、ビンゴかもしれないな！」

壮介は再び周りを照らしてみる。そしてさらに足元を重点的に照らし出した。

「俺の考えが正しければ、ここには……」

その時であった。

懐中電灯が、あるものを照らし出した。

壮介はそれを照らした状態で、その場所へと近付く。

その場所には、特に何かがあるということではなかった。

ただ、その場所が少しおかしいのである。

大小の岩がゴロゴロしている洞の奥、人がここまでやってくることはほぼ皆無であろう。

そんな洞の奥に、不自然に石が何重にも積まれた場所があった。

またその周りを掘り返したような跡もあり、そこだけ地面の色が周囲と違っていた。

壮介は積まれた石をいくつか手に取り、懐中電灯で照らしてみる。そして……、

「あつた！ ……どうやら、間違いなさそうだな」

壮介は頭をガリガリと掻いた後、手に取った石をポケットに入れた。

「これで犯人の動機ははっきりしたな。あとは……」

壮介は懐中電灯を地面に置き、両手を左右のポケットに入れる。

「あとは、どうやって一本の線にするかだな」

壮介は両手をポケットから出す。

その手には石が一つずつ握り締められていた。

「見えてきたぞ、この事件の真相、そして犯人の顔が！」

壮介は再び石をポケットに入れ、そして懐中電灯を手に持って歩き始める。

光の射す方へ……。

第十二章 真の「狼」たち

—

話は前日の夜に遡る……。

壮介は瑞希から教えてもらった住所を頼りに、宇方総合病院へと向かった。

バスで一旦宇方駅まで戻り、そこから病院方面行のバスへと乗り込む。もう暗くなる時刻と生憎の雨ということもあり、壮介はバス停を探すのに苦勞し、思いの外時間をかけてしまった。

病院に到着した壮介は、早速瀬川の病室を探すこととなる。ただ受付を通すと色々と面倒なことになるかもしれないという考えがあり、壮介は広い病院をしらみつぶしに捜していくことにした。

そもそも瀬川がここへ搬送されたということも明確ではない。いるかどうか判らない人物の病室を捜すというのは、なかなかの辛い作業である。しかし壮介は一つ一つ病室のネームプレートを根気よく探していく。

そして壮介が捜しはじめてから一時間、個室病棟でようやく瀬川のネームプレートを見つけることができた。

「ここか……」

周囲を見回した後、壮介は意を決してドアをノックしてみる。

「……………」

中からの返答はない。壮介はもう一度ドアをノックしてみるが、やはり何の反応もなかった。

「失礼しまーす」

鍵はかかっていないようだったので、壮介はドアノブに手をかける。ガチャリという音とともに、ドアは開いた。

さほど広くない室内の窓際にベッドが一つ、そこで横になってい

るのが瀬川であつた。

壮介は瀬川のベッドに近付いてみる。瀬川の眼は開いているものの、その焦点は定まっていなない。室内は電気が消されているため、その顔色まで窺い知ることはいできない。

生きているのか死んでいるのかすら、この時点では判断できないくらいだつた……。

「瀬川……さん？」

壮介は瀬川の名を呼んでみる。しかし瀬川は全くの無反応。それは息をしているのかと感じる程だ。

「瀬川さん、僕です。新谷壮介です……」

壮介は取りあえず名乗つてみる。そしてベッドの傍まで近付き、置いてあつたパイプ椅子に腰掛ける。

「瀬川さ……ん」

その後も壮介は瀬川の名を呼んでみる。しかし瀬川が壮介の方をみることはない。

「……………」

そして瀬川はピクリとも動かない。視線はずつと天井の方を向いている。しかし天井を凝視しているというわけではない。ただそちの方を向いているという感じだ。

「眼、乾かないのかな？」

瀬川が瞬きをしている様子もなかつたので、氣になつた壮介は瀬川の顔を覗き込む。天井の方を向く瀬川の視線に、壮介の顔が割り込んでくる。

瀬川の瞳が微かに動く。

「……………」

「……………」

お互い顔を合わせたまま、しばらくそのままの状態。傍目からは睨めっこをしているように見える。

「やっぱ瞬きしてねえや。大丈夫なのかな？」

壮介はその事実に対し驚きながらも、もう十分と顔を引つ込める。

その時であつた。

「うわっ！」

突然瀬川の両手が動き、壮介の顔を掴んだ。驚いた壮介はその手を振り払おうとするが、その力はあまりに強いもので、簡単には離れなかった。

「せ、瀬川さん？」

壮介は瀬川の顔を見る。

瀬川の顔は相変わらず天井の方を向いている。しかしその視線は天井から外れて壮介の顔を凝視していた。

「……………、こ、こ、これは……………」

「せ、瀬川さん！」

瀬川は言葉を発する。喉が渴きに渴きつているのか、魔女のようなしわがれた声だ。

瀬川はまるで取り憑かれたように、壮介の顔を凝視し続ける。

そしてその壮介の顔の中でも、とりわけ注目している箇所があった。

それは、壮介の頬についている傷。

「こ、これは、ち、ちぐさ？……………。ちぐさ、ちぐさ……………」

瀬川は千草の名を口にしはじめる。

「せ、瀬川さん！　しっかりしてください！」

壮介は瀬川の肩を揺する。

すると瀬川の眼に光が宿った。

「あ……………し、新谷君？」

瀬川の声は相変わらずしわがれていたが、その声にははっきりとした「生气」があつた。

「せ、瀬川さん、よ、よかつた……………」

力の抜けた瀬川の手を払いのけた壮介は、その様子を見て、安堵の表情を浮かべた。

「ここは、どこなのですか？」

正気を取り戻した瀬川は、まだ記憶が混乱しているようで、今自分がどこにいるのか全く見当がつかない様子。壮介はここが宇方総合病院であることを伝える。すると瀬川は何故自分が病院で寝ているのかを訊ねてきたので、壮介は少し躊躇うものの今朝大神島で起きたことを説明した。

「……………」

それを聞いた瀬川はしばらく黙り込んだ。ショックを受けているのは勿論だが、それ以上に自分の記憶の断片を一つ一つ繋ぎ合わせるという作業に集中していた。

「そうだ……千草が……」

瀬川は三十分程で、千草がもうこの世にいないことを思い出す。その身体は小刻みに震えだしていた。

そして瀬川がこの時思い出したのは、千草が死んだということだけではなかった。

「ところで瀬川さん、僕の傷が一体どうかしたのですか？」

壮介は頬を押さえ瀬川に訊ねる。

瀬川は壮介の顔……もっと細かく言うと、壮介の頬についた傷を見て正気を取り戻した。正気を取り戻す程、壮介の頬の傷は瀬川の琴線にふれたということ。その理由が何なのか、壮介は知りたかった。

瀬川は壮介の頬を見つめる。すると口元がプルプルと震えだす。何かとても恐ろしいことを思い出したようであった。

「瀬川さん、あなたは僕の傷を見て千草さんの名前を出した。確かにこの傷は千草さんにつけられたものです。では何故あなたはそれに気付くことができたのですか？」

壮介はここぞとばかりに瀬川へ詰め寄る。

「い、いや……」

壮介の真剣な眼差しに、瀬川は思わず顔を逸らす。

この仕草を見て、壮介は確信する。瀬川は何か知っている。

「瀬川さん！　もし何か知っているならば教えてください！」

壮介の言葉に瀬川は顔を背けたまま。その瞳には明らかな動揺が浮かんでいる。

それを見た壮介はさらに詰め寄る。

「お願いします。二人の人間が殺されているんです。犯人を見つけ出すため、そして二人の無念を晴らすために、どうか教えてください！」

壮介は唾を飛ばして必死に瀬川を説得する。

「新谷君……」

しばらくの沈黙後、瀬川の視線が再び壮介の頬に向けられる。

「その傷は確かに千草がつけたものですね」

その言葉に壮介は強く深く頷く。

しかし次の言葉に壮介は驚愕する。

「狼ヶ浜で……」

二

「私は今から三年前に千草と知り合い、そして交際していました……」

真つ暗な病室、瀬川は千草のことを静かに語り始めた。

「生徒と教師、本来ならば絶対に許されない交際、しかも君も知つての通り私は島の開発計画賛成派、そして千草は反対派の娘。私たちは人目を忍び、あの狼ヶ浜で会っていました」

瀬川は三年前からの記憶と一つ一つ。それは大切そうに紐解いていく。壮介はそれを隣に座り、黙って聞いていた。

「そんな時、行政の方から宇方地域再開発計画の具体案が提示されました。勿論私たち賛成派はこれに賛同し、島民にも理解を求めていった。当時賛成派はそれ程大きな所帯ではありませんでしたが、この案のおかげで開発計画は大分広まりました。しかしこれにより反対派の連中と衝突することが多くなりました」

三年前、当時の賛成派大將は菅林で変わりはないが、当時の反対

派大將は加美大助である。

「当時の反対派の中心人物には千草さんの父親、そして加美大助がいた」

壮介の言葉に、瀬川は深く頷く。

「当時の中心は加美家。川住家はあくまでサポートするという感じで、それ程表には出てくることはありませんでした。ただ……」

「ただ？……」

瀬川はここで少し言葉を詰まらせる。

「千草のことに關しては、かなり神経質になっていました。千草自身も反対派の活動に率先して加わるようになっていたから。年頃の娘を持つ父親として、何か間違いが起らないかと冷や冷やしていたんじゃないかなと思います。何せ可愛い一人娘だったからね……」
「可愛い一人娘だった……。瀬川のその言葉には何とも言えない寂しさが込められていた。千草は自身にとっても可愛い恋人だったのだから……」

「では開発計画に關して、基本的には加美家とやりあうことが多かったのですね？」

「私のポジション的には、そういうことになりますね。末端まではよく判りません」

壮介の質問に瀬川は静かに答える。ここで壮介は核心に触れる問いを瀬川へぶつける。

「そんな時、突然加美大助が姿を消してしまうのですね？」

瀬川はその当時のことを思い出しているのか、視線を下へ落とし表情を曇らせる。あの時のことを当事者であった瀬川が覚えていないわけではない。

「その一件、私も驚きました。開発計画反対派の大將が突然どこかへ行ってしまったのだから。反対派はかなり混乱していたようです」
そして瀬川の眉間の皺が寄る。その微妙な表情の変化を、壮介は見逃さなかった。

「そんな時……、ちょうど大助さんがいなくなる直前、変な噂を耳

にしました」

「変な噂？ それはどういう？」

「ええ……。端的に言つと、大助さんが反対派から賛成派へ寝返るというものでした」

瀬川は言つのを躊躇つたのか、その歯切れは悪い。また壮介に視線を合わせようとはしなかった。

「寝返るつてか……」

それを聞いた壮介は頭をガリガリと搔く。全く信じられないという表情であつた。

「私も最初は信じられませんでした。昨日まで散々やり合つていた人物が急に仲間になるなんて話、全く想像できなかった……」

壮介も同感のようで、何度も頷く。

「そして大助さんがいなくなる前、偶然私は道で大助さんを見かけました。私たちの関係上、道で出会つても目は合わさないし挨拶もしないので、その時大助さんの方から挨拶をされたんです」

「その時、大助さんはどんな様子でした？」

壮介は瀬川のベッドに詰め寄る。

「普段私たちには見せたことのないような笑顔でした。そして……」
「そして？……」

瀬川は再び言葉に詰まる。そして沈黙の後瀬川はゆっくりと口を開く。

「頬に傷があつたのですよ。新谷君と同じような傷が」

それを聞いた壮介は、自分の頬の傷を撫でる。壮介の傷は瘡蓋が張り付いており、まだキレイには直っていない。

「その時、私はまだその傷の意味を知りませんでした。そしてその直後大助さんは姿を消してしまつたのですが……」

瀬川はここで一度言葉を止め、静かに目を閉じて天を仰ぐ。

「……………」

「瀬川さん？」

その沈黙があまりに長かつたので、壮介は思わず声をかける。す

ると瀬川は我に返ったように目を開き視線を落とした。

「……、大助さんがいなくなった直後、私は狼ヶ浜で千草と会いました。その時の千草の様子が、ちよっとおかしかったのです」

「おかしかった？　どういう具合に？」

「判り易く伝えられないのですが。何かこう浮世離れしているというか……、いつもの千草ではない感じがしました。まるで千草の姿をした全くの別人のような……」

壮介はドキリとした。瀬川の言った千草の姿というのは、壮介が昨日の夜狼ヶ浜で見た千草そのものだったからである。言うなれば、あれは千草の姿をした「魔物」でないかと感じるほどであった。

「そしてその時、千草は私にこう言いました。狼を一匹手懐けた……と」

「狼……、それは大助さんのことですか？」

壮介の問いに瀬川は首を振る。

「確かなことは判りません。ただ……」

瀬川は手をかざし、そして掌を見つめる。その姿を壮介はポカンとして見ていた。

「千草が私に近付いてきて、自分の両手を私の頬にあてがいました。そして、思い切り私の頬に爪を立てました……」

その瞬間、壮介は自身の頬についた傷を押さえる。ズキッと痛んだような気がしたのであるうか？

「そして頬を押さえる私にこう言いました。こうやって……と」

瀬川は壮介の頬に視線を向けていた。

「その後私は家に戻り、鏡で自分の頬についた傷を見て確信しました。大助さんの頬につけられた傷は千草によるものだ。何故なら私の傷と大助さんの傷が、あまりにも似ていたからです」

「そして、俺のもですか？」

壮介は頬にあてがっていた手をどける。瀬川は少し間を置いてから静かに頷いた。

夜が更け雨足が強くなつてきても、二人の話は続く。

「千草さんの様子が変わってしまうことは、よくあったのですか？」

「時々ですね。ここ一年間そのようなことはありませんでした。ただ……」

「ただ？……」

「祭の時、妙な噂が飛んだのです。大助さんが島へ戻ってきているのではないかと……と」

壮介は頭をガリガリと掻く。祭の日に島を駆け巡った怪情報である。

「その噂が飛んでから、千草の様子が変わってしまいました。あの時、狼ヶ浜で会った時のような感じてした……」

壮介は頭を掻きながら瀬川に訊ねる。

「ではやはり千草さんは、大助さん失踪について、何らかの事情を知っていたということなんですかね？」

それを聞いた瀬川の表情は曇ったまま。瀬川にとっても、そうではないかと考えてはいるものの、確証にかけるものだったのだ。

「これは私を感じただけことです。自信を持って決めることはできません」

ここで瀬川は再び言葉に詰まる。千草のことを思い出しているのか、身体は小刻みに震えだしていた。

「ただ……、最後に千草と会った時、確かに様子はいつもと違っていました。しかしそれ以上に、千草は何かに怯えているような、何故だかそんな感じを受けました……」

「怯えている？ それは一体？」

壮介は瀬川に訊ねるが、瀬川はその問いに全く反応しなかった。ただ、身体を小刻みに震えさせていた……。

「あの時、私がつと千草に気をかけていれば……、こんなことにはならなかったんじゃないかと思うと……、もう、私は……」

瀬川の声が詰まる。

瀬川があの時、千草が死んだと知った時何故割腹自殺を図ったの

か。それは千草の変化に気付いていながらそれを見過ごし、そして死なせてしまったという「罪の意識」からだっただろう。そして何より千草は瀬川の恋人であった。突然恋人を失った瀬川の絶望感、は、壮介の想像を遥に超えるものであろう。

悲しみに暮れる瀬川を、壮介はそつとしておきたかったが時間が限られているので質問を続ける。

「あともう一つ。祭の翌朝に殺された新居志都美さんについてです。瀬川さんはご存知ですか？」

壮介の質問からしばらく間があいてから、瀬川は口を開く。

「はい、知っています。親が新居興産という会社を経営していて、開発計画の建設事業を受注していました。菅林と新居興産の社長は古くからの友人だそうで、私よりも菅林の方が懇意にしていました」

「新居志都美は今回より以前に、島を訪れたことはありますか？」

「はい、何度かあります。主に菅林が自分の観光ホテルに招待していました」

それを聞いた壮介は頭ガリガリと掻き耑る。そしてある時その手がピタッと止まる。

「……………」

壮介は目を閉じ、黙り込む。そんな奇妙な行動に、瀬川は目を丸くした。

「し、新谷君？……………」

瀬川は恐る恐る声をかけてみる。

その時、壮介の手が動き、その手はポケットの中へと入っていく。そしてポケットから手が出てきた時、手にはあるものが握られていた。

「それは？」

壮介の手に握られていたもの、それは狼ヶ浜の洞で拾った石。壮介はその握り締めた石をジッと見つめていた。

そして壮介は立ち上がる。

「瀬川さん、今日はありがとうございました。何となくですが、こ

の事件の真相が見えてきたような気がします」

壮介の突然の言葉に、瀬川は少々戸惑った表情をみせる。何が何だか判らないという感じた。

「まだ犯人の顔は見えないけれど、目指すべき場所ははっきりと見えませんでした！ では！」

壮介はベッドの横に置かれていたパイプ椅子を片付け、そして扉の方へ。

「それでは失礼します。お身体大事にしてください」

扉の前で壮介は瀬川に向かい深々と頭を下げた。瀬川は少し戸惑いながらも、横になりながら会釈をして応えた。

そして壮介は瀬川の病室を後にした。

三

プルプル……………

カチャ……………

「もしもし、私だ」

「社長、お客様です」

「客……。誰だ？」

「診療所の喜志先生です」

「喜志先生が……」

「お通ししてもよろしいですか？」

「……………」

「社長？」

「判った。お通ししてくれ」

「はい」

一連のやり取りの後、菅林は内線の受話器を置いた。

ここは大神島観光ホテルの最上階にある社長室。仕事上菅林は普段から島の外へ出ていることが多いが、島に滞在する際はここで仕事を行う。

菅林は席から立ち上がり、ソファの方へ移動する。

「何の用だ？」

ソファに座り、喜志がやってきた理由を思案する。

コンコン……

程なくしてドアをノックする音。

「失礼します」

ドアが開くと、ホテルの従業員に伴われて喜志が姿を現した。喜志は診療所から直で来たのか、白衣を羽織ったまま、また手には茶色い鞆を持っていた。

「どうも」

ここで喜志と菅林の目が合う。目が合うと喜志は片手を挙げる。

従業員が退室すると、喜志はソファにドッカリと座った。

「こうやって会うのは久しぶりやの、社長さん」

「……そうですね」

そして菅林もテーブルを挟んだ反対側のソファに座る。

「相変わらず豪勢な所やの、ここは。まるで大神島の殿様じゃてな」

喜志は社長室を見回し、皮肉混じりの口調。それに対し菅林は鼻で一笑する。

「で、今日は何の御用ですかね？」

菅林もまた皮肉混じりの口調で返す。

「何や、用がないと来たらいかんのか？」

「私も色々忙しいので……。それに先生が用もないのにここまで来ることはないでしょうから」

菅林の皮肉たっぷりの言葉に、喜志は苦笑いを浮かべる。

確かに菅林の言葉には一理あった。菅林は開発計画賛成派のリーダー。そんな人物の元へ開発計画に関して中立の立場を守っている喜志が訪れるのだから、何かしらの理由があると考えるのが普通である。

「ふん、相変わらずのオッサンじゃの」

「貴方も相変わらざるの喰えないジイさんですね」

テーブルを挟んでお互いがお互いを皮肉る。社長室には異様な空気が流れはじめていた。

すると喜志がポケットからタバコ取り出し火をつける。

「先生、タバコはお止めになったんじゃないですか？」

菅林が声をかけるものの、喜志は構わずタバコをふかし続ける。

「朝から随分警察が騒いどるの……」

喜志はソファから立ち上がり、内線電話の横に置かれていた灰皿を手に取る。

「犯人の目星でもついたんじゃないですかね？　こんな田舎の警察でも、優秀な日本警察の一部ですからね」

灰皿を手に持った喜志は再びソファに戻ってくる。

「どうやら、加美大助の居所が判ったようじゃの」

喜志はタバコを半分程吸い終わってから、灰皿に押し潰した。

「そうですか、それはよかったですね」

菅林は冷淡な口調で答える。我関せずと言った感じである。

「ほう、これは白々しい」

喜志は再び皮肉混じりの口調で答える。その言葉に菅林の眉がピクツと動く。

「先生、何が仰りたいのですか？」

菅林の語気がやや強いものとなる。すると喜志は再びタバコを取り出し、火をつける。

「ふん、自分の舎弟の娘をけしかけておいて、随分と素っ気ない返事じゃてな」

すると菅林は冷たく笑う。

「それはお互い様でしょう、先生」

菅林の言葉に、喜志はタバコを吸う手を止める。表情は変わらないが、その姿がかえって喜志の動揺を物語っていた。

「これに関してはお互い様ですよ、先生。喧嘩はやめましょう。お互いのためにね……」

「ふん……」

喜志は不機嫌な表情となり、タバコをふかす。

「まあそういうことなら、この事件ももう終わりですかね。犯人逮捕でやっと事業に集中できるというものですよ」

菅林はソファから立ち上がり、窓側へと歩いていく。社長室からは大神島が一望でき、菅林は大神島で一番高い建物の一番上から島を見下ろした。

「果たしてそうかの……。今回の殺人、大助は犯人じゃないです」と喜志は持ってきた鞆をテーブルの上に置いた。

「何ですかそれは？」

菅林は気にも留めていなかったが、その鞆はかなり大きく、そして重量もあるようであった。

すると喜志は鞆のファスナーに手をかける。

「よお見てみい。大助の遺品じゃて……」

喜志はファスナーを手前に引き、鞆の中身を取り出した。

「そ、それは！……」

鞆の中身を見た瞬間、菅林は絶句し身体を凍りつかせる。

喜志が鞆から取り出した、加美大助の「遺品」、

それは加美大助と共に忽然と姿を消した「狼の爪」であった。

「もう、終わりじゃて……」

そして喜志は静かに呟き、静かに席を立ち社長室を後にした

四

「よし、運び出せ！」

狼ヶ浜に歌藤らの声が響く。

太陽が空の一番高い所で昇ろうとする頃、この「忘れられた浜」は騒然としていた。

「ゆっくりだ、足元に気をつけろよ！」

狼ヶ浜の洞から数人の捜査員により担架が運び出される。その担架には誰かが乗っているのか、上にはブルーシートが被せられてい

る。

その担架は砂浜に停泊してある小型ボートに乘せられ、そして数人の捜査員と一緒に狼ヶ浜を出航していった。

その光景を歌藤は複雑な表情で見つめている。歌藤の額には大粒の汗が浮かび、そして頬をつたい流れ落ちていく。

「難儀やなあ……」

ボソツと歌藤は呟く。部下である捜査員たちは洞の中を慌しく行ったり来たり。その姿はまるで巣穴を忙しそうに出入りする働き蟻のようであった。

「主任さん……」

洞の中から壮介が出てきた。そして洞の入り口から歌藤の名を呼ぶ。割と小さい声だったが、歌藤はその声に気付き振り向いた。

「ああ、確認ご苦労さん」

壮介は磯場に佇む歌藤の元へ歩いていく。

壮介が洞の祠の先で見つけたもの、それは不自然に積まれた石と地面を掘った跡。

そして不自然に積まれた石のいくつかに血痕が付着していたのである。

それらに気付いた壮介は一旦この場を離れ、遥を加美家まで送りとどけた後大神神社横の捜査本部へと出向いたのであった。

壮介は祠の奥で見つけたものを、遥には何も伝えなかった。不審に感じた遥は壮介に何度も訊ねてきたが、結局最後まで壮介は何も答えずに押し切ってしまった。

壮介が遥に何も答えなかったわけ、それは祠の奥にあったものが、遥を……否、加美姉妹を絶望のどん底へ突き落とすものに等しかったからであった。

「しかし、あの注連縄によく気付いたな」

歌藤は自分の隣に並んだ壮介に話しかける。

「ええ、近付いてみてはじめて気付きました。祠からじゃ、そこに注連縄があるということにすら気付かなかったですよ」

壮介が祠の奥に広がる空間に気付き、遙が止めるのを振り切つて奥へと進んだ。そしてそこで見つけたものは古い注連縄であった。張られてから何十年、もしかしたら何百年と経っているかもしれない、かなり年代物の注連縄。そんな注連縄に、壮介はちょっとした違和感を覚えた。

「注連縄の真ん中あたりは縄がほつれて、ちょっと力を加えたら切れてしまいそうな感じでした。でも岩に縄をくくりつけてある片方が、随分キレイな結び目だなと思っただんです。もう片方は今にもほどけてしまいそうだったのに」

壮介が違和感を覚えたもの、それは年季が入り何十年もそこに張られたままになっていた注連縄の結び目だった。

「あの洞の奥はけっこうジメジメしていて、注連縄にカビが生える程。注連縄も水分を含み以前よりも重くなってきたはずなんです」「なるほどね……」

歌藤は壮介の言葉に相槌を打つ。そしてポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭う。

「水分を含んだ注連縄は重さによりたるんでくる。その結果岩にくくりつけられた結び目も重さによりだんだん緩んでくると」

「そう、事実片方の結び目はそのような状態でした」

「しかし、もう片方はしっかりと結ばれていた……」

この状態が、一体何を意味するのか？

壮介は答える。

「つまり、つい最近誰かがこの注連縄を解いた可能性があるということなんです」

ここで最大の疑問が浮かぶ。

ならば誰が何の目的でそのようなことをしたのか？ こんな普段は誰も近付かないような浜の、さらに誰も近付かないような洞の奥深くで……。

「しかし、よりによってあんなモンを……。まあここは格好の隠し場所ではあるがな」

歌藤は洞の方を振り返る。相変わらず捜査員たちが慌しく出入りしている。

「死後数年は経つとるな。血痕は残っているが、身元判明までは随分と時間かかるわ……」

壮介が洞の奥でみつけたもの。

不自然に積まれた石をどけた先、地面を掘った後を掘り返してみたら……。

そこには死後数年は経過しているとみられる白骨死体があった。

あのブルーシートを被せられた担架にはその白骨死体が乗せられていたのだ。

「多分、その白骨死体ですよ。注連縄が解かれた理由……」

壮介はそう呟き、そして頭をガリガリと掻き篦る。

「他の場所から運搬するために、注連縄を外したというわけか」

歌藤の言葉に壮介は無言で頷く。周辺の石には血痕のついた石がいくつか転がっていたが、それらは洞の広範囲で見つかった。それはもしこの白骨死体が他殺である場合、発見場所で殺害されたのではなく、別の場所で殺害されここへ運ばれてきたということを意味していた。

そして白骨死体の周りには遺留品は殆ど見つからなかった。唯一みつかったものは男性用の下着。これにより白骨死体は男性である可能性が高いが、あまりに損傷が激しいため見た目には判断できずにいた。

「そういえば主任さん、さつき身元判明まで時間がかかると言っていましたよね？」

「ん、ああ。あの状態ではな……」

歌藤が言い終わると同時に、壮介は歌藤の目の前に出る。そんな壮介の行動に、歌藤は目を丸くする。

「ん、ど、どした？」

驚く歌藤とは違い、壮介の目は真剣そのものだった。

「主任さん、俺はあの白骨死体、誰だか判ります」

壮介の言葉を聞いて、歌藤はさらに目を丸くする。

「な……、ど、どういうことだ？」

そして壮介は、一呼吸置いて歌藤に伝える。

「あの白骨死体、おそらく加美大助さんですよ」

「なっ！」

何故壮介は一呼吸置いたのか？

それは脳裏に一瞬、加美姉妹の姿が浮かんだからであつた……。

五

「お姉ちゃん」

自宅に戻つた遥は、千絵子の姿が見えないことに気付き、屋敷内を探して回る。

玄関に靴があることは確認したので、屋敷のどこかにいることは確かである、加美家は大神島で屈指の広さを誇る屋敷なので、探すのは意外と時間がかかる。

一階を探してみるが千絵子の姿はない。遥は普段あまり上がったことのない二階へと向かう。二階には父大助の寝室と仕事部屋。これらの部屋は大助が失踪してからそのままの状態にされてある。

「お姉ちゃん、いるの？」

遥は上がる前に一度千絵子の名を呼んでみる。しかし何の応答もなかったため、階段を上がる。

二階はずつと窓と雨戸が閉められているので、昼間でも真つ暗。

遥は廊下の灯りをつける。

「お姉ちゃん……」

遥は二階にある二つの部屋へと入る。どちらの部屋も真つ暗で人が入った形跡がない。遥は電気をつけて部屋を見回してみる。そこには姉どころか人影一つなかった。

「もつどこへ行ったのかしら？」

遥はそうばやきながら電気を消して部屋を後にする。そして再度

一階を探してみるために階段を下りる。

その時だった。

「きゃッ！」

姉の姿が見えないことで、遥は姉がどこに行ってしまったのか思案しており、足元をちゃんと見ておらず、それにより遥は階段を踏み外してしまった。

「きゃーッ！」

ドスン！

音と共に廊下が揺れた。

遥は尻餅をつくような形で階段から落下。途中で体勢を整えることもできず、階段の一番下まで落ちていった。

「いたた……」

幸い頭を打つことはなかったが、遥はお尻を押さえしばらく立つことができなかった。

その時、遥の視線は玄関へと向いていた。

「あれ……」

遥はあることに気づき、立ち上がるうとするが、お尻がまだジンジンするようで立ち上がりず這うようにして玄関へと向かう。

玄関には千絵子と遥の靴が一足ずつ。

「サンダルがない……」

玄関にはちよつと外へ出るためのサンダルが置かれているのだが、それが見当たらなかった。

どうやら千絵子はこれを履いて外へ出て行ってしまったようであった。

「もう、私のバカ！」

そのことに気付いた遥は、自分の頭を小突く。

そしてお尻の痛みが和らいだのか、スクツと立ち上がった。

「それにしてもお姉ちゃん、どこに行ったのかしら？」

遥は首をかしげながら、玄関にある二足の靴を端に揃え奥へと消えていった。

.....

この時遥は気付いていなかった。
玄関に飾られている狼の剥製が、遥が落下した時の衝撃で傾いてしまったことに。

「こんにちは」

昼過ぎ、島が狼ヶ浜の白骨死体の件で持ちきりになっている頃、
壮介は加美家を訪問した。

「あら新谷さん、いらっしやい」

遥がエプロン姿で現れる。その姿を見た壮介は頭を掻いた。

狼ヶ浜で見つかった白骨死体。壮介はそれを加美大助ではないかと考えている。しかしそのことをまだ遥には伝えていない。そして遥も狼ヶ浜で白骨死体が見つかったことは知っているが、それが今回の事件とは無関係であると聞かされているし、またそれが父であるかもしれないとは夢にも思っていなかった。

「何だが大変なことになりましたね。新谷さん大丈夫ですか？」

「え、ああ。俺は全然大丈夫ですよ。遥さんこそ、大変なことが次から次へとで……」

すると遥は首を振る。遥は一見して大人しそうで泣き虫な少女であるが、実のところかなりタフな性格をしているようだ。そうでなければ大助がいなくなった後の加美家を一人で切り盛りはできなかったであろう。

「どうぞ上がっててくださいな」

遥の言葉に、壮介は靴を脱ぎ屋敷へと上がる。玄関の端には姉妹の靴が一足ずつ。未だに千絵子は帰ってきていないようだった。

「ん？」

屋敷へと上がった時、壮介はその異変にすぐ気付いた。壮介の視線は玄関に飾られている狼の剥製へと向けられていた。

「どうされました？」

「いやあ、剥製の位置がズレちゃってるかなと思って」

壮介は剥製の方を指差す。すると遥はようやく剥製の異常に気付
き、またその原因が自分にあることも気付いた。

「あ、ああ……、そ、そうですね。すみません……」

遥は恥ずかしそうな表情で剥製の前へ。壮介も後ろへ続く。

「新谷さん、申し訳ないですがちよっとお手伝いしてもらってもよ
ろしいですか？」

この狼の剥製、なかなか大きいものなので少女一人の力ではとて
も持ち上がりそうにない。壮介は遥の頼みを快諾した。

「どう直したらいい？」

「すみません……。狼の前足が木の台座にちゃんと乗るようにして
下さい」

壮介は遥と協力して狼の前足部分を持ち上げる。二人がかりでも
その重量感はかなりなものだ。

「よいしょっと。これでいいかな」

「はい、ありがとうございます！」

これで狼は無事元の位置に戻された。

「あれ？」

確かに狼は元の位置に戻された。しかし壮介はその狼の剥製に何
かしらの違和感を覚えた。

「新谷さん、どうかされたのですか？」

頭を掻きながら眉間に皺を寄せる壮介の姿をみて、遥が訊ねる。

「いや、この剥製、何かおかしいな？」

壮介は狼の剥製のどこに違和感を覚えたのかを確かめるため注視
する。

身体、毛並み、尻尾、顔、目、鼻、口……と色々な角度から見
る。そして壮介はあることに気付く。

「この狼の剥製、前に見たときよりも首が下がってる？」

この剥製の狼、まるで獲物を狙うかのような低い体勢を取ってい
る。そんな時、狼は相手を威嚇するため首を上向きにしているのが
普通である。しかし今の体勢は首は下を向いており、まるでうなだ

れているような格好となっているのだ。

「言われてみれば確かにそうですね」

遙も壮介に同調する。夜に目が合うと思わずビクリとするような眼光をしていた狼に、今そのような威厳は感じられない。

「首が自然に動くわけねえよな……」

壮介は狼の剥製の首に触れてみる。

「ん？」

壮介は何かに気付き、今度は両手で隈なく狼の首を触る。

そして

カパッ

「キャッ！」

まるで海苔缶の蓋を開けるような音がした後、狼の首が取れてしまった。遙は驚きのあまり後ろへ三步下がってしまった。

「ああゴメン驚かせて。まさか首が取り外し可能な剥製とはね。ん、身体の部分に何かあるぞ」

剥製の身体部分は空洞になっていて、その中に何かが入れられていた。

「紙袋か……」

中に入っていたのは茶色い紙袋。それは分厚く結構な重さ。壮介は紙袋を開け、中身を出してみる。

「写真……」

紙袋の中身は写真が数十枚。

「……！」

壮介は写真数枚を見たところで手が止まった。そして額からおびたらしい冷や汗が流れ落ちた。

「どうしたんですか？ 何が写っているんですか？」

遙は壮介の手から写真を一枚取り上げる。

「あっ！」

壮介はその写真を取り返そうとするが、一瞬遅かった。その写真は遙の手の中にあり、そして遙はその写真に釘付けとなっていた。

その写真には何が写っているのか？

その写真、加美姉妹は、加美姉妹だけには絶対に見せてはいけなものだった。

事実写真を見る遙の全身は小刻みに震えており、目の焦点も定まっていなかった。

「やべえな……」

壮介は頭をガリガリと掻きながら、写真に視線を落とす。

壮介も写真を見た瞬間、我を失いそうになった。

それら写真に写っていたもの。

それは一糸纏わぬ姿の千草と志都美らしき少女たちと戯れる、一人の男性。

そしてその男性が加美大助であるということを、遙の表情が物語っていた。

六

「遙、入るよ」

扉が静かに開き、千絵子が現れる。

「……………」

遙は何も言わず部屋の隅で蹲っている。その表情は窺い知ることできないが、その丸まった身体は小刻みに震えていた。

遙が茫然自失の状態で部屋に閉じ籠ってから程なくして千絵子が帰ってきた。最初は買い物のために外出していたのだが、帰り道で捜査員に呼び止められてしまい帰りが遅くなってしまった。

帰ってきた時、玄関に壮介の靴があることに気付いたと同時に、狼の剥製の首が取れていることにも気付く。千絵子は慌てて居間に向かうが誰もいない。次に遙の部屋へ向かうと、扉の前で頭を抱える壮介の姿を見つける。

そして壮介から、狼の剥製に隠されていた写真を見せられたのであった……。

「遥……」

部屋の隅で小さくなっている遥をみて、千絵子も言葉を失う。

「俺……あっちにいるから」

壮介はそう言い残して扉の前を後にする。

壮介の背中を見送ってから、千絵子は遥の部屋へと入る。

千絵子が部屋に入ってきたが、遥は微動だにしない。まさに魂が抜けてしまったような様子だ、

千絵子は蹲る遥の隣に座り、そして肩を抱く。

「遥……」

千絵子は遥の耳元、優しい声で囁く。

「……………」

千絵子の声に遥の震えは止まる。しかし自分の膝に押し当てた顔は上げようとはしない。

姉妹はしばらくその状態。傷ついた妹を、姉が優しく抱きしめている。千絵子とてあの写真に衝撃を受けていないわけではない。しかしこんな状態となってしまった妹を放っておくわけにはいかなかったのだらう。

「ごめん、ごめんね、遥……」

「ごめん……、千絵子はその言葉を遥に向けて囁き続ける。何に對しての謝罪なのか、それは千絵子にしか判らない。千絵子は瞳を潤ませ、ただただ囁き続けた。

そして……、

「う、う、う……」

遥から、呻きともとれるような声が聞こえてきたかと思うと、

「う、うわあああーんっ！」

次の瞬間、何かが決壊したように姉の胸の中で泣き続けた。

「遥、遥、ごめん、ごめん！」

そんな遥を千絵子も強く抱きしめ、そして、泣いた……。

しばらくして、目を真っ赤にした千絵子が居間に姿を見せた。

「大丈夫？」

壮介はそんな姿で現れた千絵子を氣遣う。

「うん、遙は落ち着いたよ。でも今日はもう休むことにしたよ。色々疲れちゃったから」

それを聞いた壮介は安堵の表情を浮かべる。

「さすがお姉さんですね」

「ふん！ それは皮肉ということですね」

千絵子は苦笑いをしながら畳の上に座る。そして大きなため息をついた。

「ねえ、狼ヶ浜でみつかった白骨死体、親父だったのは本当なの？」それを聞いた壮介は内心ドキツとする。もうそこまで噂が広がっているのかと驚いていた。尤も、この噂の発信源は何を隠そう壮介本人なのだが。

千絵子の言葉に、壮介は首を振る。

「まだそこまではって感じです。何せガイコツだから身元判明には時間がかかるみたいです」

「そう……」

千絵子は視線を落とす。やはり動揺は隠せないようである。

壮介は剥製の中から出てきた写真を卓袱台の上に広げる。

「あのさ、一応確認させてほしいことがあるんです」

「何？」

千絵子の返事にはいつになく力がこもっていない。

「ここに写っている三人の人物について。この三人は誰ですか？」

壮介は写真を出すが、千絵子は写真から目を反らす。

「千絵子さん！」

壮介の声に千絵子は身体をビクツとさせる。

そして口が開く。

「女の子は千草と志都美だよ。昔の写真みたいだけれど、二人ともそんなに変わってないから……」

「では男性は誰ですか？」

壮介は訊ねる。しかし千絵子是一向に口を開かない。しかし知らないのではない、知っているが答えたくないのである。

「では質問を変えます。俺の問いに首を縦に振るか横に振るかして下さい」

そして壮介は静かに切り出す。

「ここに写っている男性は、加美大助さんに間違いないですね？」
しばらくの沈黙の後、

千絵子は首を縦に振った。

「判りました。ありがとうございます」

千絵子の答えを見届けた壮介は、立ち上がり居間を後にする。

「ま、待って！」

今まで黙っていた千絵子が壮介を呼び止める。

「どこに行くの？」

千絵子は壮介を玄関まで追っていく。壮介は狼の剥製の首を元に戻し、屋敷を出ようとしていた。

「いや、診療所に戻ろうと思っているんですが」
すると千絵子は靴を履く。

「私も一緒に行くよ。遥つてばどこかで腰を打つたみたいだから、貴志先生にお願いして湿布もらつてこようと思つんだ」

千絵子は壮介よりも早く玄関を出て、屋敷前の石段まで先に行く。

「あの、戸締りは？」

「いつもしてない！ ほら急いで！」

千絵子は一旦戻つてきて、そして壮介の手を引き石段を駆け下りる。

「あ、ちょ、ちょっと！」

そのスピードに、壮介は足がもつれて転びそうになりながらも千絵子についていく。

（これでは診療所に着く頃には、自分の方が湿布のお世話になってしまつ）

壮介はそんなことを考えながら千絵子に手を引っ張られ、石段を

下
っ
て
い
っ
た。

第十三章　それぞれの思惑

—

「ん、何だこれ？」

診療所に到着した壮介たちは、入り口の前に置かれた茶色い鞆を見つめる。

壮介はその茶色い鞆を持ち、そして「休憩中」の札が吊るされた扉を開く。休憩中だろうが休診中だろうが、基本的に関け放しだ。

「これ喜志先生の鞆じゃない？」

そして壮介の後ろには千絵子が続く。

二人は診療所へと入り、待合室へ移動する。そこには誰もおらず電気もつけられていない。

「喜志先生、診察室の方みたいです」

「そうみたいね。湿布もらっただけだし、ちよっくら行ってくるわ。あ、その鞆もついでに渡してくるわ」

二人は診察室へと続く廊下で別れる。千絵子は鞆を持って診察室へ。壮介は二階へと続く階段へと消えていった。

二階に上がった壮介は、喜志から借りている部屋へ戻る。

「うわあ、疲れた」

部屋に入るなり、壮介は畳の上で大の字となる。思えば壮介は昨日の夕方から動きっぱなしで、満足な食事や睡眠を摂っていない。

壮介は寝転がった状態でケータイを取り出す。電話の着信とメールの受信がそれぞれ一件ずつあった。

「ありゃ、全然気付かなかった」

電話とメールはどちらも瑞希からのもの。メール受信BOXを開くと、瑞希から壮介の身を案じる内容のメッセージが届いていた。「大丈夫？　って、俺以外人間は全然大丈夫じゃないよな……」

そんなことを呟きながら、再びポケットに手を入れる。

ポケットに入れてあったのは、狼の剥製から出てきた写真の入った袋。壮介は袋から写真を数枚取り出して眺める。

「ったく、お父さんは大変なものを残していつてくれましたね」

写真を見つめながら、壮介はあることを思う。

この写真は一体誰が撮影したものなのだろうか？ と。

加美大助の失踪に千草と志都美が絡んでいたことは間違いない。

そしてあと少なくとももう一人、この一件に絡んでいる人物がいる。つまり加美大助失踪の謎を解く鍵は、この撮影者が握っているのだ。

「あと一人……か」

壮介は頭を掻きながら、写真に穴が開く程見つめる。

「そつえば」

壮介はあることに気付き、持っていた写真を裏向ける。

「これは店で売ってるし版紙だな」

そして壮介は写真の表面に人差し指で触れる。

「そんないいインクじゃねえな。安モンのプリンタで印刷したな。」

まあこんな写真、カメラ屋で現像できねえだろうけど」

この写真はデジカメで撮影され、そしておそらく自宅にあるプリンタで印刷したものであると壮介は推測した。

「ん？」

壮介はまた何かに気付いたのか、顔に写真を近付ける。そして手に持った写真全てを念入りに確認していく。

「えっ……」

寝転がっていた壮介は、突然ガバツと起き上がった。そして周りをキョロキョロと落ち着かない様子で見回し、そして頭をガリガリと掻きまわった。

「おいおい、マジかよ……」

壮介は立ち上がり、写真を紙袋にしまい、ポケットに突っ込んだ。「これで一本に繋がったぞ」

壮介の瞳にはこれまでで一番の「確信」がみなぎっていた。

「もうすぐ、もうすぐ終わるぞ」

壮介は畳の上に置いていたケータイを手に持ち、メール作成のボタンを押す。

そして瑞希へメッセージを送る。

「俺は全然大丈夫だ、アーホ」

壮介が一階へ下りると、丁度千絵子が診察室から出てくるところであった。

「終わりましたか？」

壮介の言葉に千絵子は湿布の入ったビニール袋を前にかざす。

「ホントは本人が診察に来ないと出せないけれど、今回は特別だつて」

「そつか、よかったですね」

「まあね。それじゃ私帰るわ。遥、待つてるから」

そう言い残すと、千絵子は去っていった。

「さてと」

千絵子が去っていくのと同時に、壮介は診察室へと入っていった。

二

「なんじゃ、アンタも湿布が欲しいんか？」

ノックもせず入ってきた壮介に、喜志は苦笑いを浮かべる。千絵子がやって来るまでは休憩していたのか、机には烏龍茶のペットボトルと灰皿が置かれていた。

そして診療所の入り口に置かれていた茶色い鞆は診察台の上にあった。

診察室に入った壮介は、診察台横にあったパイプ椅子を喜志の正面へと移動させ、そして座る。

「最近暑い日続きで、冷たいモン食いすぎて腹壊すジジババが多い

んじゃて。ほれ、はよシャツを上げい」

喜志はブツブツ言いながら聴診器を取り出し構える。

「あの喜志先生、僕は診察してもらいに来たんじゃないやありません。とても大切なお話があつて、ここに来ました」

その時、聴診器を持つ喜志の手が止まる。

「話？ 何じゃて？」

壮介はポケットから紙袋を取り出し、中に入っている写真を数枚机の上に置く。喜志はその写真の一枚を手に持ち、じっくりと眺める。

「……………」

写真を手に持つてから、喜志は無言。表情も全く変化しない。

「そこに写っているのは……………」

「言わんでええ」

壮介が写真について語り始めようとした時、喜志がそれを遮る。

喜志は大神島の生き字引とも言える存在。そこに写っているのが誰なのかくらいすぐ判る。

「これをどこで見つけた？」

「加美家の剥製の中から出てきました。あの狼、首が取り外しできて、中にちよつとした空洞がありました」

「そうか。加美家の姉妹は知っているんか？」

「はい」

壮介の返事に、喜志は大きいため息をついた。

「あの姉妹も、可哀想に……………」

喜志の表情には落胆の色が浮かぶ。写真を正視できないのか視線を机から外していた。

壮介は紙袋からもう一枚写真を取り出し、机の上に置く。

「喜志先生、ちよつとこれを御覧になつてもらえますか？」

壮介が喜志に渡した写真。それは他の写真と同じく、加美大助が千草、志都美と戯れているもの。ただ他の写真と少し違ふところがあるとするれば、この写真は他の写真よりも三人から引いて撮影され

たものであった。

喜志はその写真を手に取ってみる。

「この写真が、どうかしたんかの？」

すると壮介は喜志の方へ身を乗り出して指をさす。

「この辺を、よく御覧下さい」

壮介が指した箇所、それは三人の姿ではなく後ろの背景であった。

「はて、別に何も変わったところはないようじゃが……」

「そうじゃありません。よく見て下さい。見覚えがありませんか？」

「見覚え？」

壮介の言葉に喜志は驚いたのか目を丸くする。

しかし……、

喜志の声が、僅かに震えていたことを、壮介は聞き逃してはいなかった。

「三人の後ろ。壁の様子、窓と襖の位置。この部屋、見覚えあるでしょう？」

そして壮介はその写真を、喜志の手からスルリと抜き去る。

「この写真が撮られた部屋は、この診療所の二階、今僕が泊まっている部屋ですね」

写真を掲げ、壮介は単刀直入に喜志へぶつける。大神島を襲った

「惨劇の夏」の真相を暴くために。

「この診療所は、喜志先生が何十年も前から管理されていると聞いています。だから三年前にここで起こったこと、知らないとは言わせません」

壮介は厳しい表情で喜志に詰め寄る。今の壮介の胸には、無残に死んでいった志都美、千草。そして加美姉妹対する想いが去来しているのである。その想いが故、今まで見せたことのないような表情となっていた。

そんな壮介を前にして、喜志は視線を落としたまま。まるで壮介の想いから目を逸らして逃げているようであった。

「喜志先生！　どうか教えてください。三年前、大神島で一体何が
あったのですか！」

力チャ

その時、椅子の軋む音がした。喜志は立ち上がり窓の方へ向かった。

喜志は窓を開けて、外へ顔を出す。

昼下がり、昨日の雨とは打って変わり雲一つない青空、セミの合唱が全方向から響きわたる。

「今年の夏も、暑かったのう……」

すると喜志は、窓を閉めた上にカーテンも閉め、外からの光を遮断した。

「すまんが電気つけてもらえんじやるか？」

遮光性の高いカーテンが閉められたため、診察室は昼間とは思えない程暗くなってしまった。壮介は立ち上がり電灯のスイッチを押した。

そして二人は再び席へ戻る。

喜志はポケットから煙草を取り出して火をつける。そしてとてもゆっくり、煙草を芯から味わい、まるで生涯最後の一本かのように吸った。

「新谷さん。あなたはけっこうな街のご出身だそうで？」

喜志の唐突な質問に壮介は面食らうものの、首を縦に振る。

「そうか。ならばこれから話すことは、新谷さんには全部理解してもらえんじやるて。それでもええか？」

壮介は喜志の内心を計りかねていた。しかしここまで来て尻込みはできないと、再び首を縦に振る。

「どうぞ教えてください。三年前、何があったかを」

喜志は煙草を灰皿に押し付ける。煙が全く出なくなるまで押し潰した。

「それはの、島のためじゃて。全ては、島のためなんじゃ……」
遂に、重い重い喜志の口が開く。

そしてそれは、この「惨劇の夏」終焉への第一歩でもあった。

三

「貴志先生、以前大神島開発計画について、ご自身は中立の立場であると言いました。でも、それは違いますね？」

壮介は静かに訊ねる。額には汗が光る。それは暑さからか、それとも脂汗なのか。

壮介の問いに、喜志は再び煙草に火をつけて答える。

「そうじゃ。わしは以前より、菅林と通じておった。島のためにな」島のために……。そこだけが今までの喜志の言葉の中で、唯一強調されている部分。そこには老医師のたしかな主張が感じられた。

「何故、それが島のためにとお考えなのですか？」

壮介は一つ一つ言葉を選びながら質問を続ける。今の診察室は異様なまでの緊張感に包まれていた。

「判らんかの？」

その時、喜志の鋭い視線が壮介の瞳をとらえ、壮介の顔が強張る。

喜志は言葉を続けず、一度煙草をふかし、そして煙を吐く。

「昔から大神島は、外界から情報や文化が入ってくることを異常なまでに嫌ってきた。新しいものに染まることを絶対的な『悪』として捉え、それを抛りどころに島の結束力を維持してきたんじゃて」

この大神島に関する話、壮介が耳にしたのは二度目。壮介はこれと同じような話を、狼ヶ浜で干草から聞かされていた。その時のことを思い出したのか、壮介の額から汗が流れ落ちる。

喜志の話は続く。

「ところが、今の島はどうじゃ？ ただでさえ開発の遅れているこら地域の中でも一段と遅れておる。学校も廃校になり、若いモンは次々に島を離れていく。島に残るんは、未だ島の因習にしがみついているジジババだけじゃて」

大神島は典型的な過疎の島。それは壮介もこの島で過ごしている

うちに薄々感じていたこと。

「そんなジジババの面倒を誰が見るうちゅうんじゃ？ このままいけば大神島は姥捨山同然じゃ。もしわしがいなくなったら、誰がこの島で医者になるんじゃ？ 誰が島の命を救うんじゃ？」

喜志の語気が荒くなる。喜志には彼なりの島への想いがあり、それを一気に吐き出していた。

人前では絶対に出すことができない想いを……。

「ある時、菅林がわしの元へやってきた。わしに大神島開発計画へ賛同してほしいと……。わしは島の医者という立場上、どちらかの派閥に入ることはできないと話した。しかしその時、菅林は診療所の新築話を切り出したんじゃて」

「新築？」

「そうじゃ。もし開発の手が入り、島に人がたくさん訪れることになれば、行政も島の医療体制の強化に動かざるを得なくなる。そうなれば今の古い診療所から新しい診療所に建て替えられ、新しい医師も島にやって来るだろうと。わしは、その話に、乗った。この島の未来のため、その話に乗るしかなかったんじゃ！」

壮介は喜志の勢いに圧倒されそうになっていた。しかしここで押されては真相には近付くことはできない。壮介は延々と想いを吐き続ける喜志を遮る。

「それが、これなんですか？」

壮介は再び写真を喜志の目の前に掲げる。すると喜志の言葉は止まった。

そして今まで喜志が放った言葉の中に、一つの確信があった。

「この写真には新居志都美と川住千草が写っています。一つ確認します。川住千草、彼女は反対派大將川住清太の娘ですが、彼女自身は開発計画賛成派ですね」

壮介が会った狼ヶ浜での千草。今まで見たことのない浮世離れした様子ではあったが、話していたことには確かな主張があった。

それはいつまでも因習にしがみつく島への嫌悪。

それにより壮介は、実は千草は賛成派の人間と密かに通じているのではないかという疑念を持っていたのだ。

そして喜志の独白により、それが確信に変わった。

またもう一つ確信を感じることがあった。

千草と通じていた賛成派の人間というのは、この喜志であるという事。

「これはあくまで僕の推測です。間違っていたなら訂正して下さい」

壮介は写真を紙袋に戻し、額の汗を拭う。

そして壮介は語り始めた。

「貴方は菅林さんと共謀し、当時の反対派大将加美大助へ新居志都美と川住千草をけしかけて骨抜きにし、あわよくば賛成派へ寝返らせようと画策した」

壮介の言葉に、喜志の眼が大きく見開かれる。

「言うなればハニートラップ。貴方は千草を、菅林さんは志都美を巧く手懐けていたのでしょうか。写真は脅しに使うため、貴方が撮影したものですね？」

喜志は壮介の問いに頷く。

「ただ、一つだけ違うことがある。その何とかトラップを仕掛けると最初に言い出したのは、むしろじゃなく千草たちじゃて」

意外な事実には壮介は驚く。あの二人は自ら進んで加美大助に抱かれることを選んでいった。千草と志都美の二人にも、開発計画を実現するという揺るぎない主張があったということなのだろう。そのために、二人は自分の父親程年齢の離れた男に抱かれた……。

「貴方たちの計画は順調に進んでいました。しかし計算外のことが起きた。加美大助が忽然と姿を消した」

「その通り。あれは驚いた……。しかし、それが今になって死体で出てくるとはな」

喜志は当時のことを思い出すかのように、虚空を見つめている。

「大助がいなくなったことで、わたしの計画は最後の最後で頓挫してもうた。そして三年後の今、中途半端な形で此処に至るうちゅう

わけじゃて……」

喜志は煙草を灰皿へと押し潰して立ち上がり、診察台のほうへと近付く。そして診察台に置かれてある茶色い鞆を手に取る。

「喜志先生、それは？」

壮介が訊ねると、喜志は無言で鞆のチャックを開ける。

そして鞆の中にあるものを、壮介に見せ付けた。

「それは……、狼の爪！」

驚きのあまり、壮介は思わず立ち上がり診察台へと近付く。

「これが本物……、何故ここに？」

壮介はしゃがみ込んで「狼の爪」をまじまじと見つめる。

「これはある日千草がわしの所へ持ってきたんじゃて。それ以来、わしが密かに保管していた」

「そんなものが、どうして診療所の前に置かれていたんですか？」

壮介は空になった茶色い鞆を喜志へと向ける。

「菅林にくれてやったんだがの、突っ返されたんじゃて。全く、あのトカゲ男が……」

喜志は苦々しい表情をみせる。そして「狼の爪」をポンと小突いた。

「この爪はの、わしらが今までやってきたことの象徴じゃて。これがある限り、わしらは自分たちがやってきたことから目を背けられん。永遠にな……」

喜志の独白を聞きながら「狼の爪」に見入っていた壮介は、この時あることに気付く。

「この爪、刃がたつていない？」

壮介は試しに爪に自分の指先を押し当ててみる。すると一見鋭い爪先は、指の柔肌を貫通することなく跳ね返った。

「貴志先生、この爪誰かに持ち出されたとかは？」

すると喜志は首を振る。

「これは菅林の元へ持つていくまで金庫で厳重に保管していた。暗証番号はわししか知らん」

喜志の答えに、壮介は頭をガリガリと掻く。

「ということは、一連の犯行に使用された凶器は、これではないということになりますね？」

「そういうことになるじゃろ。以前は刃がたっていたらしいがの、祭の神事で子供が触るから危ないつちゅう理由で、刃を処理したんじゃないて」

壮介は「狼の爪」を手に持ってみる。かなりの重量のようで、壮介の腕に筋が浮かび上がった。

「凶器はこれではない。つまり、凶器は刃物であれば何でもよいから……」

壮介は「狼の爪」を見つめながらブツブツ呟く。そしてしばらくして、壮介は「狼の爪」を鞆に戻した。

「新谷君、わしらはこれからどうなるんじゃろな？」

椅子に戻った喜志は、三本目の煙草に火をつける。

「さあ」

それに対する壮介の答えは、意外にも素っ気ないものであった。

「貴志先生の身の振り方は、先生ご自身でお考えください。貴志先生と菅林さんが行ったこと、これがどういう罪になるのかはよく判りません。ただそれにより、一つの家族を目茶苦茶にしてしまい、そして加美大助が命を落とすきっかけを作ってしまったことは、紛れもない事実でしょう……」

壮介は茶色い鞆を見つめながら答える。喜志の方へは振り返らず、背中越しに伝える。

「命を落とす、きっかけか……」

喜志は煙草をくわえながら、壮介の言葉の意味を噛み締める。その意味、他の誰よりも喜志が一番理解していた。理解しなければいけないかった……。

「一旦、戻ります。それでは失礼します」

壮介は振り向き、喜志に向かって軽く頭を下げると、診察室を出て行った。

「……身の振り方が。わしもとうとうヤキがまわったの……」
喜志は大きくため息をつく。

「新谷君。わしゃ、もう明日の朝陽も拝めんよ……」

喜志は何かを諦めたかのように、誰もいない診察室で寂しく呟いた。

四

「ただいま、遥、湿布もらってきたよ！」

壮介と別れた後、加美家に戻った千絵子は玄関の靴を揃えぬまま遥の部屋へと向かう。

しかし千絵子は遥の部屋へと向かう必要はなかった。部屋へと向かう廊下の途中、居間に遥の姿を見つけたからだ。

「ちよ、は、遥？」

「あ、お姉ちゃん、お帰りなさい」

千絵子の姿を見た遥は、笑顔で応える。それに対し千絵子は驚きの表情であった。

「遥、あんた大丈夫なの？ もうちよつと休んでなよ！」

千絵子は遥の元へ駆け寄り、両肩を抱き寄せる。

「うん、私はもう大丈夫。いつまでも泣いてられないから。心配かけてゴメンね、お姉ちゃん」

そして遥の視線は千絵子の腕にぶら下がっているビニール袋へ。

「湿布もらってきてくれたんだ。ありがとう」

「あ、そ、そうなんだ。腰の方はどう？」

すると遥は腰をさすりながら歩いてみせる。本人は普通に歩いているつもりなのだろうが、やはりまだ痛みが残っているのか、その動きはややぎこちないものであった。

そんな遥の姿を見た千絵子は、歩き続ける遥の動きを止め、腕にぶら下げていたビニール袋を渡す。

「まだ痛むんでしょ？ ほら早く貼つといで。何ならお姉ちゃんが

貼ってあげようか？」

苦笑いをしながら自分の肩を抱く千絵子に、遥は舌をペロツと出し笑ってみせた。

「ねえお姉ちゃん……」

姉妹は遥の部屋で、お互いの肩を抱きながら座っている。

遥は千絵子の耳元で、囁くように姉の名を呼んだ。

「本当はね、私まだ……泣きたいの」

そして遥は千絵子の身体に、自分の身体を預けていく。

「お父さん、本当に死んじゃったのかな？」

「遥……」

徐々に涙で湿っていく遥の声、千絵子はそんな妹を強く抱きしめる。

「ごめんね、遥……」

妹を優しく、そして強く包み込む姉の口から出た言葉、それは謝罪であった。それが何に対する謝罪なのか、遥には判らない。しかしその言葉は、千絵子の心の底からの想いであることを、遥はしっかりと感じ取っていた。

「お姉ちゃん……」

千絵子と遥、二人はお互いの胸に顔を埋める。お互いがお互いを慰め合っていた。

「ねえ遥、私と一緒にいよう。お姉ちゃんと、ずっと一緒にいよう」「うん、ずっと一緒だよ……」

すると千絵子は顔を上げて、遥の瞳を見据える。

「遥、この島から出よう。こんな所から早く出てさ、お姉ちゃんと一緒に暮らそう！」

「え……」

千絵子の誘いに、遥は答えに戸惑った。

この島から出る……。遥は今まで、そのようなことを一瞬たりとも考えたことはなかった。この島で生まれ、そしてこの島で育った

遙にとって、この島での生活が全てだったからだ。そんな遙の視線は泳ぎ、動揺を隠せないでいた。

「遙……、困らせてごめん」

答えに困惑する遙の様子に気付いた千絵子は、とっさに視線を横へ反らした。

「うっん、いいのお姉ちゃん。私の方こそごめん」

遙は姉の両手を強く握る。すると千絵子も妹の手を握り返す。

「私、頑張るから。だから、お姉ちゃんも頑張って」

遙は見透かしていたのだ。

自分と同じように、本当は姉も誰かを頼りたがっていることを。

自分が崩れてしまえば姉も同じように崩れてしまうことを。

「遙……」

陽が傾き始め、徐々に暗くなり始めた部屋で、互いを支え合う姉妹は、ずっとずっと手を握り合っていた……。

五

夕方、壮介は部屋にいた。

壮介は畳の上に座り、腕を組んで考えごとをしている。

「……………」

壮介の前、畳の上には剥製から出てきた紙袋と狼ヶ浜の洞で拾ってきた石が置かれている。壮介はそれをジッと見つめながら、何か考えごとをしているのだ。

壮介が悩んでいること……、

それは加美大助が何故あの場所で死んでいたのかということ。

まだ警察の方から正式な発表はないものの、加美大助は他殺でほぼ間違いないであろう。もし他殺ならば、一体誰に殺されたのだろうか？

壮介は洞で白骨死体を発見した時、瞬時に他殺の可能性が高いことを確信した。そして犯人として川住千草ではないかと考えた。

しかし瀬川と喜志の証言により、その可能性は非常に薄くなる。もし反対派大将である加美大助を陥れるのであれば、殺人はあまりにも面倒でありリスクも高い。それに千草が企てていたハニートラップが順調に進んでいたのであれば、ますます殺す必要などない。

何より加美大助がいなくなったことに千草が一番動揺していたことで、千草犯人説の可能性をさらに低くなった。

さらに壮介はある仮説を立てていた。加美大助を殺した人物と、今回二人を殺した人物は同一人物ではないかということ。もしそうならば、犠牲者の一人である千草は当然犯人リストから外れる。

「あー、くそっ！」

壮介は頭をガリガリと掻き毟る。壮介はこの島へ来て、何度頭を掻き毟ったことであろうか。

悩む壮介。しかし悩んではかりというわけではなかった。壮介は確実に真相へと近付いている。

まず確信を持って言えること、それはこの事件に大神島開発計画が深く絡んでいるということ。

そして犯人は被害者に対し、激しい恨みを抱いていたということである。

「ならば……何故恨みを抱くに至ったか？」

殺された志都美と千草は、加美大助にハニートラップを仕掛け賛成派に寝返らせようとした。つまり犯人は加美大助と近い人物である可能性がある。

志都美は賛成派業者の娘、千草は反対派大将の娘……。

ここで壮介は千草の立場について着目する。

千草は反対派大将の娘であり、自身も反対派の活動に積極的に参加していたが、実際は密かに賛成派と繋がっていた、いわば「裏切り者」だ。

そして千草は……、

「うゝむ！」

壮介は渋い顔をしながら頭を掻き耨る。
そして立ち上がった。

「……………」

壮介は犯人について、一つの結論を導き出そうとしていた。
もし千草の殺された動機が、開発計画以外にもあるとするならば、
それを実行しようとするのは、この島で一人しかない。

そしてその犯人が、次に狙うのではないかという人物も、壮介に
は目星がついている。

「よし」

壮介は部屋の隅に置いてあったリュックを肩にかけ、部屋を出る。
「いっちょ、餌をまいてみるか」

「何？ 島を離れるじゃて？」

「はい、家族とかが心配しているので、一旦帰ろうかと思います。
後は警察に呼ばれたらその都度出頭しようかと。捜査本部にはちや
んと許可は取っていますので」

「そうか……急な話じゃの」

喜志は突然の話に驚いてはいたが、普通に考えたらそういうこと
になるであろうと、後になって納得していた。そもそも壮介はこの
島の人間ではないのだから。

「それでは、電車の時間があるので失礼します。どうもお世話にな
りました」

よく考えてみれば、壮介はこの島に来てから喜志に世話になりつ
ぱなしであった。それら感謝の意味を込め、壮介は何度も礼をした。
「ああ、もう行くんかい。また気が向いたら島へ来たらええよ」

喜志の言葉は素っ気ないものであったが、表情は少し別れを寂し
がっている様子。

「はい、またいつか！」

壮介はそっくり残し、診療所を後にして港へと向かった。

「……………」

そんな壮介の姿を、遠くから見つめている人影があった。

「……………」

その人物は、壮介が渡船に乗り込むのを確認すると、ニヤツと笑う。

そして手に持っているものを、胸の前にかざしてみる。

手に持っているもの、それは刃渡り十センチ程の果物ナイフ。使い込んでいるようで、刃には所々細かい錆が付着していた。

持っているナイフを、今度は目の前でかざす。

「これで、ようやく、終わり……………」

そして再び、笑った…………。

第十四章 真相

—

東の空が暗くなり、夏の太陽がようやく沈んだ頃、診療所から二人の老人が出てきた。一人は喜志で、もう一人は診察に訪れた島民であつた。

「ほな先生、遅くまでありがとうございました」

「ええてええて。薬は朝晩一回じゃてな。またなんかあつたら来るとええ」

この老人が今日最後の患者だつたようで、喜志は薬の入つた袋を渡し、玄関まで老人を見送つた。

老人は手を振りながら家路へ向かう。喜志はその姿が見えなくなるまで扉の前に立っていた。

もう完全に陽が暮れ、小さな外灯が申し訳程度に辺りを照らしているだけで、これから島は漆黒の闇に包まれようとしていた。

「さてと……」

老人の姿が見えなくなると、喜志は「診察中」と書かれたプレートを裏返し、中へと戻る。

喜志は待合室の床をホウキでさつと掃いた後、ソファに座る。

そして一度、大きく息を吐いた。

その表情は何か思いつめているような様子……。

喜志は十分程そのままの状態で過ごす。

そして……、

「そろそろじゃな……」

まるで何かを諦めたかのような口調で、ボソツと呟いた。

それと同じ頃、大神神社横の捜査本部で動きがあつた。

「歌藤主任！」

鑑識課の人間が数人、捜査本部へ慌しく入ってきた。玄関にいた制服警官が応対し、歌藤と長渡のいる二階へと案内する。

「失礼します！」

「おう、お疲れさん！」

丁度食事中だった二人は弁当を隅の方へ移動させる。鑑識はやや慌てた表情で部屋へと入ってきた。

「主任、新居志都美と川住千草両名の解剖結果が出ました」

鑑識の一人が封筒の中に入れていた書類を歌藤に渡す。

「おう、どうだった？」

「はい、死亡推定時刻と死因については現場の判断とほぼ相違ないです。ただ……」

ここで説明を続ける鑑識員の表情が陰しくなる。

「ん、どうかしたのか？」

「実はですね……、新居志都美と川住千草の外傷なんですが、調べてみたら妙なんですよ」

「妙とは？」

すると鑑識は書類を何枚かめくり、あるページを歌藤に提示する。そのページに記されているのは外傷と凶器の整合性について。

「犯行に使用された凶器ですが、大神島の間が狼の爪と呼んでいる神社の神具とみられています。しかし被害者の身体につけられた傷と、レプリカの狼の爪と傷痕が一致しないんです。もつと言うと被害者につけられた爪痕でどれを取っても平行についているものがないんです」

歌藤は鑑識から提示されたページに食入る。

「つまり、凶器は別というわけか」

「はい、そういうことになります」

鑑識の見解はこうである。

もし凶器が「狼の爪」である場合、それぞれの傷に長さや深さ、傷と傷の距離等、一定の法則性がなくてはいけないのだ。しかし志都美と千草につけられた傷に、そのような法則性が見受けられなか

った。

二人につけられた傷は法則性なくズタズタにつけられたようなもの。このような傷、「狼の爪」でつけることはできない。

つまり二人を切り刻んだ凶器は、別の何らかの刃物ということになる。

「あともう一つ……」

鑑識が次のページをめくる。

「川住千草の衣服から、微量ではありますがあるものが検出されました……」

そして鑑識は透明の袋に入れられた「それ」を見せる。

……………

こうして捜査本部も、事件の真相へ、一步一步近付いていこうと
していた。

二

時刻は夜九時を回ろうとしていた。

街ではまだまだ宵の口だが、ここは忘れられた過疎の島。港以外は漆黒の闇に包まれ、外には人っ子ひとりいない。

そんな闇の中、診療所の一角からわずかに光が漏れている。ちょうどそこは診察室がある所。

診察室では喜志が一人机に向かっていた。特別何か作業をしているわけでもなく、ただ煙草をくゆらせている。午後診が終わってからずっとこのままでいたのか、灰皿には吸殻が十数本潰されていた。
「……………」

喜志は無言で煙草をくわえる。それ以外、何も動作しない。その姿は喫茶店かどこかで待ち人を待っているヘビースモーカーのようだ。

しかし喜志の表情は「待っている」ことに対する喜怒哀楽が全く

感じられない。達観した……というよりも、どうにもならないことへの開き直りともとれる諦めの念を感じさせた。

「……………」

喜志の身体は呼吸と煙草をくゆらすこと以外では動かない。後ろからみると眠っているように見えるが、その老いた瞳はしっかりと開かれ、左眼は少し充血していた。

そんな状態で、この日の夜はどんどん更けていく。

今までくわえていた煙草が短くなったので、喜志は今日十何本目の煙草を灰皿に押し潰す。そして十分程経ってから、煙草の箱へ手を延ばす。

そして新しい煙草を取り出し、ライターで火をつけようとしたその時……、

喜志のライターを持つが止まった。

喜志はライターを煙草に近付けたままの状態で静止して息を潜める。

耳をすませると、小さな音が聞こえる。

それは足音のようで、診察室の方へと近付いてきていた。

その足音は次第に大きくなり、そして診察室の前で止まった。

ガチャ ギイ……………」

扉はノックもなく静かに開いた……………」

「新谷君！」

診療所の真つ暗な廊下から顔を出したのは、昼に島を出発したはずの壮介であった。まさかの登場に、喜志はくわえていた煙草を床に落とす。

「どうも、夜分遅く失礼します」

壮介は右手で敬礼ポーズを作り、診察室の中へと入ってきた。その姿は昼に診療所を後にした時と全く変わっていない。どうやら自宅に戻ってすぐトンボ帰りしてきたわけではないようだ。

「いやあ、それは構わんが……………」、一体どうしたんじゃ？」

喜志は立ち上がり壮介を迎え入れる。さすがの喜志も、壮介の登場に混乱している様子だ。

「え、いや、はは……」

壮介は笑いながら頭をポリポリと掻く。

それはこの島で壮介が何度も見せる姿。

しかしこの時のそれは、いつものそれと少し違っていた。

壮介の眼は、笑っていない……。

壮介は今、身体は診療所の診察室で、目の前にいる喜志の方を向いているが、その全神経は全く違う場所へと注がれている。

「ちよつとね、餌をまいてみたんですよ」

「餌とな？ ああ、まあ座りいな」

喜志は壮介の言葉に戸惑いながらも、隅に置かれていたパイプ椅子を取り出そうとした。

「あ、待つて！」

しかし壮介はその喜志の動作を制止する。壮介は喜志の手を止め、自分の口元に人差し指を立てる。

……カチャ……

遠くの方で、扉が開くような音が聞こえた。耳をすませなければ聞こえないくらい小さな音だ。

喜志はその音が診療所の扉の開く音であると理解する。

「すみません喜志先生。驚いたでしょう？ 昼に診療所を出る前に裏口の扉を開けさせてもらい、さっきこっそり中に入らせてもらいました」

この診療所には裏口があるのだが、殆ど使用されないため普段は鍵がかけられている。

「なんじゃて？ 別に表から入ってきたらええやろ」

喜志には壮介の一連の行動が全く理解できなかった。診療所の扉はいつも開いたままで、何故そんな面倒な段取りをしてまで裏口からこっそりと入らなければいけなかったのだろうか疑問の様子だった。

「それはですね、俺が表門から堂々に入ってくると、事が起こらないからですよ」

「な、何？」

喜志の口がへ字に曲がる。

「喜志先生、貴方も薄々気付いているはずですよ。この事件の真相を」
「壮介は喜志の手を離すと、再び扉の方へ移動する。」

「俺の考えが正しければ、犯人はまだ全ての殺人を終えていない」
「壮介は扉の前に立つのではなく、扉横の壁に身体をつける。まるで忍者が扉越しに自分の気配を感じ取られないようにしているようであった。」

「壮介は声を潜めながら話を続ける。」

「犯人の最後の狙い。それは喜志先生、貴方なんです」

「……………」

「壮介の言葉に、喜志は何も言い返さない。また驚きもしなかった。しかし犯人は今まで先生を殺さなかった。……否殺せなかった。それは何故か？」

「耳をすませると、足音が一つこちらへと近付いてきていた。その足音は確実にこの診察室へと向かってきている。」

「俺がいたからです。新居志都美の遺体発見以降、俺が診療所で寝泊りしたから、犯人はうかつに手を出せなくなってしまった。犯人がこの連続殺人の中で犯した最大のミスの一つ、それは喜志先生を最初に殺さなかったことです」

「足音はだんだん大きくなってきて、そして診察室の前でとまった。壮介が背中をつける壁の向こうに、誰かが立っている。」

「そして犯人が犯したもう一つの大きなミス、それは……」
「その時、扉のノブがゆっくりと回転する。」

「それは……、俺と必要以上接触してしまったことだ！」

「壮介はノブをギュツと握り、そして扉の向こうの人物よりも早く扉を開け放った。」

「あっ！」

突然のことに扉の向こうの人物は思わず声を上げ、立ち尽くしてしまふ。

「そうですね、千絵子さん……」

壮介は扉の向こうにいた人物の瞳をしっかりと捉え、その名を呼んだ。

壮介の後ろ、そこには頭を抱えて跪く喜志の姿があった……。

三

「な、な、な……、何でアンタがここに？」

千絵子は戸惑う。それは急に扉を開け放たれたことではなく、扉の向こうに壮介が立っていたからだ。千絵子は思わず後ずさる。

その時、背中に回されていた右手に何か光る物があった。

それを見た壮介は、これで確信する。

大神島で起こった一連の連続殺人事件、犯人が千絵子であることを……。

壮介は一度髪の毛をガリガリと掻き毟った後、口を開く。

「千絵子さん、あなたがここへ来たのは、俺が島を離れたことを確認したからですね？」

壮介に話かけられた瞬間、千絵子は我を取り戻したのか視線が鋭くなる。しかし壮介の言葉に対して反論は出てこない。

「確かに俺は本土行の渡船に乗りました。実はその後、観光ホテルの宿泊客用渡船の船頭に頼み込んで、こっそり大神島に戻ってきました。そしてあなたがここへ来るのを、その辺に隠れてずっと待っていたんですよ。いやあ、暑かったあ」

壮介は最後苦笑いを浮かべながら千絵子に向かって話す。後ろでうな垂れている喜志には全く目もくれていない。

そして壮介は、ゆっくりと千絵子へ近付いていく。

「な、何？」

壮介の接近に、千絵子は視線で威嚇するが、それだけで怯む壮介

ではない。壮介が一步近付くと、千絵子は一步後ろへ下がった。

そして遂に千絵子の背中が壁につく。それでも壮介は千絵子の方へと近付いていく。壮介はお互いの息が顔に触れるところまで近付き、止まった。

「な、な……」

千絵子は動揺し、声が出ない。ただその鋭い視線で壮介を睨み付けることしかできない。

壮介は視線をきることなく、自分の左手を動かす。

「あ……」

壮介の左手は、千絵子の背中に隠れた右手へと伸びる。そしてその右手から何かを奪い取った。

千絵子の手から奪い取ったもの、それは刃渡り十センチ程の果物ナイフであった。

「千絵子さん、これですね？」

壮介は一步下がってから、そのナイフを千絵子に見せる。それはこのナイフが、一連の殺人事件で用いられた凶器がどうか問いただしていることを意味していた。

ナイフの刃には、所々に小さな錆が付着している。それら錆は、まるで洗っても流れ落ちない被害者たちの血痕のようでもあった……。

壮介はナイフを持ったまま診察室へと戻る。しかし千絵子は壁に張り付いたまま動けないでいて、その額には脂汗が滲んでいた。

「アンタ……、どうして？ どうしてっ！」

千絵子は裏返った声で壮介の背中に言葉を浴びせる。壮介はその声に足を止める。

「千絵子さん、あなたがここへ来た理由……、それは俺がいなくなつたのを見計らい、喜志先生を殺害するためですね」

壮介は千絵子から奪ったナイフを机の上に置き、床にへたり込んでいる喜志を介抱する。

「先生、立てますか？」

「ああ、すまん。わしは大丈夫じゃ」

喜志は壮介から差し伸べられた手を取り、ゆっくりと立ち上がる。そして壮介は再び千絵子の方へ向き直る。

「そして……、大神島で起きた一連の殺人事件の犯人。それは、あなたですね」

壮介が言葉を放った瞬間、壮介と千絵子の間に凄まじいまでの目に見えない電流が走る。それはお互いの瞳から発せられ、お互いその電流に飲み込まれまいと必死に踏みとどまる。

「ち、千絵子……」

壮介の後ろ、喜志は寂しそうな視線を千絵子に送る。

千絵子にとって、壮介の鋭い視線よりも、喜志の視線の方が正直堪えたであろう。

「千絵子さん、貴志先生。少し俺の考えを、聞いてもらえませんか」

壮介は千絵子の瞳を見据えたまま、診察室の中へ入るよう促す。

少しの間があつた後、千絵子は一度大きく深呼吸をしてから診察室へと入っていった。

そして、大神島連続殺人事件の真相とともに、「惨劇の夏」の終焉が幕を開ける……。

四

「大神島で起こった殺人事件で、俺が最初に気になったのは、新居志都美の殺害状況でした」

診療所の時計の針は十時を回ろうとしていた。

過疎の島においては深夜と言ってもよい時刻、診察室では壮介、喜志、千絵子がパイプ椅子で円を作っていた。

「警察から発表はありませんが、状況からみて新居志都美の殺害現場は遺体が発見された廃倉庫で間違いないでしょう。新居志都美が姿を消した時間帯は、まだ祭の真っ最中で人通りも多かった。そん

な中死体を担いで倉庫へ運ぶなんてとても考えられない。祭の夜、新居志都美・丸桑洋二と一緒にいたあなたは、一旦二人から離れ、丸桑洋二が祭に気をとられているのを見計らい、新居志都美を神社から連れ出した」

もう遠い遠い昔の話のようであるが、それはつい二日前の出来事。それ程この事件は、関係者に一日を長く長く感じさせていた。

壮介は祭の夜に起こったであろうことを話し続ける。喜志も千絵子も、視線を床に落としている。

「ここで一番気になったのは犯人像なんです。あの倉庫が殺害現場なら、新居志都美は一人もしくは犯人と二人で倉庫へ行ったことになる。あの倉庫はいくら人通りの多い石段から近いとはいえ、中はもちろん周辺も真っ暗。島の外から来た女性がノコノコと足を運ぶような所じゃない。つまり新居志都美が倉庫で一緒にいた人物がいるとしたら、それは新居志都美が絶対的な信頼をおいている人物ということになるんです」

ここで壮介は一度言葉を止める。それはまるで「誰か」からの答えを待つかのようだった。

しばらく沈黙が続き、その「誰か」が顔を上げる。

「それが、私だっというの？」

壮介の方へ向けられた千絵子の視線、それはとても鋭い。しかしその口調は恐る恐るという感じ。明らかに動揺していた。

そして壮介は再び話しはじめる。

「新居志都美は大神島に何度か訪れたことがあります。親が開発計画賛成派という立場上、島内を自由に歩けたとは考えにくい。そんな状況下で、大神島で親交のある人物というのは限られている。おそらく、菅林と瀬川兩名、そして川住千草とあなたの四人でしょう。しかしいくら親交があるとはいえ、何の警戒もなしに歳の離れた男性とあんな場所へ行くなんてこともちよつと考えにくい」

事実、倉庫で発見された志都美の遺体に誰かと争ったような形跡は見られなかった。つまり志都美は何の抵抗もなく、抵抗するとい

う気さえおこることもなく殺されたということ。

そして、それが可能なのは……。

「昨日瀬川さんに会うため、宇方総合病院へ行ってきたのですが、実はその後に島を既に離れていた丸桑洋二と会ってきたんです」

「よ、洋二と……」

思わぬ人物の登場に、千絵子の声は震える。

「丸桑洋二から、あなたと新居志都美の関係について色々聞かせてもらいました。あなたと新居志都美は職場の同僚だそうですね。歳はあなたの方が上ですが、職場ではあなたの方が後輩。しかし新居志都美はあなたのことを先輩と呼び、姉のように慕っていたそうですね」

壮介は千絵子の瞳を見据える。その瞬間、千絵子はサッと目を逸らす。今の千絵子はとても壮介と対峙できるような状態ではなかった。

しかし壮介は千絵子の瞳を捉えようと喰らいつく。追う壮介と避ける千絵子、そんな無言のやり取りが二人の間で行われていた。

「千絵子、逃げたらあかん……」

その時、今まで沈黙していた喜志が口を開く。

「せ、せんせい……」

千絵子は膝の上においていた手を握り締める。喜志の放った一言、それは千絵子にとってとても重い一言だったのであろう。

「わしもあの遺体状況を見て、顔見知りの犯行であると確信した。

千草も殺された今、この島で志都美をあないな状況で殺害できるんは、お前しかおらんのじゃて」

最初、喜志はごく普通に声を出していた。しかし言葉を紡いでいくにつれ、次第にその声に痰がからみはじめ、最後にはまるで喉から絞りだすような声となっていた。

それ程喜志にとって、この現実が辛く悲しいものなのだろう……。『すまん新谷さん。さ、続けてくれ』

壮介は一度喜志のほうへ頭を下げ、そして口を開いた。

「はい、次に川住千草の殺害についてですが……、お話しする以前に、一つ確認しておかなければいけないことがあります」

そして壮介はポケットから一枚の写真を取り出す。その写真に写っているのは、殺された二人の少女と戯れる加美大助の姿。

「現段階ではあくまで俺の推測です。もしかしたら俺はとんでもないことを考えているのかもしれない……。でもあえて言わせてもらいます」

壮介は一度口を真一文字にくつつけてから、千絵子に向かう。

「あなたは三年前、父である加美大助を殺しましたね。この一件が原因で……」

壮介は今まで自分の方へ向けていた写真を千絵子の方に向ける。

「！」

その時、部屋にパンという渴いた音が響く。

それは喜志が自分の太腿を平手で叩いた音であつた……。

五

「三年前、あなたは父の急な心変わりにとても動揺されました。つい昨日まで反対派の旗頭として運動を行っていた人物が、今日になつて一転賛成にまわろうとしているのですから、そりゃ戸惑いますね」

ここで壮介はもう一つ重要な推理を提示する。

千絵子は以前より大神島開発計画に全く無関心であると言つてきた。しかし実際は当時の父に勝るとも劣らない開発計画反対論者だつたのだ。

この一連の大神島連続殺人事件の動機、それは開発計画賛成派へと寝返つた父、そしてハニートラップを使って父を寝返らせた賛成派の人間への復讐であつた。

「あなたは父親が賛成派についてしまったことを知り、絶望と怒り

の虜になってしまった。そしてそれがピークになったある日、狼ヶ浜で少女たちと事に及んでいた父を殺害し洞の奥に埋めた」

壮介がここで述べたこと、これらはあくまで壮介の推測。しかし千絵子の絶えず泳いでいる視線が、壮介の推理の信憑性を高めていた。

「しかし新谷さん、それなら一つ判らないことがあるんじゃないか」

喜志の問いかけに壮介は視線を横に流す。

「もし千絵子がそういう流れで大助を殺したのならば、何故その時に千草たちを殺さなかった？ 何故三年も経った今、殺さなければならなかった？」

もし千絵子がハニートラップのことを当時から知っていたのなら、三年前に二人を殺害していてもおかしくはない。三年も経過した今、立て続けに殺害するというのは確かに不自然であった。

そんな喜志の疑問に、壮介は答える。

「おそらく当時の千絵子さんは、誰が父をハニートラップにかけたのかまで判らなかったのではないですかね？」

これは喜志に対する答えであったが、壮介の視線は喜志ではなく千絵子に向けられていた。壮介の言葉は喜志に対する返答であると同時に、千絵子に事実を確認しているものだった。

「新居志都美がハニートラップに関わっていたと知ったのは、同じ職場で働き始める直前、もしくは働き始めた後だと思います。特に川住千草に関しては、殺害の直前まで知らなかったんじゃないですかね？」

壮介は明らかに千絵子からの返答を求めている。しかし千絵子の口からは何も言葉は出てこない。

そして喜志は壮介の推理にただただ目を丸くするのみであった。

ここで壮介は一度髪の毛をガリガリと掻き毟る。

「ここで俺は悩みました。ならば千絵子さんはいつ川住千草に気付いたのか？ それを教えてくれたのは現在入院中の瀬川さんでした」
「何、瀬川が？」

壮介は前日の夜、瀬川と交わした内容を話し始める。

三年前の賛成派と反対派の対立、瀬川と千草が交際していたこと、そして大助の突然の変貌についてのこと……。

そして壮介は自分の頬に指をあてる。その指の先には、狼ヶ浜で千草につけられた傷跡があった。

「新居志都美の遺体が発見された日の夜、俺は狼ヶ浜で千草と会いました。この傷はその時につけられたものです。これと同じ傷が、三年前の加美大助の頬にもあったのです」

壮介の頬に残る傷、もう瘡蓋もとれてきており、ピンク色の皮膚がのぞいている。

これと同じものが、あの時の加美大助にもあった……。

「千絵子さん、あなたはあの日俺と川住千草と一緒に歩いていく姿を、偶然見てしまったのではないですか？」

壮介は再度千絵子に確認する。しかし千絵子の口が開くことも、首が上下左右に振られることもない。

「そしてその後、加美家へ戻ってきた俺の頬を見て、あなたはとても驚いたでしょう。あの時の父と同じ傷が、俺の頬にもあったのだから……。そしてこの時、あなたは父を陥れた一人が川住千草であると気付いた。違いますか？ 違うなら違うと言って下さい」

壮介は強い口調で千絵子に詰め寄る。

「……………」

しかし千絵子の視線は泳いだままでまるで反応なし。もはや壮介や喜志の声がしつかりと届いているかすらも疑わしい。

「ということは、千絵子が大助を嵌めた人間を知ったのは、ホンマにつき最近ということになるんじゃないの……」

「そういうことになりますね。正直な所、ハニートラップにかけたのが新居志都美と川住千草であるとかちゃんと確信を持てたのは、狼の剥製から写真が出てきた時ではないですかね」

そして千絵子はその日の夜、千草を殺害した。

船着場の待合所に呼び出したのか、偶然その場所で千草を見つけ

たのか、今となつては千絵子しか知らない……。

ここで壮介は千絵子に背を向け、喜志と向かい合う。

「そして喜志先生を狙うと決めたのは、おそらく今日の昼です」

「今日の昼じゃと？」

あまりのことに喜志の声が裏返る。

「はい、千絵子さんが先生から遙さん用の湿布を取りに来て、その後俺と入れ替わりで部屋を出て行きました。そして俺と先生で大神島に関わるとても重要な話をしましたよね？　実はその話を扉の向こうから聞いていたのでしょうか」

「な？　ち、千絵子！……」

喜志は思わず席から立ち上がり、千絵子の視線を追う。今まで壮介の視線は避けて続いていた千絵子であるが、喜志の視線には合わせてきた。

「せ、先生……」

喉がカラカラに渴いているのか、千絵子の声は魔女のようになっていた。

「千絵子さんはそこで先生が一連のハニートラップに絡んでいることを知り、連続殺人の終幕として先生の殺害を決意した」

壮介は再び千絵子の方へ。

「あ、あ……」

千絵子は何かを言おうとしている。しかしもう声にならない。

「先にも言いましたが、一連の連続殺人事件最大のミス、それは先生を一番先に殺さなかったことです。しかし先生が三年前の一件に絡んでいることを知ったのはこの土壇場……」

壮介は椅子から立ち上がり、千絵子の元へ。

そして千絵子の両肩に手をポンと置く。

「だから、だから……、千絵子さんが実行した殺人計画、これは最初から上手くいくものではなかったのです。殺人による復讐というレールの行き着く先は、はじめからここしかなかったのですよ」

壮介が手に力を入れた瞬間……、

渴いた砂浜に作られた砂の城が僅かな風に飛ばされ崩れていくように、千絵子の身体は椅子から滑り落ち、診察室の床の上に崩れた……。

六

カチ カチ カチ……

時計の針は十一時をさす。

診療所の診察室には三人の姿がある。

一人はパイプ椅子に座り、もう一人は立った状態。そして最後の一人は診察室の床にペタンと座り込んでいる。

そして床に座り込んだ人物へ、他の二人からの視線がずっと注がれていた……。

「千絵子さん、もういいでしょ……。全てを、話してくれませんか？」

立っている人物……壮介は、座り込んでいる人物……千絵子へ語りかける。

千絵子は一度壮介の方を上目遣いで見るが、すぐに視線を逸らす。そこに一見軽いカンジだが、実際は気丈で妹想いである加美千絵子の面影はどこにもなかった。

「千絵子……」

パイプ椅子に座る人物……喜志は目の前でうな垂れる少女を哀れんでいた。

何故こんなことになったのか？

喜志だけではなく、壮介もそう感じていた。そして何より千絵子自身もそう感じているのかもしれないかった。

きっかけは三年前に起こった。

喜志と菅林が仕組んだハニートラップ。新居志都美と川住千草を加美大助へとけしかけ、そして加美大助を腑抜けにしていまい、賛成派へと寝返らせてしまった。

それを知った千絵子は絶望と怒りのあまり実の父である加美大助を殺害し狼ヶ浜の洞に埋めてしまう。

そして怒りの収まらぬ千絵子は、父を嵌めた人間を捜し出し復讐することを決意したのだ。

三年前のあの日、父を手にかけてその日から、千絵子は狼になったのだ。自分と家族の誇りを傷つけた者たちを地獄の果てまで追い続け、そして惨殺する。

まさに「狼」であつた……。

「新谷さん……」

喜志が弱弱しい声で壮介の名を呼ぶ。

「千絵子は……千絵子はどうなるんじゃ？」

すると壮介は無言で首を振る。

「そうか……、すまん」

壮介が首を振った意味を理解したのか、喜志は話題を切り上げる。決して判らないわけではない。

口に出したくないのだ。

例えつい最近知り合った仲とはいえ、大神島での楽しい時間を共に過ごしたのだ。そんな人の行く末など想像したくないのだ。

「千絵子さん、俺も喜志先生も警察じゃない。俺たちはあなたを裁けない。あなた自身の身の振り方は、あなた自身で決めてください」そして壮介は千絵子の前でしゃがみ込んだ。

「ただ、あなたのとても大事な人を、これ以上悲しませない選択を、……お願いします」

壮介は小さな声で千絵子に語りかけ、そして立ち上がった。

「……………」

千絵子は顔を伏せたままその場を動かない。

ただ、千絵子が座り込んでいる床の上に、ポトツ　ポトツ　と小さな雫が滴り落ちていた。

それから三十分程経過した頃、

突然診療所の扉が開く音がした。

慌てて壮介と喜志が診察室から出ると、そこには歌藤と長渡、そして遥の姿があった。

「どうも、こちらに加美千絵子さんはいらっしゃいますか？」

歌藤の言葉に壮介と喜志は顔を見合わせる。

「どうしてここが？」

お互いの気持ちを喜志が代弁する。

「妹さんから、姉が診療所へ行くと言ってから帰ってこないと聞いたもので、夜分遅く失礼とは思いますが訪ねさせてもらいました」
そして長渡が診察室へと入る。長渡が診察室へ入ってきてても、千絵子は床に座ったままの状態。

「加美千絵子さん、新居志都美ならびに川住千草殺人の件で幾つかお伺いしたいことがある。捜査本部までご同行願えませんか？」

長渡の言葉に、千絵子は全く反応しなかった。

「お姉ちゃん……」

その時、診察室に小さく弱い声が響く……。

その声に千絵子は敏感に反応する。千絵子はゆつくりと振り返り、声がした方を見つめる。

そこには唯一の肉親であり、最愛の妹の遥がいた。

二人の間には距離があった。しかし二人の瞳は寸分違うことなくお互いの瞳を射抜いていた。

二人は二人だけにしか通じない言葉を交える。

そして……

千絵子はゆつくりと立ち上がり、扉の方へ向かう。

「さ、行きましょう」

歩き始めた千絵子を見て、長渡が素早く横につく。
何歩か進んだ時、千絵子は遥とすれ違う。

「お、おねえちゃん……」

遥の顔は涙でグシャグシャになり、もう言葉にならない……。
この時、千絵子の目から涙は零れてこなかった。

ただ、一言……

ごめん はるか

遙にしか聞こえない優しい声で、千絵子は最愛の妹、遙に伝えた。

そして壮介たちとすれ違う時、千絵子は再び口を開く

全ては島のため

先程妹に声をかけた時の姉の優しさはない。

何か、寂しく哀しい感じのする声……。

この時、壮介はすれ違う千絵子の横顔をみる。

まるで自らの終焉を悟ったかのような表情だった……。

第十五章 「夏」のおわり

『全ては島のため。』

私は島を守るため、島の生活、伝統、文化、そして何より私たちの爺さん婆さんたちが、何十年何百年かけて築き上げてきた島の「誇り」を守るために……、

私は狼になった。

狼となった私は、島の「誇り」と由緒正しき加美の名を汚した、我が父を手にかけた。

そして私は島を変えてしまおうとする者たち、特に加美家を汚そうとした者たちを許さない。

私は父に近付いた人間が誰なのか探り続けた。

そのうちの一人、志都美のことはすぐに判った。私は志都美に近付くため、それまで殆どいじったことのない髪型と髪の毛の色を変え、服装も派手で露出の多いモノを選んで着て、志都美の嗜好に合わせるようにし、そしてようやく志都美が働いているシヨップに潜り込むことができた。

同じ職場になると、すぐに志都美は私と一緒に行動することになった。だって私が志都美の趣味に合わせたのだから、ソリが合わないなんてことはない。そして志都美は私が思っていた以上に私のことを慕い、職場では志都美の方が先輩であるのにも関わらず、私のことを先輩と呼んだ。

嬉しかった？ 楽しかった？

とんでもない、虫唾が走る！

だって、私は志都美が陥れた加美大助の娘なのに、志都美は全く気にしていなかった。

何故かって？

それはね、覚えていなかったんだよ。

かつて自分が陥れた男の顔と名前を、全く覚えていなかったんだ

よ。

それを知った私は、表面では笑顔でも、その裏側では怒りの炎をメラメラと燃え盛っていた。

こいつ、絶対殺してやるって思ったよ。

千草のことは、怒りというよりも悲しかった……。

子供の頃から一緒に遊んだ仲だから、千草が父の一件に絡んでいるって知った時、目の前が真っ暗になった。

ああ、こいつも殺さなきゃなんないんだって。

あの夜、私は茫然として船着場を歩いていて。正直殺すことに悩んでいたからだ。

そんな時、向こう側から歩いてくる人影があった。それは千草だった。

そこで見た千草は、今まで私が見たことのない千草だった。

千草は私のことには気付かず、まるで酒に酔ったかのように港をフラフラ歩いていた。

その時私は千草の目を見た。

背筋が何度もゾクツとした。

まるで千草の姿をした魔物のような感じがした。

その時、私は思った。

あ、殺さなきゃいけないんだ……って。

千草を殺して、私と島のための復讐は終わったと思っていた。

瀬川があんな事になって、菅林もただでは済まない。

島の開発計画はいずれ頓挫する運命、命だけは助けてやろうと思った。どうせこれから先、負債やら何やらで生き地獄が待っているのだから。

でも……まさか喜志先生まで絡んでいるとは思っていなかった。殺さなきゃって思った。

でも、それは遅かった。

確かに、一番先に殺しておくべきだった……。

私が犯した一番大きなミス、

それは喜志先生を最初に殺さなかったことではない。

アイツを事件に近付け過ぎたことだと思う。

アイツさえいなければ、私は全てやりきることができた。

でも……アイツがいたからこそ、私は自分の犯した罪の重さに気付くことができた。

結局私が一番島と加美の名を汚していたのだった。

そしてあの時、狼となっていた私に、私が一番大切にしている妹のことを思い出させてくれた。

だから、今私は思う。

この時、アイツに出会えてよかったと。

そう……新谷壮介に』

……… 大神島連続殺人事件容疑者 加美千絵子の手記より………

翌朝、壮介は港に立っていた。

壮介の後ろには川住旅館の面々、駐在の島泉、そして遥がいた。

喜志は警察による事情聴取に出向いているため、この場にはいない。

そして千絵子は、昨晚のうちに所轄署へと連行されていった……。

「まだか？」

船着場に停泊している船頭が壮介たちにむけて叫ぶ。

「すみません、主任さんがまだなもんで」

壮介は振り返って返答する。

容疑者逮捕により、大神島の捜査本部は所轄の宇方署へと移された。捜査員の大半は明朝撤収していったが、歌藤だけが遅れて合流することになった。

渡船なんて何度も往復しているのだから、いちいち待つこともないのだが、歌藤が一言壮介に礼を言いたいとのことで、こうして壮

介は歌藤がやってくるのを待っているのであった。

「あ、来られました！」

島泉が声を上げる。面々は港の入り口方面に、こちらへと走ってくる歌藤の姿を発見する。

「いや、ゴメンゴメン。急にトイレをもよおしてしまつてな」

歌藤は額の汗を拭いながら壮介たちに向かって頭を下げる。

「さてと、新谷さん」

そして歌藤は壮介の前に立ち、キリツとした表情になる。

「今回の事件、解決に協力していただき、署員を代表して感謝の意を表します。どうもありがとうございます」

言葉の最後、歌藤は壮介に向かって敬礼をする。

「いえいえ、そんなお堅いことしないでくださいって。俺はそんな大したことしてないですから」

「いやいや何を言うか。君がいなければここまで辿り着けなかったのは事実だ」

すると歌藤の言葉に、周囲の取り巻きが合いの手を入れる。今ここにいる、壮介の周りに集まってきた全員が、そう感じていた。

「警察は警察で、物証を掴んでいたんでしょ？ そんな買い被らないで下さいって」

事実そうであった。

昨晚捜査本部が加美千絵子を訪ねたのには、ちゃんと根拠があった。

川住千草の遺体からあるものが検出されていた。

それは千草以外の毛髪。それも脱色して特別な処理を施された毛髪であり、それを分析したところ、とある有名な美容室で使用されている成分を検出。そしてその顧客名簿を照会したところ、加美千絵子の名前が出てきたのであった。

「おゝい、はよしてくれっ！」

全く空気を読まない船頭の声が聞こえ、壮介と歌藤は会話を止めて視線を合わせる。

そして二人は横に並ぶ。

「ではみなさん、俺たちはこれで失礼します。今までお世話になりました」

壮介は深く頭を下げる。それに続き、歌藤は敬礼をした。

「新谷さん、こんな所ですが、是非またいらして下さい。歓迎しますよ」

「今度はタダで泊めてやるよ」

川住夫妻はお互い寄り添いながら壮介たちを見送る。

まだ愛娘を失った悲しみが癒えていないものの、事件解決に貢献してくれた壮介に、何としても礼をしたかったのだ。

「はい、ありがとうございます！ では！」

壮介と歌藤は手を振りながら棧橋を歩く。川住夫妻も大きく手を振る。

そしてあと一歩で渡船に乗るという時だった。

「新谷さん！」

遥が棧橋を駆けてきた。

「遥さん？」

壮介は足をとめ、遥の方へと振り返る。

遥は壮介の元まで走ってくる。

「……先に乗ってるぞ」

その姿を見て歌藤は場の空気を読んだのか、壮介を残して渡船の奥へと入っていった。

「はあ、はあ……」

急に思い立って走ったのか、それ程長い距離ではないが遥は肩を上下させている。

「遥さん、どうかしましたか？」

遥の行動に、壮介は少し戸惑い、頭をポリポリと搔く。

「新谷さん……、わ、私……」

顔を上げた遥、その瞳は壮介の瞳を射抜く。何か大切なことを伝えようとしている目であった。

「はい？」

壮介は遙からの言葉を待つ。

しかしその後遙から言葉は出てこない。

そして遙は再び顔を伏せる。

「い、いえ……、何でも、何でもないです。すみません……」

遙は小さな声でそう呟いた。

「は、はあ……そうですか」

壮介はますます訳が判らず頭を掻く。

「では、遙さん。またいつか会いましょう」

船頭の視線に気付いた壮介は、遙にそう言い残して渡船の中へ入ろうとする。

「新谷さんって、街の出身なんですよ？」

その時、遙は再び顔を上げる。

「え、そ、そうですけど」

「こんな島よりも、ずっとずっと楽しい所ですよ？」

壮介は遙が何を言っているのか、全く掴めない。ただ相槌をうつことしかできなかった。

「それこそ、こんな島のことなんかすぐに忘れてしまつくらい、充実した生活なんですよ？ 羨ましい……」

遙は一步前に出て、壮介の瞳に視線を合わせる。

そして壮介にしか聞こえない声で呟く。

「私のこと、連れ出してほしい……」

「え……」

突然のことに壮介は戸惑い絶句する。目を見開き、髪の毛をガリガリと掻く。

するとその姿を見た遙がプツと吹き出す。

「新谷さん、冗談ですよ……」

そして遙は振り返り、壮介の元から離れていった……。

その姿を見送ってから、壮介は渡船の中へと入っていった。

そして渡船は大神島を出発する。

「話は済んだのか？」

歌藤は一番奥の席に座っていた。

「ええ、まあ大したことでなかったです」

壮介は頭を掻きながら歌藤の横に座る。

「そういえば、一つ聞きたいことがあるんですが、よろしいですか？」

「ん、何だ？」

壮介は歌藤へ視線を合わせずに話す。

「俺の素性、知っていたんでしょ？」

壮介の素性とは……。

「勿論だよ。警察の情報網を舐めたらダメだぞ」

壮介の素性……、それはこの夏壮介が巻き込まれ、そして壮介が解決したもう一つの事件のこと。

「私と長渡で申し合わせたんだよ。君を泳がせてみようってね」

「なるほど、どうりで宇方総合病院で瀬川に誰もついていなかったわけですね」

壮介は一度新居志都美殺害の容疑者としてマークされた。そんな人物をこれ程自由に行動させていることを不審に感じていたのだ。そして川住千草の重要参考人である瀬川に警官が張り付いていないことで、ますます違和感を覚えたのだ。

「まあ民間人をこういう形で利用するのは少々マズいのだが、おかげで事件は解決したのだから万々歳だよ！」

「ハハ……」

高笑いする歌藤を見て、壮介は苦笑いを浮かべる。

壮介は視線を落とす。

そこにはカメラがある。

このカメラは先の事件で知り合い、そして命を落とした「ともだち」の遺品。

思えば先の事件に巻き込まれたきっかけを作ったのは「ともだち」

であつた。

そして今回、壮介が大神島へやってきたそもその理由は、大神島の祭を撮影するという「ともだち」の遺志を受け継いだため。

「まーたアンタのせいで事件に巻き込まれたよ。このトラブルメーカーが……」

壮介はカメラを見つめながら、小さな声で呟いた。

渡船はベタ凧の海を進む。

大神島から本土まで五分もかからない。

間もなく壮介の「惨劇の夏」が幕を閉じる。

そして壮介たちを乗せた渡船が本土の船着場へ到着する頃……、

大神島の栈橋に遥の姿があつた。

遥は手の届きそうな距離にある渡船をじつと見つめ、

そしてピュウと夏の浜風が遥の髪を揺らした時、

「さようなら」

遥の口元が、そう動いたように見えた……。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070e/>

新谷壮介シリーズ S - P r o o f 2 狼の潮

2010年10月8日14時24分発行